
アンノウン・エンジェル

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・エンジェル

【Nコード】

N7677A

【作者名】

雨月

【あらすじ】

転校する時雨が試しに占い屋に入ったが、そこから運命？は廻り始める！彼は自分の未来を守る為占いのおじさんと契約をし、天使になった！

そのいち！ 一日一善（前書き）

初めての投稿です。まあ、一人でも読んでくれたら続きを書こうと思います。

そのいち！ 一日一善

「今日には、彼、天道時時雨君は引つ越すそうだ。てんどうじしぐれ」

朝のHRで僕の事を話す担任の先生。

「すぐ引つ越すそうだ。皆、世話になっただろう。別れの挨拶はきちんとしておくように、以上！」

そういつて先生は教室を出ていった。今僕は、自分の事を机に座って聞いていた。

「なあ、いつ引つ越し決まったんだ？」

そう聞いてくる友達を適当にあしらう。

「前からさ。」

そしてこう答える。

「今までアリガトな！」

数人集まって来た友人に別れの挨拶をする。

「じゃあまたな！」

そして鞆をもち、教室をでる。校門を出るまで振り返らずに歩く。そして校門を少し行った所で、振りかえり校舎に最後の挨拶。

「短い間ありがとう。」

少し学校から離れた所まで歩いてきた。そして僕の運命は決まっていたのだろう。いつもの帰宅コースに古い屋がたっていた。この前出来たと聞いている店だった。（これからの生活をうらなってみるか？）

試しに店にはいる。

「いらっしやいませ。」

初めて古い屋なんかに入るが、こんなもんだろうか？客は僕以外

おらずそのまま違う部屋に案内された。

「いや〜うれしいね。初めての客だ。丁寧もてなしてくれたまえ。」
そこにいたのは、想像していた神秘的なお姉さんではなく健康サ
ンダルをはいたおじさんだった。

「さて、早速占いをしてあげよう。君は何座だ？」

星座占いだったのか？この店は？

「さそり座ですけど？」

うんうんうなずくおじさん。

「それで、君、いや時雨君は何を占ってほしいんだ？」

「えーっと、これから引越しするんでこれから先、学校生活など。」

うーん。と唸ってから、おじさんはこう答えた。

「か、かわいそうにまさかこれほどとは、天界と魔界が戦争を始め
るなど・・・」

そんな意味が分からない事を言った後、眺めていた僕の顔をマジ
マジと見始めた。更にウンと頷いた後に一枚の紙を取り出した。

「実は、時雨君に頼みたいことがあるんだ。君の未来は、危ないも
うまもなく日常とグッバイするだろうとおもわれる。そこで君には
天使になつてもらいたい。よければ、ここにサインと目標をかい
てくれ。」いきなりこんな事を言われたら怪しむだろう。しかし僕
は昔から騙され易かった。

「具体的になにすればいいんですか？」

「ついつい聞いてしまう自分。そしてなぜか泣いている占いのおじ
さん。」

「初めてだ。信じてくれる人間は・・・。時雨君これは契約書だ。
まず名前をかいてくれ。」

早速記入。その後。

「ここに目標を書いてくれ、なんでもいい。我人生萌でもいいし、
ほんとなんでも。」

なんでもいいなら書かせてもらおう。

一日一善

「……シンプルだね。きにいった。」

それから僕は天使になった。……らしい。生活してれば時期解るといわれ店を後にする。

最後におじさんは小さな水晶を渡してくれた。

「お守りさ、持って行きたまえ。」

家に帰り着くと母さんが立っていた。

「遅い！時雨。さあ、はやくのって。」

指差す方には車があり、既に妹がのっていた。

「兄貴遅いよ。」

謝り、乗り込む。

「ふーんだ。あの事母さんにばらしてやる。」

あのこと？

「実はね。母さん兄貴振られたんだよ。」

僕の胸がちくりと痛む。

「初恋だったのにね。」

ああ、痛い。胸が。

「それに向こうは付き合うきはなかったんだって！」 し、しらなかった。僕は嫌われてたのか……。

「ま、嘘だけどね！最後のは。」

母さんは苦笑しながら、

「ちゃんと謝りなさい。かわいそうよ。時雨が。」

しかし僕にゴメン兄貴という言葉は聞こえてこなかった。シヨツクで気絶していたのだ。ちなみにそのときできた傷は計り知れない程だった。

それから数十分後に復活した僕は日常から離れつつあることに気

がついた。

妹の背中になにか生えている気がする。それは黒いもやもやだった。悪霊？かなっと考えたが違うようだ。なぜならそれを教えてくれる人がいたからだ。僕のなかに。「こんにちは」

そういつて耳元から声がきこえてきた。

「・・・？」

僕の肩の上に小さな僕が乗っていた。その姿は天使だった。羽の色をのぞけば。その色は血のような赤だった。その事に気がついた天使は、

「ああ、これ？おっさんに聞いたところ俺つまりあんたは罪人だそうだ。罪人の天使は紅い羽になるんだと。」

僕が何かしただろうか？

「さあてね？自分で考えな！ところであんたの妹さん悪魔みたいだねーあんた気がついてた？」

悪魔だったのか？しかし何で分かるんだ？もやもやがあるからか？

「よく見な、あれは翼だ。悪魔のな！」その後天使にいろいろ聞いてみた。罪人になった僕はどうしたらいいか。妹はあのままでもいいのか？後、悪魔と天使は仲が悪いのではないか？答えはシンプルなもの、

「罪人天使は、あまりいないらしい。だからアン・ウン・エンジェルと言われているそうだ。妹は前から悪魔みたいだし、大丈夫だ。ま、暴れたら危険だがな。最後の質問は答えは仲が悪いわけではない、それは昔の話した。」

それを聞いて安心した。「時雨、引越し先の高校は広いそうだから。」

母がそんなことを言うてくる。

「別にそんな事どうでもいいよ。」一旦天使との心の会話を中断し答える。

「今心配する事は番長みたいな人からまれた時のことだよ。」

僕は昔そういった事に巻き込まれた事がある。あの時、気がついたら番長は僕に謝っていた。そしてなぜか番長になってしまった。

それから今まで僕には友達があまりできなかった。

「大丈夫。そんなことはないよ。兄貴なら今度こそできるよ。

励ましてくれる妹の心に感謝。

そんなことを話しながら時間が過ぎていく、気がついたら新しい高校が見えてきた。

「で、でかい。まるで山だ！」

それが初めて見る高校の感想だった。この町は高校を中心にしているように見えた。

あんなにでかいなら誰でもいけるであろう。その日は心で天使と会話しながら荷物の整理をした。

風呂に入り、自分の部屋に入る。すると天使が、

「あんたに話しておくよ。この町はどこかおかしい。人間界と他界が繋がっているようだ、気をつけておいたほうが良さそうだ。」

そういった後、さっさと布団に入ってしまった。僕も寝ようとしたら天使がこう言った。

「あんたはかなり不安定な天使だ。もう一度何かと契約したほうがいい。あの妹でもいいがな。」

僕は聞いた後すぐ寝てしまった。気がつくと朝だった。しかもいつもより少し早い。今日は学校に行かなければいけないので二度寝せず顔を洗いキッチンに行く。すでに二人共起きているみただった。

「「オハヨウ」」

二人の声を聞いた後少し遅れて、

「うー、おはよう」
と答える。

さっさと朝食を済ませ学校に行く支度を終える。

「いってきまーす。」

勢いよく家のドアを開けるとビックリした。家の前にリムジンが

とまっていたのだ、しかも執事まで立っている！

「さ、時雨様この車におのりください。」

これは、夢だろうか？

見ると既に誰か乗っているようだ。　なんと妹が乗っているではないか。

「ささ、時雨様。貴方の妹様は既に乗ってますぞ！」

領き車の後ろに乗り込む。ここで紹介しておこう僕の妹を。

「なあ、蕾。この車とあの執事さん学校の人か？」

肩に乗っている天使も不思議そうにしている。

「あれはね。うちのよ、兄貴。いや、天道時時雨君」
は、どうしたんだこいつ？

「・・・私は知っての通り貴方の実の妹ではないわ。」

ああ、それは知っている。確か母さんが僕が小さい時に蕾を誰かから引き取ったといってたな。

「今まで黙ってたけど、私悪魔なの。」

・・・ゴメンそれしってる　「貴方の母さんはその事を既に知ってるわ。」

僕は罪人天使だが？悪魔とどっちが悪なのだろう？

「なあ、蕾。何でそんなことを急に言い出すんだ？別にいいじゃないか。悪魔だろうが人間だろうが。」

・・・天使だろうが。

「ありがとう。けど契約しないと本当は人間の家にいてはいけないのよ。私は実は調査委員で魔界からきたの、ゴメンね。こんな話し信じれないよね。」

そうだったのか、確かに流石の僕でも嘘だと思っただろう。一日前までは。

ゴメンなさい、兄貴は黙って天使を飼ってます。

「蕾は、蕾さ。」

ああ、なんて易い台詞だろ　しかし蕾は、

「あ、ありがとう。時雨君」

と言ってくれた。

「兄貴とはもう呼ばないから」

そういつて顔を赤くした。その後、蕾が学校の事を少し教えてくれた。

「私立だから、お金出してる投資家の子どもも来てるらしいよ。だから気をつけてね。目をつけられたら高校生活が消えるかもしれないから。」

つまり、相手とケンカになったら追い出されるという事か。

「あ、後ねそのく私の仲間もいるんだよ。」
なるほど。悪魔が他にもいるのか。

「だから、ケンカしないでね。人間の時雨君じゃかてないから。」
「そんなことしないさ。」「滅多にケンカなんてしたことないからね。でも一応教えておかないと。」

その心に感謝。

「あ、後天使もいるから。」

・・・自分以外の天使か。どんな人だろう。雑談していると学校に着いたようだ。しかし車は停まらない！そのまま校舎に入ってしまった。

「・・・」

校舎の中は広く車が行き交っている。街みたいだった。そのまま職員室？らしき所に車がとまる。蕾と一緒に降ろされた後リムジンは去って行った。

職員室のドアを開けると先生らしき人達が話をしていた。少し後で一人の先生がこっちにやってきた。「何か用ですか？」

そう聞かれたので、転校してきたと告げると、

「ああ、君達がそうか。」

そのまま、教室らしき所につれていかれ途中リムジンにしかれそうになった。

「いいかい、天道時君。投資家の子供には気をつけてね。」
流石に怖くなってきた。

「あ、あの質問してもいいですか？」

「いいよ。ただし時間がないから一つだけ。」

「この学校に番長はいますか？」

我ながら馬鹿な質問だと思ったけど聞いておいた。

「ああ、いるよ。君も気をつけて。転校生が嫌いだから。」
そして教室に入る。

運命は既に廻り始めていたのだろう

そのいち！ 一日一善（後書き）

まあ、本当一人でもいいから読んでくれたらいいな。もしも続きが書けたらやっ和学校の話しになると思います。あ、あと時雨の罪も書きたいと思います。それでは皆さんお元気で！

そのに 番長な彼女（前書き）

えー、二話目が皆さんのおかげでできました。まだ文章が悪いですが、よろしく願います。今回もまた誰かが読んでくれたら次を書きたいと思います。

そのに 番長な彼女

「……という訳で、今日からこのクラスの一員となる天道時時雨君だ。さて、誰の隣がいいかな？」

そういつて辺りを見回す。すると、

「先生！私の隣が空いてるよ。」

親切に手まで挙げてくれている。一瞬教室がざわっとした。

「そ、そうか。なら、天道時君あの子の隣が今日から君の絶対領域だ。何者にも盗られないよう頑張ってくれ！気をつけてな。」

さっさとその子の隣に座る。すると、

「私の名前は霜崎亜美しゆさきあみよろしくね。」

第一の感想、笑顔が可愛い！すると天使が、

「気をつけろ！」

とさけぶ。「そいつは、天使だ！」

その時不覚にも僕は間違えてしまった。

「確かに天使の笑顔だ。」

すると天使が呆れ顔になり、

「奴は、イノセント・エンジェルだ。」

といった。……何だそれ？質問しようとしたが、霜崎さんにより阻まれた。

「ねえ、どうしたの？急に黙り込んで。」

「いや別に、なんでもないよ！ところでこの学校にも番長っているんだよね？」

今までも静かだった教室が更に深海のようになってしまった。

「ねえ、時雨君今日の放課後屋上に来てくれない？面白い人がいるから。」

そのままどこかに行ってしまった 入れ代わりに、男子生徒がここにやってきた。

「いやー、時雨君知らないって罪だね。」

「えーっと、きみは？」

「ああ、ゴメン。僕は霜崎剣治しもざきけんじさ。ちなみに亜美とは親戚なんだ。」

なるほど、覚えておこう。

「しかしかわいそうに怒らせてしまうなんて！」

・・・僕が何かしただろうか？

「ははっ、彼女は番長という単語が嫌いなさ。始めに言っておくけど、この学校での番長という言葉は世間と違うんだよ。なぜなら、この学校では役職ということだから。生徒会長が選挙で決まったとき、もう一人裏の生徒会長が決まるんだ。決める方法は生徒会長が誰にもばれないように指名するのさ。その裏の生徒会長は普段番長と呼ばれている。なぜなら、番長は他校とケンカになったとき殴り込みをするからね。」

説明は終わったとばかりにそのまま僕を眺める。

「なんで黙って指名なんてするの？」

質問してみると、

「この学校は番長という役職がありながら、暴力行為は野蛮だと考えられているんだ。だから、ばれてしまったら友達がいなくなる。正確にいうと理解者が自分の周りから居なくなるのさ！だから、知っているのは生徒会長だけって事さ。知らなければ仲がよいまま過ごせるからね。校内で、暴力行為が起こってもたいていみんな無視するね。番長はケンカが強いからね。噂では人間以上の力を持っているらしいから。ふふ、君も気をつけなよ。他に何か知りたいことがあったら、図書館に行くといいよ。」

ニヤニヤしながらこっちを見ているようだが、その目は僕に対して何かの忠告をしているみたいだった。その後、亜美さんは戻ってこなかった。そして昼休み昼食を食べた後図書館を探すことにしたが、

「どこにあるんだ？」

あっさりギブアップ。誰かに聞こうとするとちょうど女子を一人発見！

「あの〜スイマセン図書館は何処ですか？」

我ながらか細い声で聞いてみると

「あ、図書館ですか。ちょうど私も行きますので、ご一緒しましょうか？」

いやゝ勇気を出した甲斐があったね。

「はい、僕転校してきたばかりで、さっぱり道が分からないんですよ。」「？おかしいですね。転校生が来たら隣の席の人が校内を案内するのが規則なのに。まあ、いいですわ。時間があったら私が案内しましょう。それでは少々お待ちになって。」

おもむろに携帯を取り出すとどこかに掛けているようだ。

「もしもし、今から図書館に行くから、ええ、そうよろしく。」

廊下の曲がりからリムジンが一台やってきた。そして目の前でストップ、ドアが静かに開く。

「さ、行きましょう。」

呆然としながらリムジンに乗り込む。僕の前に彼女が座り、尋ねてきた。

「聞くのが遅れたけど貴方の名前は？」 名乗るのを忘れてたようだ。

「僕の名前は天道時時雨だよ。」

今更だが時雨という名前は珍しいだろう。昔よく笑われたものだ。しかし、世の中は広がった。

「時雨・・・、いい名前ですね。私は好きですよ。」

気のせいかな？初めて褒めてもらった！

「ふふ、私の名前は幹也^{みきや} 焰^{ほのか}といいます。あ、そろそろ着くようですわ。」

リムジンが静かに停止そしてドアも静かに開く。

二人で図書館の中に入る。沢山の本が並んでいた。「私のイチ押しはこれですわ！」

笑いながら持ってきた本の題名は『天界と魔界』というものだった。

「これを見るたび、懐かしい思いでに浸れますわ！」

もしかしてこの人、人間 じゃないのかな？まあ、今は気になるこの本を読んでみよう。「幹也さん僕はこれを少し読んでみますよ。興味がありますから。」

そういつて本を受け取る。

「は、初めてですわ！受け取ってくれる人がいるなんて！」

そういうと駆け足でどこかに去って行った。……図書館で走っていいのだろうか？

そんなことを考えながら近くの机につき、本を開く。

『この本は、著者の努力と編集者の私こと、幹也 焰によって書かれていますわ！』……なるほど、そうだったのか。

『第一に天使は二種存在しますわ！イノセント・エンジェル（断罪天使）とアンノウン・エンジェル（罪人天使）です。天使は戦いが苦手でしたが今では悪魔並に身体が頑丈ですわ。そして呪文を唱えると天使化といわれる現象がおき、普段の倍の戦闘能力を得ること

ができますの!』 本というよりレポートみたいだな。

『これが断罪天使の能力ですわ。次に罪人天使のことを書きたいけどこれはあまり資料が無いのでよく分かりません。羽は紅く、断罪天使より強いのは間違いありませんわ! 神様を殺した天使になるといわれています、定かではありません。』

自分の事はあまり書かれていなかった。だが天使に絡まれても勝てるかもしれない。『今度は魔界の悪魔と魔族の違いを書きたいと思いますわ! 悪魔は魔族より強く昔は天界と戦闘を繰り返していました。戦闘は長く続き、神様が罪人天使を使い終わらせたそうです。だから今は平和になっています。次に魔族を説明したいと思います。魔族は基本的に人間相手をします。例を挙げるなら、死神、吸血鬼等です。あとは……』

そこまで読んで本を閉じた。

「えーっと、この情報正しいの?」

心で問い掛ける。

「す、すごい! 今の所はすべてあっているぞ!」

……どうやらすごい本らしい。 「だが、契約にはなにも書かれてないな。 ついでだからな。

前にも言ったがお前は不安定な天使だ。 よく聞いておくように! 契約とはつまり誰かに自分を支えてもらう事だ。

契約した片方が怪我した場合、その相手にも怪我が分かるようになる。だがお前の契約は既にある事になっているんだ。契約内容を破

ってしまっただけ。……昨日、いいことしてないだろう？ 一日一善だからまだ期限があると思ってただろうけど、契約した一時間以内にしなければならなかったんだ。多分それがお前の罪だ！」
つまり僕が悪いということだ。

「不安定のまま約一年を過ごすとは言わないが良くない事が起きるからな！」

「それってどうなるんだ？」

「じゃあ、逆に聞こう。お前は、福袋を買わずに開けるか？ 知りたいたら自分で試してみな。」 今自分が置かれている状況を整理してみよう。後一年以内に誰かと契約しなければパンドラの箱を開けるであろう。しかし、

「契約ってまた書類にサインすればいいのかな？」

「いや、再契約だから簡単だかな。まず、相手と心を通わせる事だ。その後相手と誓いのキス……」

え、まじ？

「でもいいが握手で充分だ。相手が男でもいいからな。」
確かに男だったらいやだな。

「今みた所、この学校人間もいるが、他の物も少なからずいるようだ。気をつけなよ。特に断罪天使には。」

そこで予鈴がなり、図書館をでるとあのリムジンが待っていた。そのまま僕を乗せ廊下を爆走。結果遅れずに授業に出る事ができた。

感謝感謝！剣治が授業が終わった後、

「彼女を頼んだよ。罪人天使さん」

と言ったのは間違いではないだろう。

その日は授業がすぐ終わり、言われた通り屋上に赴く。多分彼女は、亜美さんは番長だろう。そしてなんかの拍子にばれたのだろう。その結果友達が居なくなってしまった。彼女は淋しかったのだろう。だから転校生の僕は何も知らないから事実を知るまでだけ仲良しでいられると思ったのだろう・・・僕の願望だけど。そうだったらしいな！そしたらあの娘と契約して、うふふ・・・。「はたから見るとかなり気持ち悪いぞ！」

・・・確かに。

「いいか、今から口説きに行くのではなく説得に行くんだぞ！」

「そう、そうだった。」

危ない危ない、間違えるところだった。

「まずは友達からだよね！」

「このほかが！気を引き締めないと怪我ではすまないぞ！」

「ふ、僕に近付くと怪我するぜ！」

その時天使は思ったという。あれ、こんなキャラだったっけ？と。そんなこんなで屋上に到着。勢いよく開けるとそこには誰も居なか

ったが、場所は凄かった。転落防止用のフェンスには人型の窪みがあり、過去に血生臭い祭りがあった事であろう。だがここには誰も居ないようだ？

「やっときたね。」

振り向くとそこには彼女がいた。

「ありがとう、素直に来てくれて。」

天使が時雨を見ると真剣な顔付きだった。

「時雨君、私人間じゃないんだ。」

時雨はその時思ったという。ゴメンなさい、初めてあった時から知ってました！だから驚けません。そして口が滑り、

「僕は、罪人天使です。」白状してしまった。

「へえ、知らなかったあの罪人天使だって！じゃあ、悪いけど時雨には散ってもらおうかな？・・・本気出したげる。」

彼女の口が動いたと思ったら、彼女を光がうめつくす。光が消えるとそこには羽の生えた彼女がいた。

「これが天使化か。」

貴重な光景だ。驚嘆していると今度は天使亜美の腕を光が包む。それは剣の形をしていた。飛び上がり僕目掛け剣が流星のごとく彼女と一緒に落ちて来る。・・・その刹那、天使とは違う何か僕の前に乗っていた。その間時間が止まっているようだった。

「ヤッホー、天使さん。あ、ゴメン、今はそんな事よりこの状況だよ！簡単な事だよ。彼女は今までみんなに拒絶されて来たんだ。なら受け止めてあげなよ！彼女を。」……ウーンそうだな。新らしき自分の意思を信じてみよう。

「わかった！」

その結果、僕の身体を光剣が貫いた。

「だ、駄目じゃん。」

そこで僕は気を失った。目を覚ますと天使達がいた。周りにはお花畑、そしてすでに川を渡っている自分。もう少しであっちがわに着く所で何かが背後から飛んで来て僕を元いた場所に連れ去った。地面に落とした後僕を光剣でまた刺した。そんな夢から目を覚ますとそこにも天使がいた。肩に乗っている天使ではなく亜美だった。

ん……なんで、僕の顔に雨が降ってるん……あ、涙だ。

「よかった。死んでなくて。」

そういえば刺されたんだっけ？……傷痕残ってるよ。

「ふふ、ごめんね。まさか受け止めるとは思わなかったから。でも刺した時に時雨君の心を読めた気がしたんだ。そしたら憎い気持ちが消えたんだ。」そうか、それは良かった。

「けど」

急に顔を赤くさせ、

「私と契約した後、何する気だったの？」

・・・そうか、それは悪かった。

「あ、後。そろそろ頭どかしてくれないかな？重いから。」

いま気がついたがひざ枕してもらっていたようだ。

は、初めての体験だ！

頭をどかすと急に亜美さんが真剣な顔を作った。「悪いけど、時雨君の後を今日付けてたんだ。もう番長の事を知ってるよね。」
首を縦に動かす。

「番長に勝ったら何か命令していいんだ・・・だから私になんでもいいから命令していいよ。」

何かを思い出したのか、顔を赤くした亜美さん。

「まあ、時雨君ならいいかなっ？」・・・僕は、契約をしたかったが（本当はその後の事がしたかったが）自分を押さえある命令というより、お願いをした。

「じゃあ、僕の友達になってくれ！」

それは僕を更に嬉しくもあり、苦しくもする運命の通過点だったかもしれない。ちょっと待った！

「僕ケンカに勝ってないよ。」

そして亜美さんの一言。

「心で負かされたよ。」

すこし夕闇が広がりつつある屋上で二人が話している間、ある人物が時雨の机に何かしていたという事は、また今度。

そのに 番長な彼女（後書き）

一話でかいてないことだったけど、占いの結果は『女難』です。今の所はまだ普通？ですが。次話を書いたらどんどん凄くする予定です！

そのさん 大変な一日（前書き）

今回少しばたばた作りました。だから、すこしばかり、話がややこしくなりました。さて、いつものように次話を書くのは皆さんが読んでくれたら書きたいと思います。

そのさん 大変な一日

時雨が転校して三日目の事であった。朝いつもの様に部屋をノックする音で眼を覚ました時雨がドアを開けると母さんではない人が立っていた。

「おはようございます。時雨様。」

一般家庭ではなく貴族の家にいる方がいい人材が立っていた。

時雨は驚き哑然とした。

「？時雨様！大丈夫ですか？」

そこに立っていたのは執事さんだった。・・・あのリムジンを運転していた人だ。

「あ、はい大丈夫です。しかしなぜあなたが僕の家に住るんですか？」時雨はまだ完全に目が覚めていなかったのですがどうでもいいことを考えていた。

・・・起こしてくれるならメイドさんがよかったな・・・。

ぼーっとしていると執事さんが苦笑しながら、

「時雨さま。出来るかどうか分かりませんがそのようにはからいましょう。」

・・・近頃の執事さんは相手の心が読めるらしい。気をつけないとまた亜美さんの二の舞になってしまう。おたがい苦笑しながら微妙な雰囲気漂う。

「兄様まだ起きてないの？」

ぱたぱた走ってきた元妹が曲がり角にたっていた時雨にぶつかり一緒に倒れる。蕾の肘が時雨の腹を直撃。普通の人間なら気絶は間違いないだろう。だが、彼は負けなかった。

「く、こんなのあの時の一撃にくらべれば・・・」

蕾が怪我しないように抱きしめる。そして蕾を起こす。

「なんで蕾が？」

蕾はたしかすでにこの家に住んでは居なかったはずだ？

「時雨様、やはりなにも聞いて居なかったのですね？」

はて、誰からですか？

「貴方のお母様からです。」

何をですか？

「お母様はこれから一週間旅行に行くと言ってませんでした？」

いや、知りませんが？

「そうですか。」

この執事さんただ者じゃないな、さっきから心のなかで思うだけで執事さんに伝わっている。すごい人だ。

「ありがとうございます。」

・・・いや、なにも考えまい。

「えーっと、つまり執事さんは僕を手伝いにきたんですか。」

「はい、その通りです。実は私一人のはずでしたが、蕾お嬢様がどうしても兄様の顔がみたいと言いました。」は、兄様？なんで？

蕾をみたが赤くしただけで顔を背ける。

執事さんが蕾を見た途端蕾は何も言わず逃げていった。

「途中までしか読み取り出来ませんでした。すいません。」

いやいや、構いません。

「ありがとうございます。・・・さて、話しましょうか？全て。」

その目が笑っていたので遠慮した。「しかし、なんで？僕をまだ兄と慕ってくれるのだろう。」

「簡単な事です。しかし今は時間が無いのでまた今度。」

既に歩いて学校に行ったら遅刻するだろう。

「大丈夫です。私が車を運転しますから。」

それから急いで朝食をとり蕾と一緒に車リムジンで登校。「えーっと、兄様。この前は兄貴と呼ばずに名前で呼ぶっていったけど・・・やっぱ、貴方の妹でいたい。でも、私は一度言ってしまったらそ

れは守らないといけないんだ。だから兄貴と貴方を呼べないから、兄様とよばせて！一生のお願い。」

蕾が一生のお願いを使うのはこれで二回目である。少し昔の事を思い出す。あれは、小学生の頃だったかな？

『今日から、貴方の妹よ。この子は。仲良くしてあげてね。』

『うん、わかった！君の名前は？』

『……蕾……』

『僕の名前は時雨だよ。』

『時雨？』

『変な名前だね・』

『……今日から兄貴と呼ばせて！』

『ああ、いいよ。』

『ありがとう！』

そのあといろいろあったな。

『時雨、まーた妹とあそんでらー。時雨のロリコン、変態やーい』

『兄貴私と遊んだら馬鹿にされるよ。』

『いいよ。母さんもいっただろ、仲良くしろって。』 『いったけど・』

・・・』

『僕は嬉しかったよ。妹ができて。大丈夫。何があっても守るから！』

『うう、ありがとう兄貴。』

しかし、ロリコンって蓄とは一年も年が離れてないぞ？僕と同じ学年だし。

思い出に浸っていると、

「・・・えーっと兄様。昨日きいた噂だけど、人間じゃないとか？」

・・・言うの忘れてた。

「・・・ああ、そうだよ。ごめんねだまって。」

「いや、いいよ、じゃあさ！誰かと契約したの？」

「ああ、したけどさ、なかった事になっちゃって。」 「契約内容破っちゃったの！あと一年の間に何とかしなきゃ。」

「そうだよね、だから今色々頑張って資料を探してるんだ。」

「だったら、図書館に行ってみなよ。私が案内しようか？」

次の発言をしたことにより僕は自分で崖っぷちから飛び降りたことになった。

「いや、いいよ。昨日焰さんって人に案内してもらったんだ。」

焰と言った瞬間、蕾の顔が変わる。

「う、嘘。だからあんなに嬉しかったのね、あの女！」

なんだ？どうしたんだ？

何か言おうとしたが教室に到着。蕾はぶつぶついいながら去っていった。教室の扉を開けると番長、亜美さんと目があった。そして席を立ちこちに走って来た！

「時雨くん。おはよう！」

今日、二度目のタックル。すげー威力だ。オラおったまげたぞ。

「あはは、おはよ・・・」

言おうとしてはっとなる。目を閉じ唇を突き出した亜美さんの顔が近寄ってくる！

「うわー、朝からなにやってんの！ストップ、ストップ！」僕は立ち上がり亜美さんと距離をとる。

「いいじゃん！時雨くん。契約だよ！契約。私達友達でしょ。」

確かにそうだが・・・。

「それに時雨くん私とあんなことやこんな・・・」

周りの視線が背中に刺さる。これはやばいぞ！なんとかしないと。うう、こんな時に天使がいらないなんて。どこ行った。僕のちえ袋やーい！

しかし、思わぬ所に救世主がいた！

「亜美、時雨君が困ってるよ。」

はっとなる亜美さん。

「だって剣治。昨日時雨君学校来てなかったんだよ。」

「……確かに、来てない。「疲れて風邪をひいたと先生がいつてたじゃないか。」

本当は違う。屋上でいろいろあった後の事を話そう！

「亜美さんもう帰った方がいいよ。暗いからさ。」

「え、でも時雨君が……」

「僕は大丈夫だよ。さ、帰っていいよ。」

「分かったよ。また明日ね！」

彼女が帰った後、空から何か降りて来た。

「ありがとう、時雨君。もともと亜美は友達が少なかったんだ。なぜかは知らないがね。」 「……君が僕と同じなんて。」

彼の背中には紅い羽が広がっていた。しかし、僕の羽より紅くない。

「ふふふ、ま、いいじゃないか。」

「しかし初めから君は罪人天使だったの？」

せつかなので質問。

「いや、昔は断罪天使だったんだけどね。」

鼻の頭を掻きながら。

「ある日目が覚めたら、こうなってたんだ。」

更に、

「何か悪い事したか、考えたがね、空き缶をポイ捨てした事ぐらいかな。」・・・天使がそんな事していいのだろうか？しかしポイ捨てでアンノウン・エンジェルになるなら、解明される日も近いかもしれない。

「罪人天使になると確かに力は強くなるが誰かと戦う訳でも無いのでいらない能力だろ？」

確かにそうだ。

「だから僕は生徒会長になり、罪を償っているんだ！」・・・大変なんだな、剣治君も。

「なんなら、僕と契約のキスでもするかい？」

いやだー、それなら、パンドラの箱を空けたほうがまだいい！

「遠慮しておくよ。」

「冗談だ。そして君に頼みがある。彼女の代わりをやってくれ！もしたら彼女は何もしなくていいし、友達もまた増える。そして僕は新しく彼女を負かした君を雇えるからね。」確かにそうだ。彼女は安心して学校生活を送れるだろう。

「分かった。」

すると剣治の顔が笑い、

「早速だが、番長に用件を告げる。近頃この付近に出る変態を捕まえたまえ！それが君の初任務だ。」

・・・個人的に嫌だが仕方ない。剣治はその後、

「君はまだ天使化出来ないようだから教えておこう。」

ありがたい、あの本にも書かれてなかったから。

「けど、修業みたいなことしなくていいの？」

自分に秘められた力は出すだけでもかなり大変なはずだと僕は思う。

「大丈夫。自分の力を出すには自分に頼ればいいのさ！」

一度天使化を解いた剣治は声をだして叫んだ。

『我は罪を背負いし天使。罪を償う為今また我に紅き翼を与えよ。』

すると、あの羽と同じ色が彼を包んだ。天使化はいたって簡単だった。

「別に違う事言っても大丈夫なのさ。」

さらに簡単になった。

「天使化も教えたし、明日から探してもらおうか。なに大丈夫。授業のことは気にしなくていいよ。僕がなんとかしとくから。」という理由で僕は学校を休んだ訳だ。しかし知っているのは僕と彼だけだ。

「さて、昨日の調子はどうだった？」

「ああ、悪かったけど、なんとかなるよ。」

すると

「気をつけなよ。相手は悪魔らしい。」

といて彼は教室から居なくなった。自分の席に荷物を置く。机の中になにか入っていた。もしかしてラブレター？

出てきたのは一冊のノートだった。……厚き愛の結晶？そのノートには愛の告白分ではなく今僕が必要としていそうな事が書かれているようだ。

題名『天界と魔界について。時雨君専用版。』

『初めに……ありがとうございますわ。貴方が誉めてくれたから私はくじける事なく今新しい資料を書いてますわ！だからあれから寝ずにあの本を詳しく書き直しましたわ！どうぞ読んでください！そして私に感想を聞かしてくださいね』最後にすごい事が書かれていた。

『携

帯番号……住所……』

……情報管理には気をつけないと。けどありがたいな。

『この学校にもアンノウン・エンジェルがいる事が分かりましたの！少ないけど二人は間違いなくいますの一人は生徒会長、もう一人は私の友達です。なにか罪を背負ったらなるんじゃないかと彼らは言っていました。』

その友達はどうのような罪を侵したのだろう。かなり気になる。さすがにくだらない罪ではないだろう。まあ、他人の事ではなく今は自分の心配をするべきだと僕は思う。

「ねえ、時雨君それなに？」

「ああ、これ？資料だよ。」

「手書きみたいだけど誰が書いてるの？」

「え、焰さんって人だよ？」

「あ、あの幹也？」

「うん、そうだよ。それがどうかした？」途端顔が真っ青になる亜美さん。

「なにかされなかった？」

「？何もされなかったよ。」

ホッと安心する亜美さん。

「時雨君、彼女には気をつけ……………」

言おうとした所で誰かに遮られた。「時雨様！どうでしたか？」突進してきた幹也さん。自分の足元に気をつけずにこっちに走って来てこけて……………はい、皆さんの予想通り。本日三回目のタックルです……………ばきばき、ぐしゃ！ばたん……………」

「時雨君！大丈夫！」

「わ……………体がおかしいよ。首が変な方向むいてる！」

誰かオラに元気を分けてくれ。……ダメだ二人ともオロオロして役に立たない。ああ、意識が……。また僕はあつちに……。い・く……。の。はい、ここで僕の意識ブラックアウト。しかしそのおかげでパンドラの箱を知る事ができた。……。か言ってるようだ。

なになに、『見える！私にも敵が見えるぞ』は、何を言ってるの？『白い悪魔』？ガン〇ムの事言ってるの？え、違う？パンドラの箱を開けると人が変わる？……。は、何この夢？……。『あ、先生！時雨君が目を開けました！生きてます。……。物騒だな。誰だろう。初めて聞く声だ。』

目を覚ますと保健室のようだ？周りを見回すと白い学ランを着た白衣の天使がこっちを見ながら微笑んでいる。（この学校は男子も女子もなぜか学ランであり、色も色々ある。大体、保健委員は白い学ランを着ている。ちなみに僕は青い学ランである。）そこで僕は気付いた。彼女は間違いなく天使だ。羽が薄く見える。紅い。

「初めまして、時雨君！」

「はあ、初めまして。」

「私は、木野 舞っていいいます。見ての通り保健委員です。そして罪人天使でもあります。私の事聞いているよね？」 はて、誰から？うーんと唸っていると木野さんが、

「焰が書いた貴方へのノートに書いてませんでした？」

ああ、あれか！ 「書いてました。確か、私の友達って。」

木野さんはうーんと唸っているようで、
「……私の紹介がたった四文字ですって！後でみてなさい、あの死神め！」

体から、紅きオーラがでている。怒っているようだ。しかし、

「でも、考えが甘かったみたいね。まさか自分で墓穴を掘るなんて。ふふふ、」

なんかこの人怖い。笑った方がいいと僕は思う。

「あの〜。」

「なんですか？まさかどこか痛いとか！」

途端顔色が青くなる木野さん。

「いえ、一人事言ってたもんですから。後、笑った方がいいですよ。」すると木野さんは笑い、

「ありがとう。」

と言ってくれた。

「さ、これで私達友達だね！」

友達か・・・僕はいまだにクラスの生徒に話し掛けられた事がないな。霜崎 亜美、剣治。 幹也 焰。そして、木野 舞 か、まだ転校してきてあんまり経ってないからかな？まあ、いずれ出るだろう。

ぼーっとしていると不意に、

「聞いた話だけど、時雨君まだ契約してないんだって？」

と聞いてきた。

「え、うん一度したんだけど無効になっちゃってさ！後一年で・・・」

「パンドラの箱を開けてしまうか、開けたらどうなるか知ってる？」
「いや、知らないよ。」

「人が変わってしまうんだよ。」

「つつ。それって・・・。どういう・・・」

「つまり、自分ではなくなるって事。でも大丈夫。まだ一年もあるから、なんならここで今私とする？」
「・・・えーっとこれは冗談かな？僕としては冗談がいいんだけど。しかし目が本気だからな。困ったな・・・。あれっ？」

「なんで、僕が人間じゃないって分かるの？まだ何も言ってないし、幹也さんにも言ってないと思うよ？」

「簡単な事です。罪人天使は相手が何か一発で解ってしまうんですよ。」

「けど、生徒会長の事、僕解らなかったよ！なんで？」

「それはですね。罪人天使だけは相手にみられないように出来るんですよ。」

「・・・なるほど。初めて会ったときは剣治は見えないようにしていたのか。」

「目を見ながら話してくる彼女が段々こっちに近付いて来ているよな気がする・・・。」

「大丈夫、すぐすみませんよ。」

なにが？なにが？

「け、けど、」

「今、先生は居ませんよ。先程薬を買いに出ました。」

絶体絶命！今すぐ新聞の求人情報に時給八百円程で僕の救世主を雇いたい。「二人きりですね……。」

ああ、あわわわわ。

救世主がやって来た。ドアを力強く開けて。「時雨君！仕事だ！もう目が覚めたのだろう！君をここから連れて行くぞ！大変な事がおきた。」

キョトンとした舞さんを残し、僕は生徒会長についていった。

「新たな被害者がでた。」

これを聞いた僕は愕然とした。誰だ。誰が襲われたんだ！

「被害者は一年一組の男子だ。後ろから抱き着かれたらしい。」
は、男？

「なんだい、その顔は？」

ああ、君にはいってなかったな。襲われているのは、全て男子生徒だ。ちなみに全て美男子系だ。いきなり後ろから抱き着かれ、更におもいっきり抱きしめるそうだ。」

……まさか、男が、男に！僕はなんて怖い相手をしているん

だ。

「安心したまえ、相手は女性らしい。」

・・・なんでそんな事分かるんだ？

「見たという人が遂に現れてな。髪が少し長かったそうさ。」

しかし、世の中には例外があるだろう。髪が長い男性もいるだろう。

「不満そうな顔をしているな！次の情報で確信するだろう。抱き着かれた奴等はみなはじめに必ず、『やわらかいものが背中にあたった』と証言している。・・・これでわかったら。犯人は女性だ！・・・おい、なに羨ましそうな顔しているんだ！」
そんな会話をしながら階段を駆け降りていると。

「うわっ！なんだ！」

という声が聞こえた。

「いくぞ！番長！不埒な輩を捕まえなければ！これ以上悲しき犠牲者を出さぬ為にも！」

ちなみに僕にとっては羨ましい犠牲者だが。

「まだ、襲われたと決まったわけではないだろうに。それに学校じやなく町で人は襲われているんじゃないかった？」

「いや、実は近頃気付いたんだが、襲われる人間はある条件をもっているんだ。まず、学校の生徒。次に青い学ラン、ちなみに女子はスカートを履いてるから、男子とは一発で外見が分かる。そして最後がさっきいった美少年系、という事だ。」

「もしかして、この学校の生徒が知り合いがいて、その人を探しているとか。」

「確かにそうだな！そろそろ着くころだ。戦闘準備！」

廊下を曲がると男子生徒が倒れていた。．．．．．なんて幸福な顔をしているんだ。

しかし悪いがすぐに起きてもらわないと！

「その必要はない。君は犯人を追ってもらう。天使化をして飛んでいきたまえ！」

「わかった。」

『我は．．．．．』

今回は省略。急いでいるから。

すぐに僕に羽が生える。紅い罪人の証が。

体に力がいり、地面を蹴って飛び上がる。初めてだったが上手くとべた。

廊下の曲がり角を曲がるが既に誰もいなかった。

逃げられたか．．．．．。油断してた所、不意を突かれた。誰かに抱き着かれた。

「うわっ．．．．。」

柔らかくてでかい。いかんいかん。しっかりしろ！まずは知り合

いの中に犯人はいないか。一人目、蕾。あの子はあまり大きくなかった。次、亜美さん。彼女もここまでなかった。三番目。焰さん、この位あった気がするが確かここまで柔らかくなかった！最後！木野さん。彼女は亜美さんより多分小さかった。

・・・なに冷静に判断しているんだ？僕は。

遂に犯人はすごい力で抱きしめて来た。ああ、背中が気持ちいい！・・・クソッ！何考えてんだ僕は！

振り返ると犯人の顔が見えた。やはり、初めて会う人間？だった。人間ではなく見た目悪魔だった。

俗にいうロリという種族だろう。しかも柔らかいという感触は胸ではなく、袋だった。そして、必死に僕にしがみついている。

その時、僕の中で何かが弾けた。

「よくも、よくも・・・。僕の夢を壊したな――」

無理矢理腕を動かし、後ろの犯人の首根っこを掴み引き剥がす。

「く、僕は、僕は・・・・・・・・。もっと期待してたのに――」

「ひゃあ――」

という叫び声を出しながらその少女を地面にそっとはなしてやった。こっちを見てがくがく震えている。

冗談で、

「初めに聞いておこう。君が消えるまえにな！」

というと小さな悪魔は顔を青くした。

・・・少しやりすぎたな。

「ゴメン、冗談だよ。何もしないから。な、悪いけどなんでこんな事したのか教えてくれないかな？」

まだ震えている。・・・かなり罪悪感に襲われた。

「お詫びになにか買ってあげるから。」

すると頷き事の真相を話してくれた。

彼女は紅い羽を持つ天使に頼まれたらしい。三日位前だそうだ。柔らかい袋の中には眠り薬が入っているらしく、後ろから抱きしめ、それを嗅がせ眠らせると、頼まれた時に預かった写真で、ある人物を捜していたらしい。

「・・・これ、僕じゃないか？」

その写真には僕が写っていた。青い学ランを着た僕が。

「いつ撮られたんだ？」

うーんと唸っていると携帯に電話がかかってきた。相手は生徒会長だった。

『もしもし、時雨君か？犯人を捕まえたか？凶悪な犯人だ。消してしまっって構わない、僕だったら消すだろう。また、後で連絡するよ！』

一方的に切られた。しかしいつの間に僕の電話番号を知ったんだ？

まあ、取りあえず。それは後回しだ。

少女に他の事を聞いてみたが何も知らなかった・・・。

更に、帰る家がないらしい。・・・今、生徒会長に突き出したらこの子は消えるだろう。仕方ない。家に連れて帰るか！

これがかなり悲惨な運命になるとは僕は考えてもいなかった。

「ジュース買ってよ。」

「うん、で、なにがいい？」

「オレンジ！」

そのさん 大変な一日（後書き）

アンノウン・エンジェルの半分以上は読者で出来ています。評価してくれた人は神様です。僕は悪く評価されてもうれしいです。なぜなら、見てくれた人がいるからです。今回の話しは少し慌ただしくしてみました。どうでしょうか？

そのよん 子守の天使（前書き）

今回はまあ、なんとなくほのぼの？です。

そのよん 子守の天使

・・・ん？

時雨が小さな悪魔を保護？した後、家に帰りみんなに話した。その日は蕾と一緒に寝る事になっていた。
・・・んっ？

朝、目が覚めると隣に少女が寝ていた・・。

・・・なぜ、ここにいるんだ？昨日は蕾の部屋で寝ていたと思ったんだけど。

さすがにまた寝る事は出来ないのでそのまま起床。

部屋で身体を動かして今後の事を考える。

「どうしたもんかな。」

生徒会長に身柄を引き渡すと多分良からぬ事が起きるだろう。じゃあ、どうするか。

「なに、迷ってんだ。今はまだここに住まわせるべきだろう。」

そうだね、そうしよう。・・・誰？

昨日は肩にいなかった天使がまた乗っていた。

「昨日なんでいなかったの？大変だったんだよ。」

「すまん。実はあの執事の手伝いをしていたんだ。昨日の夜遅くに帰って来た。」 「え、あの人にも君が見えるの？」

「ああ、そうみたいだ。しかし別に気にする事じゃないだろ。今日もまた手伝いだからまた別行動だ。」

「うん、わかった。」

扉が叩かれる。

「時雨様！朝ごはんですよ！早く起きてください。」

「……あの執事さんみたいに落ち着いてない。誰だ……まさか……」

「返事がありませんね！じゃ、開けますよ！」

く、やばい。なんか嫌な予感がある。ここは早くでなければ！

「い、今起きたよ。」

「ちえっ、起きちゃったか。色々しようと思ってたんだけどな。」

「……なんて危ない人だ。早く扉を開けなければ。」

ガチャ。

「おはようございます！」

時雨さまっ！」

く、やはりやってしまったか執事さんよ。……あんな事考えなければよかった。

そこにいたのはメイドさんだった。

「さて、先に行っててください！私は蕾様とあのコアクマさんを起こしてきます！」

そういうと廊下を駆けて行ったメイドさんだった。
途中で執事さんにあった。

「おはようございます、時雨様。どうでしたか？」

・・・あのメイドさんですか？

「さようでございます。・・・正確に申しますと冥土^{メイド}ですがね。」

「それはどういう意味ですか？」

尋ねてみるが、

「答えたのですが、時間がまたなくなってしまいます。その話はまた今度でお願いします。」

たしかにまた昨日と同じになってしまう。一礼し、朝食を食べに行くことにした。

「あ、兄様！おはよう。」

食卓で蕾に会い、挨拶。

「ああ、おはよう。蕾。」

そして、朝の事を聞いてみる。

「実は朝起きたらあの子が僕の隣にいたんだ。なんでだと思う？」

直後固まる蕾。

「おーい、大丈夫か？」

しょうがないので先に朝食を食べる事にした。

「うん、美味しいや。味が変わってるけどメイドさんが作ったのかな？」

そんな事をしゃべりながら一人で食べていると先客がいることに気がついた。

「ああ、おはよう。」

そこに少女が座って朝食を食べていた。

首を縦に動かした。多分返事のつもりだろう。

朝食を食べ終わり制服に着替える。いつもよりかなり早い時間だ。これなら歩いて学校に行っても大丈夫かな？

「行ってきます！あの子を頼みましたよ。メイドさん。」

廊下でまた会ったメイドさんに頼む。

「はい！分かりました！えーつと後名前で呼んでくれませんか？」

「はぁ、わかりました。」

「ありがとうございます。時雨様。私の名前は美奈と申します。」

「いい名前ですね。」

「いえっ、そんな！時雨様にいってもらうなんて、恐縮です。」

「じゃあ、行ってきますね。」

「ハイ、いつてらっしゃいませ。」

外に出ると暑かった。まだ朝なのに。普段リムジンなんて乗ってるから悪いんだな。

そんな事を考えながら歩いているとお爺さんにであつた。そのお爺さんは片手に地図を持ってキョロキョロしている。

「あのーっ。どうしたんですか？」

自分から声をかける。話し掛けた時何か違和感を感じたが気のせいかな？

「ああ、実はな坊主。わしの孫が学校から電話してきてな。忘れ物をしたそうじゃ、だから学校を探しているんじゃ。お前さんもあの学校じゃろ。できれば学校に案内してくれんか？」

人助けは僕はいい事だと思うのでお爺さんを案内する事にした。

「分かりました。僕についてきてください。」

お爺さんは微笑みながら御礼を言ってくれた。ついでに荷物も持ってあげる事にした。その時、

「おぬし、ある意味かわいそうにのう女難の相が出とる。それに・・・いや、気にせんでいい。爺のたわごとじゃ。」

学校へのみちのりを世間話などしながら歩き、学校に到着。

「すまんのう。坊主。最後に頼みたい事があるんだが、理事長室はどこじゃ？」

お爺さんの最後の頼みを聞き校門で別れた。

「さらばじゃ！坊主。楽しみにしてろよ。」

・・・何をだろう？後、帰るときは気をつけてくださいと言いきびれたな。

・・・本当に最後のお願いにならないといいんだが。

廊下では誰にも会わず、教室に入る。またなにか突っ込んで来ないか心配したけどなにもこなかった。・・・まだ亜美さんは来ていないようだがクラスのみんなは結構来ていて、僕をギョツとした顔で見た後ひそひそと話始めた。

僕が何かしただろうか？

席につこうと歩き始めた時、後ろのドアが開いた。もとい、スライドした。

「あ、時雨君おはよう！」

亜美さんが入って来た。

「時雨君、背中に何かついてるよ。」

背中？何がついてるんだらう？

「ん、んんっなんであの子が背中にへばりついてんだ？」

そこにはあの悪魔の少女が僕の背中に蟬のようにくっついて寝ていた。

「悪いけど、亜美さんこの子剥がしてくれないかな？」

「・・・わかったわ。時雨君。そんな寄生虫のような小娘は私が、私が断罪してあげる！」

「え、なんだって！」

断罪＝消える。

「ち、ちよっと何言ってるの！」

『我、罪を背負いし邪悪なる物を断つもの』

「なに、天使化を始めた！みんながいるのに！」

急いで教室から脱出。廊下を飛ぶように走る。

「待て、コラー！」

後ろを天使が追い掛けてきた・・・。

その頃、教室では。

「ねー、神さん。あの転校生モテるね！」

「ふんっ。所詮ダメ男よ。なんであんなのがいいのかしら？」

「でも、優しいしさぁー！あ、お爺さんが来たみたいだよ。忘れ物届けに来たみたいだよ。」

「おーい！朝美やー。」

「あ、おじいちゃん学校までの道わかった？」

「いや、さつき走りさった坊主が教えてくれたんじゃ。まさか同じクラスとはしらなかったぞ。とてもいい坊主じゃ。もう話したか？」

「おじいちゃんもそんな事いうの！どうせダメ男よ。」

「なら試したらどうじゃ？あの坊主を。」

「！そうね！面白いかもね。あいつの面白い写真を撮って校舎に貼ればあいつはこの学校にいれなくなるわ！」
そんな陰謀が計画されていた。

所変わって屋上。

「話を聞いてくれ！亜美さん！この子は僕の妹なんだ！だからはなしを……。」

「天誅！」

闘いが繰り広げられていた。

クソッ、やるしかないのか！

『我、悲哀なる罪を背負いし天使……』

「そこまでだ！二人とも。」

空からバケツの中身を亜美さんに落とす。

ばっしゃーん

「きゃっ。」

「彼女は彼の妹だそうだ。彼がそんなロリーな趣味を持っているはずがないだろう。」

「は、そうね。剣治、時雨君がこんなペツタンコを襲うはずがないわね。」

「……なんか悲しいな。けど、剣治のお陰でなんとかなりそうだ。」

「ねえ、生徒会長。今日だけでいいからこの子を学校で面倒みていかな？ 僕が面倒みるから。」

「む、まあ、君がいうなら、良いだろう。亜美、君も手伝いなさい。」

膨れる亜美さん。

「なんでこんなペツタンの世話しなくちゃいけないの？」

僕を見る剣治。

「亜美さん僕からもお願いするよ。」

「……返事がないな。だめだったかな？」

「わかったよ。しかたないか。」

渋々了解してくれた。

「さて、それでは教室に戻ろうか。」

剣治が仕切り、はじめに僕、次に引きはがされた悪魔の少女とそれを抱える亜美さん。最後に剣治。階段をおり、ふと窓を見るとあのお爺さんを見つけた。

「あ、ちょっと用事が出来たから先行ってて。すぐに戻るから!」

朝いいそびれた事をお爺さんにいいに行くことにした。

彼等と違う道を通っていると叫び声が聞こえてきた。少し先の階段からだ。

「キャーーーーー!」

・・・もしかして、階段から落ちたとか!

走って階段に到達。すると女の子が階段の上から飛び降りて来た。

・・・どすつ。

受け止めた僕はなんとか尻もちつかず済んだ。

「大丈夫! ケガない?」

「ええ、ありがとう。じゃあね。」

そういつて走って行ってしまった。・・・なんだったんだ?

朝美は走りながら舌打ちをしていた。

「ちっ、まさか受け止めるとは。・・・優しく受け止められた。初めてだわ。・・・な、何考えてんだか！次を試すわ！」

更に協力をしていた、朝美の友達は、

「うふふ、まさか時雨君の生写真が手に入るなんて・・・ラッキーだわ。」

と喜んでいた。

昼休み、校舎を少女と散歩していた時雨はある事を少女に聞いていた。

「ねえ、君の名前は何？」

「名前？」

「普段なんて呼ばれてた？」

「・・・はです。」

「はです？」

「うん。」

確かに悪魔の名前っぽい。

「お兄ちゃん、おんぶ！」

「はいはい。」

背中に乗るとすぐさま寝てしまった。あたりはかなり静かだ。亜美さん達がいらないには理由がある。

さっき一緒に昼食を食べようとしていると幹也さんと蕾がやってきた。

「お弁当一緒に食べよう！」

そういつて教室に入って来た。

「なによ！あんた達。時雨君は私のものよ！あんた達にはやらないわ！特にあんた。蕾！今時雨君と一緒に住んでるんだって？時雨君から聞いたわよ。」

「いいじゃない！別に。」

「くーっ。あんた達昨日の決着を今日こそつけるわよ。」

彼女達がいなくなった後、剣治がやってきた。

「彼女達は昼休みになるとどこかで闘っているのさ。」

知らなかった。そんな事やってたのか。

「なんなら、理由も教えてあげようか？」

「いや、いいよ。今は昼食が食べたいからさ。剣治、一緒に食べない？」

「君にはお姫様がいるだろう。」

「わかってるよ。だけどさあ。」

「妹さんを大切にしなよ。」

といって去って行った。

「じゃあ、中庭で食べようか。」

「うん。」

そして今に渡る。

中庭に着くとかかなり人がいたが、まだスペースは残っていた。

どこで食べようか悩んでいるとまだ話した事はないが見た事のある
クラスメートを見つけた。

話し掛けるべきか迷っていると向こうから声をかけてくれた。

「おい、てんどーじ君。私たちとお弁当食べない？」

頷き近くに寄る。

「はじめましてだね！」

何度か会った事はあるが話すのは初めてだから挨拶をする事にした。

「あ、うんはじめまして。」

「私の名前が柳原 凪（やなぎばら なぎ）であっちが 神 朝
美さみっていいいます。」

ちなみに僕が話し掛けれたのは二人組だった。

「……ふんっ。」

なんか、凧さんは笑っているが朝美さんは怒っているようだ。

「邪魔したなら、謝るよ。ゴメン。」

そういつて謝り、その場を後にしようとする、袖を引っ張られ、

「別にいいわよ。」

と言われた。

それから四人で話しながらお弁当を食べた。

「あのさあ、なんでこの学校って女の子ばっかなの？」

男子の数がかなり少ないのだ。この質問に答えたのは朝美さんだった。

「この学校はね、元女子校でお嬢様学校だったのよ。」

ふーんなるほど。

「あのさ！時雨君。今日から友達だよね。」

友達か……

ここである程度知り合いが増えたので彼等の事を書いておこう。

まず、蕾。身長は少々低い。百五十位、で性格は温厚。髪は短い。

次に霜崎 亜美。身長は蕾より少し高い位。性格はかなりの慌て者。髪は中途半端な長さ。

三番目が霜崎 剣治。身長は蕾と二十は違う。性格は不明。少々才

タクらしい。髪は短い。

次に幹也 焰 身長は剣治より小さく亜美よりでかい。性格はなんとなくお嬢様みたい。髪はセミロング？眼鏡をかけている。

そしてそのともだち、木野 舞 身長は亜美と同じ位。性格は裏表がありそう。髪は亜美より長い。

次に悪魔の少女 はです。身長はかなり小さい。時雨の背中に乗る位。性格は静かである。髪はお嬢様カット。耳辺りでくるくるなっている。

そしてメイドさん 美奈。 身長は蕾より高く亜美より低い。性格はまるで子どもみたいで明るい。髪は腰まで伸ばしている。

後、執事さん 身長剣治より高い。性格優しい。髪はオールバック。最後から二番目。柳原 凧 身長は剣治より少し低い。性格、人懐っこい。髪はゴムで縛るぐらいはある。

今回の最後。神 朝美 身長は亜美と同じ性格は何となく悪ぶっているが寂しがりや。髪は肩まである。

さて、紹介終わり。

それから携帯の情報を教える為、いろいろしていると携帯を風さんに取られた。

「あれっ、時雨君。自宅と妹と生徒会長しか電話帳に載ってないよ？」

「ああ、それはね。みんなと話す機会があっても誰も携帯の情報を交換しようと言ってこないから。ちなみに生徒会長の情報はいつの

間に入ってたんだ。」

「……つまり、私たちが携帯に載った初めての友達だね！」

「まあ、確かに。」

「ふんっ。私が先よ。」

まあ、朝美さんとも仲良くなれたからいいかな？

昼食を食べ終わり、彼女達と別れる。

「また今度きてね！待ってるから。」

「きたかったらきなさい。別に追い出さないから。」

という二人の言葉を聞きながらその場を後にした。

その後の二人の会話である。

「ね、神、彼優しいでしょ。それになかなか勇気もあるみたいじゃない。よかったわね！彼の携帯に番号載せてもらって。ま、私が一番だったけど。」

「そうね、ダメ男じゃなかったわ。だけどね風。」

「なーに？」

「悪いけど先に携帯に載ったの私なんだ。うふふっ」

風が彼女の楽しそうに笑ったのを見たのは久しぶりだったらしい。

「おにーちゃんジュース！」

「うんうんなにがいい？」

時雨とはですは自販機を前に話していた。

「オレンジ！」

「うーん、はですはオレンジが大好きだな。」

「うん大好き！おにーちゃんは何かが好き？」

「僕もオレンジかな？」

ぱあっと喜ぶはです

「わーい、はですと一緒だ！おにーちゃん大好き。」

「ははっ、ありがとう。」

そんな会話をしながら教室までまたジュースを持ったはですを背負い歩く時雨であった。教室につくとまだあまり人はおらず、代わりに机に顔を埋めている亜美がいただけであった。

「大丈夫？ 亜美さん。」

「だ、大丈夫。今回はなんとかあの死神を倒したわ。だけどあの悪魔に負けてしまった。」

つまり、蕾が勝利者か。

「本当に大丈夫なの？ 切り傷があるよ！」

じわっと涙ぐむ亜美さん

「こんなに心配してくれるなんて……我が生涯に一片の悔いなし。」

がくつ。

「……一応、保険室に連れていこう。」

保険室に運び終えるとはですが話し掛けてきた。

「ねえ、おにーちゃんは天使なのになんで私に優しくしてくれるの？」

「え、なんでって君が幼いからだよ。」

「けど、天使は小さい悪魔でも断罪するっていったよ。親父が。」

「……親父？この歳でそう呼ばれてるお父さんは可哀相だな。」

「ははっ、少なくとも僕は大丈夫だよ。君をいじめるような事をしないよ。約束する。」

「……本当？」

はですは少し疑っているようであり、まだ完全に僕を信用してないみたいだ。

「そうだな？じゃあ、僕の大切なお守りをあげよう。ほら、これだよ。」

おじさんからもらった大切な水晶玉。

「これって、こんなのもらっていいの？」

後で知ったのだが、これはかなり貴重なものらしい。

「ああ、いいよ。そんなもの。」

多分これを聞いてたらおじさんがなくだろう。

「ありがとう。おにーちゃん！」

さて、教室に戻るかな？そろそろ授業が始まりそうだ。しかし、廊下に見知らぬ紳士を見つけた時、僕は歩くのをやめた。紳士はみたところ普通だが（既に学校に居る時点でおかしい。）人間ではないようだ。

「あ、親父だ！」

おんぶしているはですが叫ぶ。

紳士は泣きながらこっちにやってきた。

「愛しいはです。生きてたか。誘拐されたから心配したんだぞ！天使が君をさらったと聞いたぞ。もしか！そいつか！」
杖で僕をしめす。今、感じたがこの紳士はかなり強い。

「ううん、そのおにーちゃんは私を助けてくれたんだ。天使なのに！」

マジマジと紳士に眺められ、生きた心地があまりしなかった。

「なるほど、君は一度契約を破っているね。しかも後約一年か。」

・・・鋭い。

「少年、悪かった。君は我が同士のようだ。実はな、この子は王の子なのだよ。この前部下が誰かにやられてね。その近くにいたこの子がさらわれてしまったのだよ。」

・・・ほ、本当にお姫様だったのか。

「しかし、はですはそんな事いってませんでしたよ。」

はですは親に見られ話始めた。

「だって、話したらおにーちゃんの所の執事さんが親父にいうんだもん！」

「・・・すいません、口が悪くて。この子は少々態度が悪いんですよ。ご迷惑かけたでしょう。」

頭を下げる紳士。

「いえいえ、そんな！楽しかったですよ。」

「そうですか。それでは私たちは魔界に帰りますね。」
気がつくとリムジンが廊下に停まっていた。

「ああ、そうそう、貴方の名前は何でしょうか？名前だけで結構です。」

「時雨ですが？」

「分かりました、時雨くんですね？」

そして僕は次の言葉にぎよっとした。

「どうでしょう？ 私たちと一緒に魔界にきませんか？ 貴方程の悪魔なら、魔王になれますよ。」

「いえ、結構です。」

笑って遠慮する。

「そうですか。仕方ありませんね。それでは。」

「待って、親父！ 先に乗ってて。」

紳士は頷き、リムジンに先に乗ってはですと僕が残された。

「おにーちゃん、私さ、また戻ってくるよ！ お世話してもらったお礼にくるね！」

僕が彼女といた時間は一日もないから世話をした事はほとんどない。

「ははっ、別にいいよ。」

少ししゅんとなったので慌てて何か言葉を探す。リムジンから凄い殺気が……。

「お礼はいいからさ、遊びにおいで！ ね、それでいいかな？」

「うん！ わかった！ またいつか絶対くるよ！」

リムジンからの殺気が消えた。

「あのさあ、最後に質問していいかな？」

少し気になってる事を聞く事にした。

「なんで親父って呼んでるの？」

答えは意外なものだった。

「うーんとね。かなり前のアニメでさ、親父にもぶたれた事ないの
にーっていつてる人がいたからだよ。」

「……ふーんそうなんだ。」

「じゃあ私はもういくね！」

「うん、まってるよ。」

リムジンから顔を出し僕に何か言ったようだ。

「……さよなら！私の王子様！……」

それから数日、相変わらず騒がしい日常だったが何もなかった。

母さんが帰ってくる2日前の夜夢を見た。とても幸福な夢だった
と思う。目が覚めると僕はびっくりした。……枕が柔らかいのだ。
僕が枕を抱えていると思っていたのは枕でなく蕾だった。

「うわっ！」

離れようとしたが足が絡まっており、失敗。結果、蕾が起きた。叫
ばれると思っていたが違う行動を蕾はとった。

「兄様！よかった！」

そういつて僕を抱きしめた。

蕾は怖い夢を見たらしい。

それは僕が襲われる夢だそうだ。しかし何故、隣に寝てたのだろう？ それについては教えてくれなかった。

彼女が見た夢は正確にいうと僕が男に違う意味で襲われたらしい。しかし、蕾も僕と同じ間違いをしていた事に後で気付く。

そのよん 子守の天使（後書き）

・・・先に謝ります。ごめんなさい。犯人だすの忘れてました。だからなんとなくほのぼのした雰囲気になってしまいました。だからもし、次回を書けたらもう一人罪人天使を出したいと思います。後、生徒会長の趣味を書きたいと思います！

そのご 子守天使再び（前書き）

えーっと、今回はかなり短いものになりました。すみません。少しでもできれば評価してほしいものです。何が悪いという批判で結構です。

そのご 子守天使再び

今日、放課後に体育館裏に来て下さい。

そんな手紙が靴箱に入っていたとき正直言っとうれしかった。だが、現実には厳しいもので放課後、行ってみると男が僕を待っていた。

「やあ、時雨君。一時の喜びとドキドキ楽しかったかい？」

生徒会長 霜崎 剣治。

「ううっ、そんなあゝ。僕の青春かえせゝ。」

今日一日、張り切りまくっていた。体育の五十メートル走で自己最新をだしたくらいだ。

しかし、おかまいなく生徒会長は続ける。

「・・・あれから一週間が経ったが未だに真犯人が捕まえられていない。」

男ばかりを狙った変態。一度捕まえたがおとり？みたいなもので、黒幕はまだ捕まっていない。

「だが、犯行はあれからびたりと止まってしまった。」

「たしかに、それはおかしいよね。」

二人で考えていると生徒会長がある提案をした。

「・・・今、資料は自宅にある。だから僕の家に行こう。」

それなら仕方ない。しかし噂で聞いたのだが生徒会長の家は凄いらしい。特に彼の部屋が。

彼の家は僕の家の倍は間違いなくあっただろう。それにメイドま
でいる。(母さんが帰ってきた後、執事さん、メイドの美奈さん、
蕾は家に帰ったと思ったが未だに僕の家に居る。)

「お帰りなさい。お坊ちゃま。」

「ああ、ただいま。」

凄いなあー。ちなみに美奈さんの場合は、

『お帰り、時雨様。今日はですね、早く帰ってくると聞いてお
やつ作りました。自信作です!』

などと、とってもフレンドリーなメイドさんだ。

「さ、行こうか? 時雨君。」

彼に言われ、歩き出す。彼の部屋までかなりかかった。しかし疲
れが消える程彼の部屋は凄かった。

・・・本棚がびっしり。更に美少女の人形までかざってある。驚
愕の真実だ。

「何驚いてんの? 普通だよ。何処にでもある一般の部屋だよ。」

・・・そうなのか! 知らなかった。まあ、確かに僕の部屋にもガ
ン〇ムのプラモがあるか。一体だけど……。しかしきわどい物が
多い気がするのはいけいかな?

「さて、それより、今は今後の事を考えよう。昨日君の意見を聞いた後は夜も眠れなかった。」

昨日、彼にはですの事を話した。すると彼はかなり怒っていた。

『少女をたぶらかして悪事を働かすなど許さん！真犯人を見つけたらすぐさま断罪してしまえ！』

その後、僕を狙っているらしい、と話したら一応、僕の身を案じるような事をいってくれた。

『そうか、ま、気をつけたまえ。』

・・・はですの時とは全く違う反応だった。多分、彼はロリーな少女が好きなのだろう。

「つまり、君が狙われているようだから他の生徒は大丈夫だろう。」

・・・今日の話し合いは無駄だったかな？

生徒は大丈夫。僕は危険。生徒会長とはみんなに平等であるべきだと僕は思う。

「何言っているんだ！君は番長だろう。」

・・・確かにそうだけど。ま、しょうがない。一応僕は罪人天使だ。天使には負けないだろう。

「大丈夫だね？一応僕は罪人天使だからさ？」

「確かにそうだが、相手も同じだろうに。だから気をつけなよ。亜

美みたいに優しくないかもしれないぞ。」

「……腹をくくろう。」

その後すぐに家に帰る事にした。……一人になったのがいけなかった。

もう少しで家につくという所で誰かに呼ばれた。

「……フルネームで。」

「やい、てんどーじ しぐれ！」

後ろから声が聞こえる。誰だろう？はです位声が高い。

「えーっと、誰ですか？」

振り返ると可愛い男の子が仁王立ちをして僕を見ていた。

「あんたを断罪する。」

今日は四月一日だったのかな？後、二日位で夏休みだったと思っただけ？

「きいてんのか？」

はあー、なんで男の子にこんな事聞かれなきゃいけないのかね？

「あのー、僕？悪いけどおにーさん疲れているんだ？だからあっちで遊んでくれないかなあ？」

凄くふて腐れた目が僕を見る。

「ぼくは女だ！みまちがえんな！」

身長、はですより高い。体重 不明だが、軽そう。年齢 はですよりうえかな？

・・・ああ、一応あれはかろうじであるみたい。

ちなみに僕はこの前抱き着かれた後何となくあれがトラウマになった。しかし はです に続きまたロリーな少女か。多分この子だろうなあゝ はです 誘拐したの。紅い羽見えるしさ。
・・・たまにはボーンなのがいいなあゝ。

「やい、てめー、失礼な事考えてるな！」

・・・とうとう怒ってしまった。

男の子、改め女の子は天使化を始める。

『我は、小さき頃から自分と一緒にだった。また我に力を与えよ。』

なんとなくまがまがしい気がする紅い羽が生えた。 更におまけなのか、光剣を右手に持つ。目は真剣そのもの。

「ねえ、なんで僕を襲うの？」

「きさまはムカつく。」

は、それだけ？・・・チンピラか君は？昔もあったな。入学したとき、番長らしき人がやってきてさあ、僕を連れていつてリンチしようとしたし。しかしなんで僕がかつたんだろう？考えている暇はなかった。

「消えろー。」

うわっ！マジでやってきた。どうしよう。

「はい！久々の登場。刹那の天使です。」

瞬間、辺りが止まる感覚を覚える。

「また、同じようにさ！受け止めようよ。成功するかもよ！」

・・・悪いけどまた死にたくないな。できれば僕にも納得のいく解決策がいいかなっ？

「強情だなく。なら悪魔の力を使いなよ。」

え、僕は一応天使だよ。

「しかたないなあ。・・・じゃあ少し身体借りるね。罪は償ってもらおうよ。」

・・・何があったのだろうか？気がいたら女の子がぼろ雑巾のようにみちばたに倒れていた。辺りは既に暗い。しかし女の子の周りには赤い染みが広がっていた。慌てて脈を確かめたが大丈夫のようだ。

「・・・か・・・あ・・・さ・・・ん・・・」

うわごとのように呟いた言葉。しかも僕はオロオロしていた。するとまた時が止まりあの天使が出てくる。

「ははっ、大袈裟だなあー。ちゃんと手加減はしたさ。多分。大丈夫、彼女はまだ死なないよ。君がこのままオロオロしてたら死ぬけどね。」

更に刹那天使は続ける。

「いったろ。罪を償ってもらうって。安心してくれ！いい加減。あれは血じゃないだろう。あれは君が気付いたとき、どんな反応するか確かめたかっただけのケチャップだ。しかも彼女は血は全くでていない。」
・・・・ふーん、オチャメな天使さんだこと。まあ、僕がしっかりしなかったから悪いかな？

「でも罪は償って貰おうかな？あれ使うと疲れるし。」

そういつて消えた。僕は溜息を出し、女の子をおんぶしようとしたが、すぐに保護者がいたら渡せるように 赤ちゃんを抱くように、（まあ、お姫様ダツコというやつである。）そつともって帰った。しかし、世の中厳しいものである。帰りに生徒会長に出会ってしまった。

「！時雨君が少女を襲ってお持ち帰りしようとしている。」

完璧な誤解だ。しかも襲われたの僕だよ。

「違うよ。この子は・・・」

真実を言ったらこの子はどうなるだろう。僕を襲った所をみると間違いなく真犯人だと思う。

「・・・僕の妹なんだ。」

「・・・ふーん、はですちゃんの時もそうだったなあー。ま、君が言うんだ間違いないだろう。」

物分かりのよい人で助かった。そして僕に挨拶をして帰る途中。

「・・・罪か・・・」

となんとも気になる事を言って去っていった。

家に帰りつく少し前、女の子は気がついたようだ。

「・・・お前は二〇ルを殺した！んんっあれっ？」

・・・なんだ今の？

キヨロキヨロ目を動かしてから僕の目とこんにちわ。
途端その顔が恐怖に歪む。

「あっあっ。」

そんなに僕の顔が怖いのか？

「どうしたの？そんなに僕顔怖い？」

聞いてみるとキョトンとした顔が僕をみる。

「さっきのやつとちがう？」

どういう意味か聞いてみると素直に教えてくれた。

「さっき、おまえとたたかっていたらすぐにおまえがかわった。天使なのに悪魔になった。特に目が恐かった。」

なぜ？この子は今僕に襲い掛かろうとしないのだろうか？さっきは殺気（うわっ、くだらない。）の塊だったのに。聞いてみよう。

「なあ、なんで僕を今、襲わないのかな？今ならすぐかてるよ。」

帰ってきた答えは、

「むりだ！ぼくじゃあおまえにかてない！」

というものだった。更に、

「はじめ、ぼくがおまえをさしたときおまえの心がみえたんだ！」

なんとなく顔が赤い。・・・しまったあの天使またやってくれたな。

泣きたいよ。けど泣けないっ。だって男の子だもん！するといきなり聞いてきた。

「なぜ、そんな泣きそうな顔をしてる？」

冗談を言って自分を慰めようとしたが後で間違いと気が付く。

「ううっ、可愛い女の子と一緒に帰っているのにもうすぐ家に帰りついてしまうからだよ。」

皮肉のつもりだったんだけど、女の子は顔を赤くそめ、

「そう？じゃあぼくと公園いこう！」

・・・通じない。多分この子は真っ直ぐな性格してるからかな？
？だけど言ってしまったの僕だから行ってあげないと。

お姫様ダッコのまま公園に入る。ベンチに座らせ、名前を聞くことにした。

「ぼくの名前？高澤 しな。」

お父さんはもしくはお母さんはどこいるの？

「家！」

心配してるんじゃないの？

「ううん。しぐれくんが世話してくれるだろうっていった。」

へ、なんで僕の名前知ってるの！？

しな が僕を狙っていたのは転校してきてすぐらしい。つまり・
・あの占いしのおじさんの娘だそうだ。襲った理由は凄い。

「えーっと。しぐれとおとーさんが話したあと、魔界と戦争になる
かも知れないっておかーさんとおとーさんが話してたから、しぐれ
がわるもんだとおもったから。」

・・・・勘違いか、なんて危険な勘違いだ。

「だから、はです にもいったの！」

更に魔界のお姫様も引き込んだのか。すごい行動力だな。

しかし、親になんて言って出てきたんだろう？

「うーんとねー。ひみつー」

・・・・秘密かぁー、ま、仕方ないかな？誰も怪我しなかったし、
僕以外はいい夢見れたしさぁ。柔らかな夢がさ。

そしてまた何か聞こうと顔をむけるとこつちを涙ぐんだ顔で見て
いた。

「ううっ。しぐれゴメンばくずっと勘違いしてたみたい。」

確かにそうだ。

「やっぱり、ぼくにお仕置きする？」

うーん、生徒会長の性格なら多分するかな？ だけど僕はしないな。それに

しな は間違えたけどみんなの役に立つ事？ しようとしたし許してあげよう。

「いや、しないよ。」

暗かった顔が明るくなる。

「所で普段どこで寝てたの？」

しな が話すには僕の家の屋根だそう。前は はです もいたけど今、あの子はいない。今日まで一人で屋根の上にいたらしい。かなり、かわいそうになったので、家にくるようにいった。

「え、いいの？」

まあ、今更一人増えてもいいだろう。

そして、 しな をおんぶしようとしたら、

「さっきのがいい」

と言われた。手間のかかるお姫様だなあ。

家につくとみんなに心配されていた。 しな の話を話したら別に問題はないと母さんに言われたので しな はほっとしていた。

いざ寝ようとしたら　しな　がやってきて一緒に寝てくれと騒いだ。渋々頷いてると扉の影から蕾と美奈さんがこつちを睨んでいた。部屋の外に出て、誤解を解くのが大変だった。

「時雨様ってロリーな子が趣味なんですか？」

「いやちがうよ。」

なんとなくうつむく蕾。それに対し喜ぶ美奈さん。

「そうですよね！やっぱりメイドですよね？」

・・・なぜそうなるんだ？

その後、色々言われたが、黙秘権をつかいその場はしのいだ。

朝、体を起こすとコアラが体についていた。仕方がないので起こす事にした。

「ほら、朝だよ！」

「・・・ア○ナ様。自分は死に場所を見つけました！・・・」

・・・何いってるんだ？数分後

「ふみゃ？」

と言って起きた。猫か？

一緒に朝食をとっていら、　はです　の事を思い出した。何となく人見知りだったけど、最後には色々話してくれた。

「ぼくの顔になにかついてる？おにいたん」

は、おにいたん？なんでこんな事言ってるんだ？

「だって、この家にすむなら家族だって言ってたよ。それにぼくおにいたんほしかったんだ。」

へへーんと言っている態度がこどもらしい。ちなみに蕾の事はねーちゃんと呼び、美奈さんの事はみーねーさんと呼んでいるらしい。僕が学校に行く時、しなはかなりぐずった。

「なんでよー、はです は おんぶしてたじゃん！」

少し間違った事を言う。あれは彼女が気配を完璧に消していたのだ。しかし結局僕が折れた。

「わかった！連れてくから！」

それを聞くと僕の背中に抱き着いた。

「わーい！ありがとう。おにいたん！」

蕾は羨ましい！という顔でこっちを見ていた。実際苦労してるんだけど。

学校に着くと生徒会長が待っていた。

「やあ、時雨君。犯人は捕まったかい？捕まえたら僕の所に連れて来てくれ！お仕置が必要だから！」

その言葉にびくっとなる しな。
そして しなに気付く生徒会長。

「おやつ？また妹さんかい？保育園じゃないんだよ？」

からかわれたけどその事について他に何も彼は言わなかったが、

「今日から転校生がくるらしい。」

といった。

実の所、まだ僕はクラスに馴染めてない。そして、転校してまだ一ヶ月も経っていない。・・・こんなことってあるんだろうか？

教室に入ると亜美さんが僕に抱き着いてきた。

「時雨君ー。会いたかったよー。」

昨日もあった気がするんだけどな？そんな事より、

「亜美さん、転校生が来るんだって？」

「うん！しかもかなり美人らしいよ！」

言った後で亜美さんは

しな　に気がついた。

「誰？この子？まさか妹？」

渋々頷く僕。

「こんにちは！ぼくの名前は　しな　です。おにいたん大好きです！」

しかし、亜美さをは負けなかった。

「ふふっ、あまいわ！そんないちゃいちゃ私に通用しないわ！」

しな が聞く。

「なぜ？」

「こどもだからさ！」

・・・やれやれ、ま、襲ってこないからいいかな？

先生がやってきた。噂の転校生を連れて。その子は誰かに似ていた。

まあ、確かにかなりかわいい部類に入るだろう。髪は耳の辺りできるくるなっている。性格はおとなしいだろう。目は水晶のような色をしている。神様が僕の願いを聞いたのか、少しぼいーんだ。・・・なにいつてんだ僕は？

「えーっと、彼女の名前はディール・ハデスさんだ。みんな仲良くするように！」

男子が大騒ぎ、女子も騒いでいた。・・・しかし、僕、亜耳さん、しな はビックリした。髪の色は変わっているが、（目の色もだが、）あの はです だ。間違いないだろう。

「ハデスです。みなさんハデスって呼んでください。」

そして、天使（悪魔だけど）の笑顔。

彼女はすぐにクラスに溶けこんだ。先生がいなくなった後、僕たちを除きみんなハデスの所に行ってしまった。色々質問されるハデス。

しかし、僕は考えを巡らせていた。なぜ、同年代の大きさになっているんだ？

「まさか、誰かが彼女に秘宝をあげたとか？」
隣で唸っていた亜美さんがいう。

彼女がいうには秘宝は特別な力があり、中には体を大きくする力がある物もあるそうだ。これには　しな　もかなりくわしかった。
「けど、あの子は時雨の妹だよねえ？」

・・・しまった。

「ゴメン、あの子は魔界のお姫様なんだ。」

驚愕する亜美さん。そしてハデスがいつの間にかやってきた。顔を赤くしている。

「ただいま！おにーちゃん。お礼しに帰ってきたよ。」

たしかにその大きさでおにーちゃんは恥ずかしいだろう。しかも身長僕と同じだ。

後ろにいた　しな　が顔をだす。

「・・・僕は負けないよ！」

目をパチクリさせるハデスだが意味を理解したのか、

「うん、わかった。　しな　ちゃんが相手でも負けないよ！」
一人、固まっていたが復活した亜美さん。

「わ、私も時雨のためならなんでもするから！」

最後にハデスは秘宝のお礼をいってまたみんなの所に戻っていった。

視線を感じる。隣と後ろから。（亜美さんが僕の事を時雨と呼んだ。だが、次には呼び方が変わっていた。）

「しーくん、秘宝あの子にあげたんだあー。まだ私何ももらってないよ！」

「しーくん！なにそれ！」

「時雨だからしーくん！」

なんか今日はかなり厄日になりそう。

「おにいたん！僕ももらってないよ！」

しかし、しなはあっと思いだし、にやりとほほえんだ。・・・しなは占いしの娘だ秘宝を持っていたとしても不思議ではないだろう。

僕の予感はあるかもしれない。

そのご 子守天使再び（後書き）

今回短いのは番外編みたいにしたかったからです。後、みなさんありがとうございます。みてくれて。評価してくれる人がいたらついでに好きなキャラを書いてくれるとそのキャラを優遇したいと思います。大体、キャラがでましたんで、たまにシンキャラ出す位にしたいと思います。最後に、次話も誰かが読んでくれたら書き出そうと思います。

そのろく 時雨の夏休み壺（前書き）

えーっと今回は夏を題材としてみました。

そのろく 時雨の夏休み壱

・・・夏休み一日前の夜、しながいなくなった。家に帰ったらしい。なんとなく寂しかったけど、会おうと思えば会えるので、今日は怖いテレビを見ることにした。・・・夏なのでホラーな番組が多い。

「・・・さて、私がやってきたのはとある学校で、昼間は高校生が騒いでいますが夜は違うものがあるそうです。」

・・・うーん、胆だめしみたいだなあ。

笑っているのもそこまでだった。隣で見ていた蕾が（かなり、震えている。見なければいいのに。）言った。

「に、兄様。あの学校私たちが通っている学校じゃない？」

・・・確かに。しかし、そんな怖い噂なんて聞いた事ないけどな？

「・・・あ、なにかいました！廊下を黒い何かが横切りました。」

「ほ、ほらっ！私たちの学校には何かいるんだよ」

うーん、いっぱいいるな。人間以外のなにか。ま、間違いなく天使と悪魔がいるな。

「私は！勇気を出してあの影を追いたいと思います。」

・・・スイマセン、さっきの影おいかけれないとおもいますよ。なんせ、リムジンみたいだし。

ガクガク ブルブル

「兄様、違うの見ようよ。怖いよ。」

まるでこどもだ。

「わかったよ、じゃあニュースでもいいかな？」

「うん！怖い以外のなら。」

変えようとする携帯に電話がかかってきた。名前表示はなし、オレオレ詐欺かな？（振り込め詐欺かも）

「はい、もしもし？」

僕は！勇気を出してそういった。相手は意外な人物だった。

「わーやったー。お金出して聞いたかいがあったなー。」

「え、焰さん？」

相手は電話帳に入れてない人からだった。

「なんで僕の番号知ってるの？」

「ああ、生徒会長が時雨君の電話番号を売りにきたんだよ。」

何、まさか友達の電話番号を売りに出すとは。

「別に買わなくてもいいのに。聞いたら教えてあげたよ。」

少し間があき、

「だって、恥ずかしいんだもん。所で明日空いてるかなあ？」

「うん、大丈夫だよ。……あのさ？なんで喋り方変わってるの。」

ですわといってたような気がしますか？

「うふふつ、あれはね、学校だけなんだ。監視されてるからね！」

……誰にだろう。

考えていると

「じゃ、学校で待ってるねえー。」

言ってきたってしまった。

蕾が既に泣きそうな顔になっている。

そして、お休みと言い、部屋に戻った。

僕も寝る準備をしてベットに転がるとドアが軋みながらあいた。びくつとした僕は多分人生の負け組だろう。

当然、お化けではなかった。入ってきたのは青い顔して、枕を抱いた蕾だった。

「どうしたの？」

「あう、怖くて眠れない、兄様の所で寝かせて。」

僕の所にあるベットはかなり大きく、三人は軽く寝れるだろう。

「いいよ。怖いならさ。・・・ごめんね、僕が無理に誘ったから。」

他の人にも誘ったが、執事さんは居なかったし、美奈さんもいなかった。母さんは朝が早いので、寝てしまった。

壁のほうに体を動かし、場所を空けてあげる。何となく、ドキッとしたので蕾のほうを見ないようにしていると背中に何か触れた。まだ、震えている。

そして、蕾は後ろから僕にしがみついていた。震える感触が可哀相だったが僕は後ろから、抱きしめられるのはトラウマだ。更に、背中に柔らかい何かが当たっている。

「ゴメン。兄様。」

そういう蕾は引越す前の蕾とは別人のようだった。（何となく生意気いって、勝ち気な性格をしていたきがする。しかし、怖いのは駄目だった。）

蕾が力を入れる。ああ、背中が柔らかいとは思わなかった。力いれすぎて体が痛い。僕は縛られてきもちいいとは思えないさ。

そんなどうでもいい事を考えていると、

「兄様がかまってくれないから淋しかった。」

といい始めた。

・・・何故だ？ しながいても蕾に冷たくあたった覚えはないぞ？ しかも、怖くて僕の隣にいるんじゃないの？

そんなとき、何かが僕の首を濡らした。

「ううっ、兄様！」

ぐはっ！だ、誰か助けて！このまま力が強くなっていったらあばらが、やばいっ！蕾を落ち着かせなければ。間違えたらあばらが折れるだろう……」

「だ、大丈夫だよ。僕はここにいるだろう。だからそんなに抱きしめなくてもいいよ。」

「……これで大丈夫だろう？」

「に、兄様ー。ありがとう。」

ぎゃあ！やばい。体が動かない。

「私、いつも夢で兄様が血だまりの中に倒れてたんだ。」

へ、へえ、そう？僕、いまなりそうだなあ？

「だけど、兄様が言ってくれるなら大丈夫だよね？」

「あ、うん。だ、大丈夫だよ。約束だけは破った事ないよ。」

「よかった。」

ふう、助かった。しかし、僕と蕾は一応、双子というはずだぞ？年だって一年も離れてないし。

「すぴー。」

後ろからは静かな寝息が聞こえてくる。しかし彼女はまだ力を抜いてはいなかった。

「……それから朝まで眠れない時間を一人で過ごした。何故なら僕が少しでも動こうとすると凄い力が僕を抱きしめるのだ。しか

し、蕾は幸せそうな顔で起きた。少し恥ずかしそうな顔で・・・。

「兄様何もしなかったよね？」

・・・当然だろう、したくても出来なかっただろうに。

「出来なかったよ。」

？ と顔をしながらも僕にとって怖いことをいいだした。

「あ、あのさ！怖くなったらまた来てもいいよね？」

・・・できるだけ、この子をこわがらす事はしないでおう。

「うん、どうぞ。」

幸せそうな蕾の顔。そして、対象的な僕の顔。

それから、僕が家を出るまでずっとニコニコ顔であった。
家を出た後の事を少し書いておこう。

「蕾様、何かあったのですか？」

「ううん！なににもなかったよ！」

（嘘ですね。どうせ時雨様が何かしたのでしょう。）

「そうですか。ならいいです。」

（さて、時雨様の部屋を掃除しますかね？）

「あ、何処に行くの？」

「時雨様の部屋のお掃除ですよ？」

「私も手伝うよ！」

「いえいえ、結構ですよ。お暇なら植物に水をやってもらえませんか？」

「うん、わかった。」

（まあ、相変わらずきれいですねえ。）

「ん？この本は？」

（なるほど、時雨様もこんな本を持ってるんですねー。ちなみにどんな子が好きなんですか？いつも小動物のような少女を連れてくるからやっぱ、ロリですかね？・・・あれ、少女系じゃないみたいですわね？・・・あ、メイド系発見！うふふ。なんか嬉しいですね。）

と、時雨の秘密が発見され、美奈さんは大喜びだった。

時雨は誰もいない校舎に來たまでは良かったのだが、肝心な事を忘れていた。

「あ、しまった。時間聞くのわすれた。」

仕方なく、そこで待つ事にしたのだが、日差しが強かった。だから、校舎の中に入る事にした。一階は車も通るので、開いていた。（2階、3階、4階も車は通るが、一般車両は通る事ができない。）入ってすぐにベンチがあったので、そこにすわり、電話をした。

「あ、もしもし、僕だけど。あ、そう？今から来る？じゃあまってるね？」

・・・さつき、電話で

きる といったけど何を切るんだろう？間違えたのかなっ？

うとうと、ふぁー、ゴロン。グーー。

なかなか寝れなかった時雨はベンチに横になり夢の世界に旅立った。

「・・・また戦争がしたいのか！あんた達は！・・・うーんむにやむにや。」

ぱしゃ。

「ん、なんだ？」

起き上がってみると携帯を持った焰さんが立っていた。

「あ、時雨君。おはよう。」

しかし、太陽は真上に輝いていた。
ランランと、眩しく。

「あ、うん。おはよう焰さん。」

目を閉じる焰さん。

「おめざめのちゅー。」

・・・。

だんだん寄ってくる焰さん。まだ、時雨の頭は正常に動いていなかった。

「んーっ。」

後、少し位。距離にして みかん一つ。

「・・・・・・・・・・は、」

横を向きくしゃみする時雨。その刺激により、再起動する頭。

「うわあ！何してるんですか！」

肩を押さえ、進行を防ぐ事に成功。

「おしかったな。もうちょいだったし。でも、寝顔撮れたからいいかな？」

早く話題を変えないとまずいかな？

しかし、既に昼。時雨のお腹は叫んだ。

グー。

「あ、やっぱり、お腹減ってる？お弁当作ってきたんだ！食べよ！」
なんとか話題を変える事に成功。

「じゃーん。」

お弁当は自分は美味しいと静かに主張していた。

「はい、あーん」

そんな事を言いながらおかずを口に運んでくる焰さん。

時雨の中では戦いが起きていた。

「うおーっ、お腹減った！さっさ口ひらけやー」

「く、なんて破壊力だ。だがこちらにも負けはせん。迎撃用意！」

「ふ、見せてもらおうかれんぼーのモビル○ーツの性能を。」

結果を言うとは本能が勝った。勝因は赤い奴のおかげだそうだ。

「おいしい！焰さんが作ったの？」

「当たり前じゃない！あのさ、実は手伝ってほしい事があるんだ。」

「うん、何？」

少し恥ずかしそうな顔をして、答える。

「実は私、死神なんだ。だけどさ、鎌を振るの苦手だからさ特訓してほしいんだ。私を。」

「何故、そんな事を僕に頼むの？」

って、やっぱり死神だったんだ！

「死神ってやっぱ、人間の魂刈るの？」

首を横に振る。

「簡単にいうなら死んだ後の後始末をしてるかな？つまり、肉体から離れた精神を鎌で引き寄せて道案内してるんだ！けどね、たまに精神が襲ってくるんだ。」

（精神とは簡単にいうならお化けらしい。）

「この前、学校に追い詰めただけど負けちゃったんだ。・・・お化けに。」

啞然としたなあー。以外な一面だ。

「えーっと、なんで負けたの？」

泣きそうな顔をする、

「だって。・・・お化け怖いんだもん。」

鼻水まで出してる。

「わかったよ。手伝うよ！だから元気だして。」

「ありがとー、時雨君！」

わー、抱き着かないで！流石に鼻水は汚いとおもうから！・・・あ、ついちゃった。

「それで、僕は何すればいいの？」

鼻をかむ焰さん。例えるならひまわりの種を食べるハムスターだ。

「ちーん。えっとね。まず私と闘って欲しいんだ。」

僕はまだ闘った事が一度もない。が、僕の為にもなるので（多分）闘う準備をすることにした。

『我は、罪を背負う悲壮の天使』

彼女を見ると黒いボロボロの布をまとい、自分の二倍程もある鎌を取り出した。

僕も初めて光剣をとりだした。

「じゃあ、いきますね！」

戦闘を開始して気付いた事があった。何となくだけど相手の動きがわかるのだ。・・・僕って実はニュー〇イプ？

「・・・・・・・・見える。」

焰さんは汗だくで鎌を振り回している。

「はぁ、はぁ。」

そのまま前に倒れる体制になったので抱き抱え、ベンチに寝かす。

・・・大丈夫かな？

彼女は泣いていた。

「ううっ。」

「うわっ！どうしたの？」

涙で光る目をこっちに向ける。

「実は今日中にお化けを退治しないと私、退学になるんです。」

「・・・・・・・・。」

「だから、だから頑張ってきたのに。」

「お化けを消せばいいんだよね？」

「？ はい。そうですが。」

生徒が困ってるのだから番長が助けてもいいはず。

「ところでお化けてこの校舎だよね？」

頷く焰さん。

「じゃあ、僕が行ってくるよ。いろいろお世話になったしさ。」

返事を待たずに歩き出す僕。そして後ろから、

「あのー相手は地下にいます。」

・・・うわっ、はずかしっ！階段のぼろうとしてたよ。

「時雨君だけ行かせません。私も、私も行ってお手伝いします！」

そして、地下につくやいなや彼女は僕にしがみついてきた。腕に当たる感触がぐっとなるなあー、かなり柔らかいし、あれ、まさかあれを付けてないからかな・・・？まさかね。

がさっ。

「きゃあっ。」

・・・更に押し付けられていい気分！・・・何言ってるんだ僕

は？

一向に離れようとし
ない
焰さん。

何かを言おうとして気がついた。・・・近くに何か居る？そうか。
この感覚がお化けか。

「少し離れて！」

「え、うん。」

横に移動するまで待つてから天使化。

『我は、悲しみをまといし天使。』
・・・まだだ。力が足りない。そう、感じたときふしぎな言葉を
口にしていた。

『我は天使と重なりし、
孤高の魔王。太陽を守るため月の剣を我に与えよ。』

右手に羽と同じ色の剣。そして、左手にはまがましい形をした蒼
い剣を持っていた。

辺りが真っ暗になり、お化けとやらがでてきた。

『・・・しゃー。』

・・・もはやそれはお化けではないだろう。顔がなく、目玉だ
けの存在簡単にいうならでっかい目○親父だろう。

「きゃーでたー。ー。」

僕の背中にしがみつく焰さん、しかたなしにその状態で剣を振り回した。・・・悲しいかな？当たらず、虚しく空を切るばかりだったので蒼い剣を投げ付けた。（良い子も悪い子もまねしないように！）

刺さるというより、剣が目玉を食べているような光景。目玉が剣に食われている間、焰さんには見せないようにしていた。そして、辺りが静かになる。

天使化を解き、後ろを振り返り笑顔で終わりを告げた。

「さ、終わったよ。」

顔を上げた焰さんはまた、鼻水が・・・。

「・・・ありがとう！時雨君！だーいすき！」

ばすつ、と僕に抱き着いてきた。・・・うれしいんだけど、鼻水が・・・。

その後は、二人で町に行き楽しんだ。久々のデートというものだ。（ちなみに僕は昔彼女がいたが、フラれてしまった。）

「今日は本当にありがとう。」

「いやいや、ノートの御礼だよ。」

今でも、たまに活用させてもらっている。

「また！新しいの作ってくるね！」

そういつて家に帰っていった。

夏休みの初めての日の事であった。……だが、これで終わったらおもしろくないので続きを書いておこう。

僕が家に帰り着くと家は静かであった。

「？　みんないないのかな？」

僕の部屋からは物音がしたので静かに覗いてみると、僕の宝物が美奈さんにより、発見されていた。……全て。　しな　がいつも僕の部屋にいたので、ばれないように隠していたがまさか美奈さんにばれるとは……。　しかも何か言いながら本を物色している。

「……これは、駄目ですね。私の仲間が載っていません！　しかも、ロリっぽいからなおさらごみ箱いきですね。」

ああ、僕の宝物が減っていく……。　。

静かにその場所を離れ、蕾の部屋に避難しようとするとうとう蕾がいた。何か見ているようだ。震えている。

「ううつ。こわいよー。」

なんと、ホラーな小説を見ているではないか！　何故に？　しかし、幸せ顔になり、独り言。

「うふふ。今日も兄様と寝よう。」

……自らそんな事するとは、だけど今、声出すとばれるからなあー。

時雨は地下であった事は既に忘れていた。……彼の羽が更に紅くなったのに気がついた者はまだいなかった。

そのろく 時雨の夏休み壺（後書き）

．．．．たまに出したキャラを忘れてしまう事があります。悲しいです。だから今度はあの人を出したいと思います。みなさんまたよろしくおねがいします。

そのなな 夏休み弐(前書き)

今回は、少し時雨君がかわいそうです。

そのなな 夏休み式

「……………今日は焰さん以外から電話が掛かってきた。」

「えーっと、思いでした！この声はなんとか 舞さんだ！」

前、保険室で僕を襲うとした罪人天使だ。（あの時はかなりやばかった。）なぜ、僕の電話番号を知ってるのだろう。……………犯人は多分生徒会長だろう。

「あはは、なんとかか、……………私なんてそんなものかな？」

電話の向こうから寂しそうな声が……………。

「ごめん！だってまだ一度しか会ってないしさ！」

……………だっては言い訳だ。

電話の向こうから含み笑いが……………。

「ありがとう。ふふっ。じゃあ、町に行きましょ。時間は10分後ね！」

「あ、ちょっと待って！誰から僕の電話番号聞いたの？」

「え、生徒会長が教えてくれました。」

やはり犯人は生徒会長か……………。許さん！

「ありがとうございます。じゃあまたあとで。」

電話をきったあと、生徒会長に苦情の電話をかける。

「……はいっ！ただいま生徒会長様は電話にでれません！ぴー
ってな……」

がちゃ！ツーツー。

……なんだ？今の？

時間がないので準備をすることにし、宝を今度こそ隠す。

（よし、間違いない。今度こそ大丈夫。）

「ちょっと、行ってくるね。」

蕾はいないので、美奈さんだけに言う。執事さんは夏休みの休暇
をとり、今はいない。

「はい、行ってもらっしやいませ！ご主人様！」

……まただ、あれが美奈さんにばれてからずっとこの調子だ。
僕を名前で呼ばなくなってしまった。

「あのー、美奈さん？名前で呼んでいいですよ？」

「え、だって。時雨様はこうして呼ばれたら嬉しいと思って。」

……くっ、確かに嬉しいけどそういわれる度に蕾の冷たい視線
が僕を突き刺すんだ。

蕾と約束して、彼女はかなり甘えるようになった。夜中はいつも枕を持って僕のベッドで寝ている。更にトイレに行く時も僕を起こす。

まあ、これはどうでもいいかな？

「お願いします。呼び捨てでいいので名前でも呼んでください。」

頷く美奈さん。彼女も何となく甘える時がある。

「わかりました。私は嬉しいんです。」

・・・聞くのが恐い。

「えーと、何がですか？」

「だって、時雨様の秘密の本には私みたいな・・・」

「わーっ、やめて。やめて！」

急いで家を飛び出し現実逃避する僕。

いなくなった時雨の部屋に忍び込み物色を始めるメイドさん。

彼はそんな事を忘れ、待ち合わせ場所にきていた。

・・・あ、しまった。部屋にカギかけるの忘れた・・・。

「時雨君！久しぶり！」

なんたら 舞さん（名字を忘れてしまったままだ。）

「あ、どうも。舞さん」

「嬉しいな！本当に来てくれるなんて。」

その後は二人でデートをし、楽しんだ。しかし家に帰ってからが大変だった。

・・・やはり、荒らされたか・・・。

一見、綺麗に部屋がなっているだけだが、隠していた宝物が全て無くなっていた。

「はあ～～～。」

溜息を出していると後ろから、

「時雨様。」

と、誰かによばれた。美奈さんではないようだ。

廊下には執事さんがいた。

あ～～～、休んでいたのではないんですか？

心の中で問い掛ける。

「実は美奈さんが時雨様にいたずらしていると聞いたから帰ってきました。」

この人相手では何を考えても無駄なので、あきらめよう。

「あのですね、確かにされましたが僕が悪いからです。」

執事さんの目は僕を見極めるように見ている。

「・・・おやさしいですな。時雨様は。」

いや〜ありがとうございます。

「しかし、優し過ぎますね。今回は時雨様に免じて彼女には何もしません。」

よかった。・・・あ、そうだ。まえ、冥土さんと言ったけどあれはどういう意味なんでしょうか？

首を縦に動かし、

「魔界に仕える物の事です。ちなみに力の強い者に仕える事は魔界では大事な事です。」

・・・あのーっ、僕は罪人天使ですが一応天使です。

「実は貴方は悪魔なのですよ。」

・・・へえーそれは知らなかった。

「しかも、かなり強い力を感じます。しかし、貴方は天使と契約し、天使になってしまいました。だから、完璧な天使になる事が出来ず罪人天使になってしまったのです。」

あ、そうなんだ！しらなかったなー。・・・へ、僕が悪魔？

「はい、その通り、です。」

ま、それより聞きたい事があるんですが、

「なんででしょう？」

パンドラの箱とやらを開けたらどうなるんですか？

「えーと、」

初めて口ごもった！そんなに凄い事なのか？

「時雨様が後、一年以内に誰かと契約しないと、」

しないと、どうなるんですか？

「……正直に言ってよろしいですか？」

……できれば小さな声でお願いします。なんか恐いから。

「襲うのです。人を。」

はあ、よく意味がわからないんですが？

「正確に言いますと、……女の子をだけ、襲います。」

……う、うそだー！。いやだー！まだ犯罪者になりたくない！

「だ、大丈夫です。時雨様がそんなになりましたら、私が消してあげます。」

そりゃ、ありがとうございます。

「それに、必ずそうなるとおもいません。」

そ、そうですね！

廊下から美奈さんがやってきて僕を連れ去った。

執事さんもびっくりしている。

・・・そして、今僕は美奈さんが使っている部屋に監禁された。

「時雨様！友人に頼んでいた物が来ましたので使わせてもらいます！」

手に持っている注射器には不思議な液体が・・・。

「ちよっ、まって。なんですか！それ！」

「自白剤です！」

有無言わず僕の首に注入！・・・なぜ、僕がこんな目に合うんだろう？

「・・・そろそろ良いでしょう。では始めますか！」

・・・何をでしょうか？

「時雨様！貴方は部屋にムフフな本を隠してますね？」

く、しまった！ヤバイ口がかってに！自白剤じゃないだろうこれ！

「い、イエス。」

ああっ、喋っちゃった。

「・・・かなり、凄いですね！この薬。じゃあ第二問！メイド系の本が大好き？」

な、なんて質問だ！答えるはずができない！く、口が勝手に！

「い、イエス。」

はしやぎまくりのメイドさん。

「やったー、じゃ、時間が無いので最後。年上系が好きである？」

ぼ、僕はだいつきらいだー！

「イエス！」

……。ゴメンなさい。嘘ついてたみたいです。

メイドは僕に抱き着き去っていった。そして執事さんが僕を助けてくれた。

「……。すいません。時雨様。」

だ、大丈夫です。メイドがいつていったのは僕です。

それから、やるせない気分ねるまでニコニコ顔の美奈さんを眺めている僕であった。

ベットに転がり、泣いてる僕。すると、いつもより早く蕾がやってきた。涙はみせまいと反対のほうに顔を向ける僕。

「……。ゴメンね！兄様。」

直後、首筋に注射の感覚が……。

「さっき、廊下でひろったんだ。兄様に聞きたい事あるし。」

汗だくだく！心臓ばくばく。しかし、なぜ蕾が自白剤なんてしているだ？

「第一問！兄様は私と寝るのがいやだ？」

・・・よかった。美奈さんに比べればマシだ。

僕は蕾を甘く見ていた・・・。

「のうー。」

ほっとする蕾。

「じゃあ、第二問！兄様は妹系が好き？」

あ、なんかおかしくなってきた。

「イエス。」

「・・・そうだったんだ。」

あゝ恥ずかしい。何言ってるんだ僕は？

「三問目！すでに二回目の契約をだれかとしている？」

「のうー」

「じゃあ、」

そうして、朝方近くまで僕は質問攻めにあった。だが、流石

にヤバイと思う質問には答えないように努力してみた。

自分に剣を刺したりしたが蕾にとめられた。

「最後に、私が妹で嬉しいと思っている？」

ああ、最後は普通だ。

「イエス。」

しかし、これで質問は終わらなかった。

「……時雨はエッチである。」

だ、誰だ！母さん？何故？

「い、」

や、やばい！何とかしないと！

「いーえ！」

勝った！やった！やった！

そのまま僕は眠ってしまい、その日の昼に起床。
少し真面目な事件に遭遇することになる。

そのなな 夏休み式（後書き）

えーつとまず始めにありがとうございます。ちょっと時雨君がかわいそうですが次回への伏線ということで・・・。いつものようにイマイチな文ですが、次回またかけたらよろしくおねがいます。
・・・最後に出来たら評価してくれたら嬉しいです。

そのはち 時雨の記憶と約束（前書き）

今回は時雨過去について書いて書いてみました。

そのはち 時雨の記憶と約束

『日記帳』

蕾は兄の部屋で日記を見付けました。そして、何も考えずにそれを見付けました。

『今日、亜美さんという人と、仲良くなりました。』

・・・これは兄様がこっちに来て仲良くなった友達の事を書いてるみたい。

『亜美さんと仲良くなるまえに焰さんという女の子と仲良くなりました。』

『今日、剣治という男と仲良くなりました。』

・・・ほっ、男の子がでてきた。

しかし、その後は全て女の子。更に、色々な情報まで。
しかし、時雨が入ってきた。

「何、みてんの？」

あ、兄様が来た！やばい！

「わー、なんでもない！」

時雨は素早く蕾が持っていたものを奪いみる。

「あ、それは！」

だが、時雨は不思議な顔をしている。

「これ、誰の？」

え、兄様のじゃないの？じゃあ、誰の？良かった。兄様が変態じゃなくて。

（実は蕾の情報あまり書かれていなかったから不満なのだ。）
「うわっ！凄い情報がかかれてる。な、何蕾の情報まで！」

『今日、蕾と久しぶりに寝ました。蕾は柔らかかったです。しかし、ちよつと小さいかな？抱き着いてる力がつよかったです・・・』
ばたん！

「ねえ！なんて書いてるの？」

「・・・いや、違ったみたい。」

「？ え、違うの。」

「・・・ねえ、天使。これ、僕が書いた日記かな？」

「・・・ああ、それはスケベになったお前が書いた物だ。お前はもう一人いるんだ。会いたいなら合わせる事が出来る。」
「・・・僕は二十人格だったのか。」

「・・・お前の煩惱の固まりだ。しかもお前の悪魔の力を持っている。」

・・・とても強そうだ。勝てるかな？

「ほう。戦うのか？じゃあ今日の夜、公園に行こう。そこで奴をお前の前に出そう。」

・・・コメディーだけど戦っていいですよね？

「兄様？どうしたんですか？」

「あ、何でもないよ。この日記僕が燃やすよ！」

「え、分かった。」

・・・その日の夜、蕾が寝たのを確認し部屋をぬけだした。

静かな公園に佇む時雨。

「・・・じゃあ、今からお前を出す！」

途端、体を激痛が・・・襲う。

か、体が引き裂かれる感じだ。

「・・・何故、お前はもう一人つまり煩惱をわざわざ召喚する？執事にきいたろ？煩惱はパンドラの箱だ！」

し、知らなかったなあー。こ、これが・・・確かに人が変わりそうだ。だ、だけど希望だってあるはずだ！

痛みが消え、視界が広がる。

「こ、これが僕の煩惱？」

顔が全く一緒だ！（当然、自分だから仕方ない。）

「ははっ。ばれちゃった!」

・・・声が高い?

「ふふっ、驚いた? 僕は女だよ。」

悪魔の羽が生え、左手にあのまがましい剣が・・・・・・。
だが、時雨（罪人天使）は時雨（悪魔）に始めてあった気がしない。

「君は、刹那の天使か?」

刹那の天使とは時雨が初めて亜美と戦った時に出てきた天使である。そして、しな との戦いで助けてくれた存在でもある。

「ばれちゃった? てへっ?」

・・・自分が笑っている。（何となく顔が女の子っぽいかな?）

「なのであの日記を書いたの?」

ふっと笑う自分。美男子みたいだ。

「え、だって僕は一応女の子だし、あ、当たり前だけど君の事じゃないよ。」

まだわからない。

「つまり、君が寝てる時に体を借りて書いてあげたんだ。わかりにくいかな? 僕の趣味だよ。」

・・・なんて趣味だよ。

「まあ、いいだろ？それより君は僕を消すつもりだろ？」

そんな気は、

「そんな気ないよ！」

笑う自分。・・・頭がおかしくなってくるようだ。

「じゃあ、僕が君を・・・消してあげる。」

いきなり襲い掛かる自分。迫る刃。天使化してない僕は、なすすべもなく刺される。

「く、何故君は僕を消そうとするんだ！」

喋る度に刺さっている所から血がふきでる。

少し影を落とす自分。

「・・・それは、簡単なことさ。・・・コインは常にどっちかが上を向いているよ？君は表、僕は裏。僕は表になりたいんだ！」

おかしい。おかしいよ。ならなんで助けてくれたんだ？

「いままでだって、変わろうと思ったらかわれたよ？だけど、ただ。君は優しかった！」

・・・素直にありがとうそれが仲直りの秘訣です。

「なら、なんで？」

「構ってくれないからっ。私の出番短いからっ。」

・・・確かにだが、

「でも、結構いつも話してたよ？」

「刹那の天使って言ってたじゃん！刹那って一秒より確か短いんだよ！」

「・・・確か？ハッキリ分らないの？・・・どうやら、戦わないと駄目みたいだな。」

体を突き抜ける刃を素手で掴み、

『我、さみしきコインの表、そして終わりを告げたい天使。』

「分らず屋さんには僕がお仕置きする！」

左手で剣を掴み、刹那の天使を引き寄せ、抱きしめるように剣を刺・・・せない。・・・向こうから抱きしめて来た。

しかし、不思議と悪意は感じなかった。そして思い出した、僕を刺すと相手に心がわかってしまうのだ。

「本当は、出番なんてどうでも良かった。」

体が消えていく、刹那の天使。

「じゃあ、何がしたかったの？」

「・・・伝えたかった。私は時雨じゃないって。私は私だって・・・。」

そして、消えてしまった。刹那の天使。なぜ戦ったか理由も分からないが終わってしまった事は仕方ない。

一人佇む時雨に雨がふってきた。

『おねーちゃん。』

『逃げなさい！時雨！早く逃げないと……。』

これは悲しい記憶。だが彼女が僕の中に入る事はないから……。
今度、聞いてみよう。・・誰かに。

無意味な戦いをし、雨に打たれながら静かにその場から消えた。
・・・・家に帰り、寝てしまうと夢を見た。

『頭が爆発寸前なので緊急会議をはじめますっ！』

そこは広い会議室で長いテーブルがおりてあり、時雨が三人座っている。

『僕はまずなぜ戦わないといけなかったか聞きたいと思います。』

『異義あり！今更、何キ○・ヤマトみたいなこといつてんの？』

『そうだ、終わってしまった事はしかたないだろう。お前は煩惱にかかったからいいだろう。』

『だって、時雨が僕を助けようとしていたなんて思わなかったんだもん。』

『わかった！めんどいから二つに分けよう。』

『いい考えだ！』

・・・結果、僕が二人になりました。
理由は自由がほしいなら、一度あげてみたらわかるだろう・・・。

ちなみに別れたのは朝食を食べてるまっ最中！

「ぐ、ぐへっ。」

・・・口から出てきました。

「に、兄様が二人に？」

「あははっ！オハヨウ！蕾。」

・・・蕾が固まった。

「ありがとう時雨。出してくれて。」

「いや、お礼なんていいよ。それより・・・。」

・・・蓄みたいな人がこれ以上増えたら大変だ！

「分かってるって！大人しくしとくよ。」

・・・僕は僕を信じよう。・・・やっぱり、信じられない。悲しいな。・・・何しでかすか分からないぞ！僕の煩惱は。

「やっぱり、ついてきてください。」

「じゃあ！ついてく。うふふっ。デートだね！」

・・・人類史上初！自分とデートする人間。

「あ、あのさあ。」

「え、何？」

・・・なんだろう？

「・・・時雨ってお互い呼んでたら不審に思われるよ？できれば違う名前で呼ぼうよ？」

・・・そうですね。双子って設定でどうでしょうか？

「じゃあ、君が時雨A僕が時雨B」

「え、それじゃあ意味ないでしょ。」

「じゃあさ！君が時雨でいいよ。僕の名前は君が決めてよ。」

うーん、なんてつけよう？

「・・・五月雨は？」

「却下、かわいい名前がいい」

・・・流石に駄目だったか？

「・・・じゃあ、さ、千夏は？」

「うん、いいかな？じゃ、そういうことで。」

途中、美奈さんに会わないように町に行きました。

そして、亜美に会いました。

「・・・しーくんが二人？」

千夏と目を合わせ、

「この人は僕の双子の姉、千夏姉さんって言うんだ。」

「はじめまして！僕の名前は千夏だよ！・・・亜美さんですよ？時雨君から聞いてますよ？優しい人だって。」

「や、優しいだなんて。あはは、なんか恥ずかしいから行きますね？」

駆け足で去っていく亜美さん。

「・・・まあ、いいかな？」

その後、誰にも会わずに家に帰る事にしたが・・・。

「・・・時雨君。最後に聞いて欲しい事があるの。あの公園に行きましょ？」

公園についたら、いきなり悪魔になってしまった千夏。

「さあ、最後に私をあなたの中に戻して！」

「・・・できないよ！自由になれたんだよ！今更何いつてるんだ！」

「・・・ありがとう、だけど私は貴方に必要になる力。急がないとパンドラの箱を完全に開ける事になる。・・・箱の中には絶望だけじゃない。私が貴方の希望になってみせるから・・・！」

「つつ、くそーっ。」

『我は悲しき罪を背負う・・・天使。』

紅い羽は前より、紅くなっている。

「・・・大丈夫。私は君を見てるから！いつでも。」

「・・・うわーっ！」

・・・体を貫く感触がない、目を閉じていたのでわからなかった。

「はぁーい、時雨君？」

・・・千夏は僕の頭の上に乗っていた。しかし悪魔の羽が生えており、身長は手の平サイズ。

「私は悪魔の力の結晶だから・・・いつもいるよ。」

最後のお願ひ、あの日記をきちんと書いてね？まだ、メイドさんとか書いてないから。

・・・手間取ってなんか損したかな？

静かに一人佇む時雨。夕日を眺めていたが一人ではない気がした。

『・・・時雨！私の弟だから、一人になっても大丈夫！・・・君には仲間が・・・』

『ううっ、ねーさーん。いやだ。いやだあ！』

『ま・・・た・会え・・・るからね？』

『分かった！僕姉さんに約束する！姉さんみたいな、約束を守る人になるよ！』

時雨が一人佇む公園、彼の影以外に影はあった。・・・かなり沢山。それらは木の影から覗いていた。

時雨は家に帰り、日記を付けようと思った。

『さよなら、時雨。』

『千夏姉さん。任せて、約束は守ってみせるから』

「ま、頑張っかけてね？」

「分かったよ、千夏姉さん。約束は守るよ。」

・・・時雨はその後、きちんと日記を書いた。彼は気付かなかつたが日記の最後には 千夏 と書かれていた。

そのはち 時雨の記憶と約束（後書き）

なんとなくシリアス？になってしまってますいません、最後の沢山の影は亜美から話を聞いた剣治がみんなに情報を送り、最後の一部始終を見にきてました。最後にまた見てくれてありがとうございます。一人でも見てくれる人がいたら続けたいと思います。

そのきゅう 甘える蕾と甘やかす時雨（前書き）

今回は蕾がいつもより多く出番があったり、大体の人達が出ています。

そのきゅう 甘える蕾と甘やかす時雨

・・・近頃、蕾が僕にべったりくつき始めた。何処に行こうとしてもついて来ようとするのだ。怖い時、僕の部屋に来て寝ると決めていたが、いつも僕の部屋には蕾の枕が置いてあるようになった。まだ、これは許されるだろう。夏休みの半ば程の事である。お風呂に入ろうとすると、

「兄様！一緒に入ろう！」

と行ってきたのだ。さすがにやばいと感じたので、

「い、いや。さあ、お風呂狭いだろう？」

その時は

「ああ、確かに！」

と言って納得してくれたと思ったけど、現実は厳しかった。・・・入って来たのだ。体を洗っている時に。

「兄様！背中流すよ！」

タオルを巻いてたのが救いでした。

「昔は一緒に入ってたよね！」

「え、うん。じゃなかった。何で入って来たんだい？」

赤い顔になる蕾。

「だって、一人で入るの怖いから・・・。」

「なら、母さんか美奈さんと入りなよ。」

急いで浴槽に入り壁を見ながら話す。

「あ、そうだね。今度からそうするね。」

うんうん、助かるよ。ぼくも・・・今度から？

「今日は濡れちゃったからこのまま入ろーっと。」

蕾が浴槽に入る音が聞こえる。さすがに二人入るのは少し狭い。

「えへへ、兄様ー。」

ギューっ。

「うわーっ。僕、もうあがるね！」

「離さないよーっ。」

ムギュー。

あ、やばい鼻血が出そう。

何とか風呂からあがってさっさと寝ようとする。・・・その日も蕾が既にベットにいた。

「兄様早く寝よっ。」

出来るだけ蕾から離れて寝るように努力しているのだが、

「兄様、怖いよーっ。」

ムギュー。

凄い力で抱きしめられるのだ。もはや嬉しいを通りこしている。

その次の日、友人に相談をすることにした。だれがいいかな？・必然的に一人に絞られるのだけど。

「あのーっ、剣治君の友達の時雨って者ですけど・・・」

「あ、はいどうぞ坊ちゃまは今、部屋にいますよ。」

「ありがとうございます。」

そして、今生徒会長に相談しているのだ。

「・・・ということなんだ。蕾は妹だけど歳は一年も離れていないんだ。」

「羨ましいな。僕とかわって欲しいぐらいだ。」

「まあ、慕ってくれるのはうれしいんだけど・・・。」

「シスコン（ぼそっ）」

「何か言った？」

首を振る生徒会長。

「しかし、君は小さい子にもてるな？」

「そんな事ないよ。」

「ロリコン（ぼそっ）」

「何か言った？」

「いや、何もいってないよ。・・・多分蕾ちゃんは君から信用してもらおうと思ってるんだよ。」

・・・あの行動で？

「え、どう考えても蕾が僕に甘えてるだけじゃないかな？」

「ふ、シスコン時雨君。」

信用してもらうにはまず、自分から相手を信用しないといけないだろう？」

「ああ、成る程。流石生徒会長！だけどシスコンはよけいかな？」

「ごめんよ。ロリコン時雨君。」

「・・・それも余計だよ。」

なににせよ、蕾を信用してあげれば話が解決する。
僕は生徒会長に礼を言った。

「いいよ。電話番号のお礼だよ。」

・・・あ、聞き忘れる所だった。

「いくらになった？全部で。」

ふふっ、

「秘密だよ。メイド萌時雨君。間違っても僕の家にいるメイドさん

を連れていかなくてくれたまえ。……冗談だ、話しは変わるが二年生の番長が君を狙っているそうだ。気をつけたまえ。」

かなり強引にはぐらかされてしまった。……二年生の番長？　どういう意味だろう？

「君は役職上の番長だが、二年生の番長はそのまんまの番長だ。昔、亜美と戦ったが負けてしまい一年生の番長を狙っていたが、番長が変わった事がばれたらしい。気をつけたまえ。」

「……まさかまた女の子とか？」

笑う生徒会長。

「大丈夫、見た感じ。女の子には見えなかったかなあ。君は頭の中が幸せだな。」

良かった。また変な人が出てきたら困るからね。
家に帰りつくまでに信用している事を蕾に示さなくてはいけない。
しかしどうやって……。

「時雨君。困っているようだね？」

いきなり僕の肩に現れたのは千夏姉さんだった。

「とりあえず、蕾ちゃんと明日町に行ったらいいんじゃないかな？
発見出来るかもよ。」

それがいいかな？　ありがとう千夏姉さん。

「どう致しまして。かわいい弟の為だからさ。」

そう言って消えてしまった。早速蕾にその事を話したら分かったと言ってくれた。

「兄様！また入りにきたよ！」

・・・明日までの辛抱だ。

「えへへっ。ムギュー。」

・・・明日で終わりか、短い思い出だったな。

その夜。いつものように蕾と寝る。

やっぱり、後ろから抱きしめてくる。多分、蕾の前世はコアラだろう。もしかしたら一緒に寝るのも最後かもしれないな・・・。

「兄様。負けないでね？」

何にだろう？

「分かった負けない。どんな時も。約束するよ。」

「うん、ありがとう。」

普段、一生懸命力を入れ僕を抱きしめている蕾が今日は力を抜いた。

・・・寝てしまったみたいだ。

・・・蕾を信用しているってどうやって示せばいいをだろうか？

そんな事を考えながら寝返りをした。

目の前には蕾の幸せそうな寝顔があった。・・・僕はそれらの行動の中で不自然な感じがしたので考えてみることにした。そして、気が付いたのだ。僕は蕾がこっちに寝に来るようになって初めて寝返

りをして、初めて蕾の寝顔を見たと思う。そこまで考え、信用している事を気付いてもらうにはどうしたらいいか分かった気がした。

・・・朝は必ず自分で起きている。何故なら美奈さんが起こしに来るからだ。当初は扉を叩いて起こしてくれていたが、僕の宝を発見した次の日から決まって僕の隣に寝転がり、

「お目覚めの時間です！ご主人様。後、十の内に起きないと貴方の体で遊びますよ。」

と言って起こすのだ。

今日もさつさと起き、蕾を残して一人で朝食を食べに行く。

「あ、ダメじゃないですか！私が起こそうと思ってたのに。」

「おはよう、美奈さん。それより蕾を起こして来て下さい。」

「はぁーい！わかりました。時雨様！」

母さんは既にいない。朝がはやいのだ。朝に会った事は今まで一度もない。

いつものように朝食を静かに食べる。しなが家にいた頃は一緒に起き、話しながら食べていた。（千夏姉さんと天使は近頃、起きるのが遅い）

「うーん。おはよう兄様。」

少し遅れて蕾が起きて来た。だが僕はもう食べ終わっている。

「ごちそうさま。今日もおいしかったよ。」

「ありがとーございます。時雨様！作る甲斐がありますよ。」

そんなやり取りをしながら蕾を見る。

「えへへっ。」

「分かってるよ。」

それから自分の部屋に入り、机に向かう。千夏姉さんとの約束を守る為だ。

『今日、久しぶりに蕾の寝顔を見ました。』

・・・千夏姉さんは日記を付けるよう僕に言った。しかも正直に書かないと大変な事になる。

嘘を書いた事が一度あった。そしたらなんといきなり町を歩いていた時に体を千夏姉さんに乗っとられた。そして痴漢をして逃げた。・・・代わりに僕が警察に容疑をかけられたが、被害者の女性が犯人は女の子だったと証言してくれたので助かった。それ以後、素直に日記を書いている。

「兄様！いこっ。」

「うん。分かった。」

出かける寸前に美奈さんからおつかいを頼まれた。

「こうやって一緒に歩くのも久しぶりだねっ。」

昔、僕の方からおつかいについてきてほしいと言っていたが、

「兄貴は番長だから一人でいけるだろう！」

と言われていた。

……あの時は辛かったな。

「うん、確かに久しぶりだね。」

二人が歩く後に怪しい影が一つ。

「剣治！二人には気付かれてないよ。」

『そうか、それは良かった。じゃあそろそろ次の人のエリアに入るから指示があるまで待機してて、亜美。』

「了解！」

剣治率いる謎の団は時雨と蕾の後を計画的に尾行しているのであった。何故そんな事をするかは剣治以外は何となく気になるからである。

剣治は自分が時雨に提案した後、心配になったのでこっそり時雨を追いつき、明日蕾と一緒に町に行くという事を知ったのである。彼は案外いいやつなのである。

「兄様って、これ大好きだよね？」

「うん、おいしいからね。」

「ふむふむ、時雨君はそういう食べ物が好きなのですね。勉強になりますわ。」

既に担当者は代わっており、今は焰である。

「流石、噂では一緒に住んでいるといわれている蕾さんですこと。」

盗み聞きした時雨の情報を手帳に書いていく。

ストーカー行為だと思われるが焰はそんな事感じてもしなかった。

「剣治さん、彼等が私の担当区域から離れましたわ。」

『わかりました。それでは彼等がまた来るかもしれないので待機しててください。』

「了解ですわ！」

花屋を曲がり歩く時雨達の後ろには新たな影が……。

「兄様、美奈さんは何を頼んだの？」

「あ、今日の晩御飯の材料みたいだね。」

ぱしゃ、ぱしゃ

「うふふ、時間制限ありだけど時雨君の生写真が取り放題。」

今度は舞である。彼女は一見優しい白衣の天使だが、（罪人天使であり、保健委員でもある。）目的の為（自分の為）ならなんでもする、腹黒い天使なのである。出番が少ないので、彼女が罪人天使になった本当の理由を教えておこう。

（焰から聞かれた時は、悪い天使に実験されてなったといっている。）

彼女は昔からそんな性格で、兄弟をいじめていた。初めは兄弟から彼女をいじめていたのだが、弱みを握られとことん仕返しされた。度を越えたいじめ行為をしたので現在にいたる。

「あのー、その君、それは隠し取りじゃないかな？」

やってきた警官にも動じない。

「友達の親が私に頼んだんですよ。息子が元気でやっているか知りたいって言われたんです。その人は今、外国にいますから。」

「ああ、そうだったのかい。邪魔して悪かったね。」
(ちよろいもんだわ。)

「さて、時雨君のアルバムが出来る位の数が揃ったし、剣治に電話しますかね？あ、剣治？時雨君行っちゃったわよ。」

『そうかい、分かった君は待機しなくていい、帰っていいよ。』

剣治は彼女の腹黒さをしているのでさっさと帰ってほしかった。今回の計画に彼女の名前は本当はなかったが突如、彼女からの電話があったのだ。

「そう？じゃあ私は帰るね？」

『そうしてく、』

ぶつつ。ツー、ツー。

「さっさ帰ってアルバム作ろう。」

・・・なんか、さっきから見られているような気がするんだけどなあー。

「兄様、次はあの店行こう！」

「そうだね、そうしようか。」

「ううっ、羨ましいなあー」

「ほらっ！何言ってるの。静かに歩かないとばれるって、風！」

「だって、手え、繋いでるよ。朝美も時雨君と繋ぎたいでしょ？」

「べ、別にあんな奴と繋ぎたいと思わないよ！」

次の追跡者は二人組であった。風と朝美である。この二人が一緒なのには理由がある。風だけだと何をしかすかわからず、朝美だけではこの計画に乘ろうとしなかっただろう。

生徒会長、霜崎剣治はそう考え、まず風を誘い、朝美に風の手伝いをして欲しいと頼んだのである。

「ちょっといたずらしよっと！」

「あ、何やってるの！」

時雨の携帯が鳴る。

「兄様！携帯が鳴ってる！」

「誰だろう？あ、友達からメールだ。ちょっと待ってて蕾。」

その場でメールを直ぐに打ち、送信。

「あ、時雨君から返信メールが来た。」

『久しぶりです風さん。今、僕はおつかいをしています。出来れば

今度いきたいと思います。』
不思議な顔をする朝美。

「なんて送ったの？」

「いやー、今度家に来ませんでしたって送ったんだ。そしたらオツケーくれたからうれしいな！しかもすぐに返事くれたしさ！」

羨ましい顔をする朝美

「私もその時よんでよ？」

「どーしよっかな？」

そんなやりとりしている間、時雨と蕾は剣治組最後の影がいるエリアに入っていた。

「そろそろ帰ろうか？蕾。疲れてるみたいだし。」

「うん、そうだね。ちょっと休憩して帰ろうかな？」

「じゃあ、そこに居て、僕が飲み物買ってくるから、荷物見ててね。」

走り出す時雨。その後を追う影。

「久しぶりに会ったけど、やっぱりおにーちゃんは優しいなあー。」

最後の影はハデスであった。だが、彼女は隠れたりするのが苦手
で時雨にばれてしまった。

「あ、ハデスじゃないか。どうしたの？こんな所で。」

アタフタするハデスは必死に言い訳を考える。

「じ、実はね。今、はじめ〇のおつかいって番組にでてさ！おつかいをしてるんだ！」

かなり怪しい言い訳だけど時雨は見事に騙された。

「へえーえらいなあ。ハデスは。ご褒美として、オレンジジュースを買ってあげる。」

がこん。

「はい、ハデス。」

「あ、ありがとうおにーちゃん。」

立ち去る時雨を眺めるハデスはまだドキドキしていた。すると、時雨が振り返り

「ハデス！僕の感が正しいならあのおばさんがカメラマンだとおもうよ。」

ハデスはばれたかと思い、覚悟を決めていたがそれを聞いて安心した。

「やっぱり、おにーちゃん騙され易い人だなあー。私あんなおばさん知らないし。」

オレンジジュースを大切に持って、剣治に報告をするために時雨から見えないように店の中に入る。

「あ、剣治さん？おにーちゃん達帰りましたよ。」

『そうですか、ご協力感謝します。帰っていいですよ。』

剣治は皆にそういつて終わりを告げた。

「まさか、私の完璧な変装を見破るとは、やりますね。時雨君。」

「ままー、あのおばちゃんなんかいつてるよ！」

「しっ、何言ってるの！失礼でしょ。」

家に帰りついた時雨達は美奈さんに報告した。

「ちゃんと買って来ましたよ。晩御飯の材料。」

「ありがとうございます。お風呂が湧いてますのでどうぞ。」

そして、やっぱり入って来る蕾。だが、時雨は壁のほうを向かず、蕾を見ていた。

「いやーっ、疲れたね。」

「そ、そうだね。兄様。私はなんかアツイから先にあがるね？」

「うん、分かった。」

・・・効果ありかなっ。

晩御飯を食べた後、今日は疲れたので早めに寝ることにした時雨は既にベットに横になっている蕾の隣に寝転がり、蕾の目を見た。

・・・そうだ。僕、昔はちゃんと蕾の相手をするときは目を見たんだ！

時雨は天使になって、様々な出来事を蕾にはだまっていた。蕾が話し掛けてきても、目をそらしながら話を聞いていたのだ。だから蕾は時雨に甘えていたのだ。

「あ、恥ずかしいよ。兄様そんなに目を見ないで。」

「ゴメン、蕾。君は寂しかったんだね。僕があまり相手しなかったから。……正直に答えて。」

「兄様に本当は嫌われたんじゃないかって不安だった。前の学校では兄様が私を頼ってくれて嬉しかった。でも……」

「でも？何。」

「兄様はこっちに来て変わった！頼る人から頼られる人間に！みんなが兄様を頼って行って不安だった。」

「……兄様は私を見捨てるのかわかって。だから、私も兄様を頼ったの。……ゴメン兄様迷惑だったでしょ？」

「迷惑じゃなかったよ。」

「兄様！ありがとう！これからは兄様に頼られる用になりたいっ！」

だがやはり、時雨は妹に甘いかもしれない。なぜなら、

「頼ってくれて嬉しいよ。怖くなったらまた寝においで！」

と言ってしまった。もとはさみしがり屋を隠していた蕾はこの言葉を聞いて嬉しかった。

「うん！怖い時や、さみしい時だけくるね！」

時雨は当初、信用がどうだと言っていたが、結果的にまるくおさまって良かったと思う、明日からゆっくり寝れると心の中で叫んだ。時雨は最後になるだろうと思う、蕾が寝てしまっても、蕾の顔を眺めていた。

……これには、後日談がある。

数日後、アドバイスをくれた剣治にお礼をいいにいった。

「蕾の心の傷を直せたのはヒントをくれた剣治のお陰だよ。」

「やはり、ブラコンじゃなく心傷でしたか。」

「あのさあ、剣治。もう一度手を貸してくれないかな？」

「何ですか？まさか蕾ちゃんがツンデレになったとか？」

「いや、実は蕾ね、未だに僕のところで寝てるんだよ。更に、お風呂に入って来るんだ！この前までタオル巻いてたのに今巻いてないんだ！」

「……蕾ちゃんは多分じゃなくて絶対ブラコンだな。」

「時雨君、妹はかわいいですか？」

「え、うん。」

やっぱり、シスコンですかね？この人は？

そのきゅう 甘える蕾と甘やかす時雨（後書き）

・・・文章力を早くつけたいです。さて、今回は何となく脇役になりつつある舞さんの事を少し多く書いて見ました！どうでしょうかね？ちなみに今、舞さんによる兄弟へのいじめはあっていません。次話でその理由を書きたいと思います。次、書けたら記念すべき十作品目！新しい人出したいと思います。テン フウオー アニバーサリー？ちがうかな？それではまたいつか。

そのじゅう 生徒会長の好み（昼）（前書き）

みなさんのお陰で十作品目を書く事ができました。ありがとうございます。

そのじゅう 生徒会長の好み（昼）

「時雨君。十作品目だね？」

「そうだね！剣治。……喋り方変わってない？」

「そう、気にすることではない。そろそろ、始めようか？」

「そうですね？しかしなぜ僕と剣治なの？個人的に他の人が良かった。」

「僕以外は女の子達しか残らない。……君は女の子が好きだな。」

「……まあ、男よりいいかな？」

「おバカな時雨君はほつという始めたいと思います。」

「………今、まだ夏休み中である。だが時雨は今学校にいて生徒会本部にいる。」

それはかなり突拍子に始まった事件であった。

「時雨君、君にはまだ生徒会のメンバーを紹介してなかったな。」

時雨も一応、番長という役職についている。

「え、別に二学期紹介してくれればいいよ。」

「……ろくでもない人間が沢山いるんだろうな。」

「それにだ。まだ、生徒会の実体を話してない。出来るだけ早く話しておこうと思うのだよ。」

「……分かったよ。で、今から行くの？生徒会のメンバーはみんな夏休みだよね。」

「そうだな。今から今からにしようか。」
おもむろに携帯電話を取り出し、電話を誰かに掛けている。

「……実はな新しい番長の事をみんなに話すのを忘れていた。だから学校に集まってくれ。大至急。」

「……あれ？番長って生徒会長以外知らないんじゃないの？
「……剣治、番長って生徒会長以外知らないんじゃないの？」

「ああ、確かにそうだが、生徒会のメンバーが知ってないと番長に仕事がないだろう。そう思った僕が今回から始めた。」

え、今回から？

「亜美は番長だった時はばれちゃったからね。」

「そうそう、なんでばれちゃったの？」

少し曇る剣治の顔。

「実は、僕がばらしたようなものさ。……番長って呼んじやつたんだ。」

生徒会長しか番長を知らない。つまり、剣治が番長と呼ぶ人Ⅱ番長。

「でも、そんな簡単にみんな信じるものなの？」

・・・頷く、剣治。

「さて、行きますかね。みなさんがお待ちだからね。」
先に歩きだす剣治。後を追う時雨。

「役職はまず生徒会長、保健委員、図書委員、その他色々あるんだ。」

歩きながら話す剣治。彼等は学校の屋上で話していたのだ。彼等が目指すのは地下室にある部屋である。役職を話し終えた剣治は黙りこんだ。

そのまま地下室にある一つの部屋の扉を開ける。（焰と来た時は何もないはずであった。）

「あ、生徒会長だ。」

「紹介しよう。この子は私の補佐をしてくれる保坂陽^{ほさか}だ。」
・・・うわっ。またロリな人が出た。

「保坂です。」

身長は しの 頭一つ上だが、小さい。本当に高校生だろうか？あれも全く出てない。ぺったんだ。

「・・・生徒会長、この人失礼な事考えてますよ。絶対!」

真っ赤になって怒り狂う保坂。

それを微笑みながら見ている剣治。

「生徒会長はやはりロリコンだったのか。(ボソツ)」

「残念だが聞こえているよ。時雨君。・・・保坂君彼は以外に優しいから抱き着いてあげなさい。多分、いや間違いなく彼は避けようとしてないから。」

・・・く、鋭い観察力だ。

「え、本当かな？」

「本当だとも、彼は剣でも抱き着こうとしたら受けるからね。」

・・・事実を否定する事はできないな。

「わーい!」

とすつ。

避ければ良かったのにまた僕は抱き着かれた。避けてしまったら保坂さんが扉に当たってしまうからだ。抱き着かれてもメリットは何もない。柔らかい感触もしないからね。

・・・はっ!しまった。ぼーつとしてたから千夏姉さんに意識が乗っ取られるところだった。

保坂さんはくっついたまま離れない。

「さて、時雨君。次に図書委員を紹介しよう。」

まだ中に入っていないので中に何人人がいるかわからない。

僕の予想では多分、眼鏡かけた人が出てくるぞ！

絶対、剣治はそんなのが好きそうだから。

「生徒会長、何ですか？いきなり集めらして。とても迷惑ですわ！」

こ、この声は……。

「新しい番長に挨拶してくれたまえ。」

啞然とする焰さん。

「し、時雨君？時雨君が番長？」

……ああ、やっぱり知られたら嫌われるかな？友達へったなあ
！。

「良かったあー。時雨君が番長になって。だから剣治君私が時雨君
巻き込んでも黙ってたんですわね？」

多分、目玉の話だろう。

「まあ、そうだね。自己紹介はいらないな。じゃあ、次。保健委員。
」

次の瞬間、誰かに抱きしめられた。

「時雨君！あなたが番長で舞、うれしー。」

保健委員は舞さんでした。

「舞、離れなさいよ！時雨君は私の遊び相手よ！」

保坂さんが舞さんに言うが、

「モチツキペったんは砂場で遊んでなさい。」

きつい一言であしらった。

「ぐ、くそー。」

さすがに可愛いそうになったので慰めてあげた。

「な、泣かないで。大丈夫だよ。まだ時間はあるし。」

「時雨君、君はすぐ甘やかす。・・・僕は知らないぞ。」

生徒会長はそういつて次の人を呼ぼうとしていたが、僕はそれどころじゃなかった。

「時雨君ありがとー。慰めてくれて。」

舞さんは離れてくれたが保坂さんは抱き着いているままだ。

「次で今日は最後にしたい。誰か適当に出て来てくれ。」

・・・適当？まるでくじ引きだな。
しーんとなった生徒室。

「うむ、やはり番長に会うのが恐い奴が多いな。仕方ない、今日はお開きだ。帰っていいぞ、時雨君。」

生徒会室からは

「お前が行けよ。」

などとなすりつけあい見たいなことが行われているようだ。そして、

「あんた、ほらっいつて来なさい。」

・・・女番長に相応しい声が聞こえてきた後に、
誰かが生徒会室から飛び出るといふよりほうり投げるような感じで出てきた。

「危ないっ。」

その人は反対側の扉にぶつかりそうなのだ。

「くっ、間に合うか？」

そして僕はなんとかその人を助ける事に成功。

「大丈夫ですか？ケガとかないですか。」

女の子みたいだ。

「はい、ありがとうございます。」

ここで顔をあげた女の子を見て気付いた。・・・眼鏡を掛けていておとなしそうだ。

「私、何も出来ないのに生徒長に頼まれて生徒会にきたんです。」

僕は反射的に剣治を見た。剣治は目をそらし口笛をふいている。・・

・・間違いなく彼はこの子みたいなのが好きなのだろう。
いきなり身の上話を聞かされて可哀相になったが、どうやらこの人は断罪天使みたいだ。

「ところで助けてくれたあなたは誰ですか？」

剣治が答える。

「彼が新しい番長だ。」

そういったら僕から急に離れた。

「こ、この人があの亜美さんを倒した人ですか？」

泣きそうである。

亜美さんが負けたという噂がたって少し立つ。

「そうだよ。だけど、彼は優しい人だよ。亜美みたいに暴走もしないよ。」

ああ、そういうえば暴走した亜美さんを見た事一度だけあるなあ。

「本当ですか？」

この質問に答えたのは剣治の補佐であった。

「本当だよ。何もしてこないし、私を慰めてくれたよ!」

離れていたはずの保坂さんがまたくつついてくる。

「! いつも生徒会長に頼ずりされて嫌がっていた保坂さんが自分から頼ずりしている!」

・・・普段何やってんだあのロリ生徒会長は。

そーっと寄ってくる眼鏡さん。

「えーっと、私の名前は

柏木^{かしわき} 春^{はる}です。よろしくお願いしますね?」

僕が答える前に剣治が答えた。

「呼び捨てにして構わないよ。彼は優しいからね。・・・そしてこれが時雨君の携帯の番号だ。特別に君にはただで進呈しよう。」

「はいっ、ありがとうございます。」

本人がいる前で情報が取引されている。時雨は今の世の中の情報管理を厳しく批判したいと思ったそうだ。

「じゃあ今日はおしまい。何かあったら僕じゃなくて時雨君に連絡する事。」

以外とあっさり部屋に帰っていくみんな。廊下には僕と剣治だけが残った。

「最後に君に会わせたい人がいるんだ。だけど今は無理だね。・・・夜また来てくれないかな?」

それだけいって彼は僕を帰らした。

・・・・・・・・・・

「いやー、またなんか変な事が起きそうだね。」

「楽観的に言ってるけど、君が巻き込まれるんだよ。時雨君。さて、十作品目はどうでしたか？作者に代わり僕たちがしめたいと思います。」

「主人公は僕だよ。」

「ここは既に物語ではない！よって僕がしめる。」

「そんなことさせない！」

「あ、蕾ちゃんが走ってきた！」

「な、なにっ？」

「甘いわ小僧。それではみなさんさようなら！」

「はめられた〜。」

そのじゅういち 生徒会長の好み（夜）（前書き）

前回の後編です。

そのじゅういち 生徒会長の好み（夜）

数人の生徒会メンバーを剣治が紹介してくれた夜の事である。

「美奈さん、蕾僕ちよつと学校に用事があるから行ってくるね?」

「兄様、もしかして女の子と駆け落ち?」

「そ、そうなんですか! 時雨様?」

「違うよ。生徒会長に呼び出されたんだ。すぐに帰ってくるよ。」

「早く帰ってきてね?」

「怪我しないでくださいね?」

「うん、じゃあ行ってくるね。」

いつもより静かな学校、たどり着いた時雨の携帯が静寂を妨げる。

「剣治かな?」

『あ、もしもしーくん? 亜美だけどさっき剣治から電話があったんだ。昼いた場所にきておいてくれだってさ。』

「あ、うん亜美さんありがとう。ところで聞きたいことがあるんだけどいいかな?」

「うん、いいよ?」

「この学校、三年生が生徒会とか運営しないの？」
うーんと唸っている亜美さんだったが、

「昔は保健委員の人のお兄さん達がしてたんだけど、いつのまにか
剣治に譲っちゃったんだ。なんでかわからないんだよ不思議だなあ
1。」

お礼の言葉を述べ、携帯をきって地下につづく階段をおりる。昼
と違って感じる感覚がするのは気のせいだろうか？

地下の廊下には昼までであった扉が無くなっていた。
誰かに見られている感覚がするのは間違いない。少し廊下を歩い
ているとなかったはずの曲がり角に差し掛かった。

「君は魔界にいったってどうするつもりだい？」

聞き慣れた声だ。多分剣治の声だろう。

「ああ、実は剣治を探してたんだ。電話があったからさ。ところで
地下が変わってるけどどうかしたの？」

声の主が現れ答える。

「夜になると変わってしまうんだ。魔界と繋がる廊下になるのさ。」

あの時も繋がっていたのだろう。

「魔界はやっぱり怖い所かな？」

何となく気になるので質問する。

「いや、普通だ。この世界とさしもかわりはしない。」
「……簡単に説明すると住んでるのが人間じゃないそうです。」

「さて、時雨君。君に見せたい人がいる。ついてきたまえ。」

ついていくとなかったはずの扉の一つがあった。鍵がしまっており、剣治は鍵を持っていないようだ。

「く、まさか鍵をかけられるとは。仕方ない時雨君、下がってなさい。」

何をするつもりだ？

「オレの拳が光って唸る。お前を倒せと轟き叫ぶ！」

な、なんで生徒会長がドモ○・カッシュの技使えるんだ？

「必殺！○ヤァアイニイイイングウウ・フウウイイングアアアー
ー。」

扉ドーン。煙モワーン。

「剣治！なんでそんなのつかえんの。」

「テレビ見て覚えた。」

「……そうですか。」

「さあ、いこうか？中で人がまってる。」

扉をくぐるとそこはメイド喫茶でした。

「お帰りなさいませー、ご主人様ー。」

「馬鹿っ、てんちょー大変です。ブラックリスト一番霜崎剣治が増援を連れてやってきました。」

店内は慌ただしくなっていく。

次の光景は銃火器を装備したメイドさんが僕等を囲んでいた。

「さて、パーティーを始めようか。時雨君。」

「ちょっと何？剣治、何しでかしてるの！どうすりゃいいの？」

無言で奥の扉を指差す剣治。つまり、あそこに行けば大丈夫ということかなっ？

僕の一言、

「軽くやばい？」

返事をするのはメイドさん達。

「かなりやばい。」

・・・ノリのいいメイドさん達だ。

剣治が前に出て喋り出した。

「諸君らにつぐ、こちらはゲームを申し上げたい。僕等があっちの扉までいって扉の中に入ったら一つ願いを聞いてくれ。もし、こっちが負けたらなんでもしよう。」

ざわつく店内。

「どうします？ 店長。」

「また、ゲームか・・・嫌だといってもけしかける気だ。今度の私達は一味違う事を証明してやろう。」

叫びあうメイドさん。

「今回は特別ルールだ。こっちは二人いるからどっちかがそれに当たったら負けでいい」

それ、つまりメイドさんが手にしているものである。

「それでは、3・2・1スタート！」

その瞬間、剣治に掴まれテーブルを倒した裏に隠れこむ。

「剣治！ なんだよこれは！」

「全てが終わって話そう。」

今、話されてもわからないだろうからとりあえず頷くことにした。

「時雨君、これを渡しておこう。」

・・・どこから出したのだろう。それはガン〇ムの盾であった。

「あ、一年戦争の奴嫌い？ じゃあこれは？」

次に出したのは最新のガン〇ムのシールドだった。

「ビームがでるが？」

「わかった、もうそれでいいよ。」

腕にはめ、最後に剣治が更になにか取り出した。

「ビーム○イフル？ビームサーベ○！」

「うって構わない、彼女等は種がわれている。」

・・・あのメイドさんはコーディ○ーターか？

「じゃあなとつつあん！」

「ル○ン三世？」

テーブルの向こうからは銃撃戦の音が聞こえる。

「そこーっ！」

たまに剣治の叫びが聞こえる。

それから、数分後。静かになったようなのでテーブルから顔を出し店内を見渡す。そこに立っているのは誰もいなかった。

「おい。」

「お茶？」

剣治は店内に倒れているメイドさん達にいろいろ犯罪まがいの事をしている。

そんな時、僕は剣治を狙っている視線に気が付いた。

「剣治！危ない！」

「おそいっ！」

「ふ、任せておけ、時雨君。」

ビームが剣治に当たる瞬間、緑の壁が剣治を守った。

「ば、馬鹿なフィン・フ○ンネルバリアだと・・・貴様ニュー○イ
ブか・・・。」

その人も剣治を守った兵器にやられた。

「戦争とは悲しいもののよ。」

剣治はまた犯罪まがいの事をしている。

「剣治、やめろよ。起きちゃうよ。」

「大丈夫、もういくから。時雨君もどうかね？」

「・・・やめておこう。」

「僕はいいよ。それより扉の向こうに誰かいるんでしょ？」

立ち上がり頷く剣治。

「そうだな。そろそろいこうか。」

扉の向こうは何もなかった。だが、一人のメイドさんが立っていた。

「今回も派手に暴れましたね、剣治さん。」

首をふる剣治。

「僕は全然暴れてないよ。暴れたのは彼女達だよ。」
頷くメイドさん。

「ああ、時雨君。彼女は冥土の長だよ。」

「はあ、なるほど。」

「貴方が時雨様ですね？美奈がお世話になってます。」

「あ、はい。どっちかというと世話してもらっていますが。」

それから剣治に何か質問してもいいかと聞いたら、
「別にいいよね？」

「はい。」

と言われたので質問することにした。

「あの、なんでメイド喫茶なんてやってるんですか？」

答えはすごく簡単だった。

「修業です。」

「はあ、なるほど。じゃあなんで銃を持ってるんですか？」

これもすごく簡単な答えが返ってきた。

「ご主人様を守る為です。」

魔界は間違いなく、危険な所であろう。

「じゃあ最後に、なんで剣治が入ってきたらみんな武装したんですか？」

この答えは少し長かった。

「彼が初めて来た時、彼は私達に抱き着いてきました。抱き着かれたメイドはビックリして彼を撃ちました。だけど彼はそれをよけ、メイドに抱き着きました。それから彼はくるたびにメイドに本気で抱き着いていたので、メイドはみな怒り彼が来る度、襲い掛かるのです。」

「ちなみにゲームを持ち込んだのも僕だよ。」

溜息を出すメイド長さん。

「彼に勝ったメイドは誰もいません。」

つえーな生徒会長。たしか誰とも戦わないって言ってなかった？

「あと、僕はそんな事するからメイド長に頼まれたんだ、メイドの戦闘能力を高めてくれってさ。だから月に一度ここに來ているのさ。」

知らなかった。

「実は剣治さんに話したい事があります。今度入って来たメイドがドジなんですよ。だから貴方の家で鍛えてくれませんか？」

「うーん、わかった。」

このメイドさんはかなり剣治を信頼しているようだ。剣治はニヤニヤしている。そして、メイド長に挨拶をしてわかる。

「さて、言う事聞いてもらうかな？」

そういつて扉をくぐる剣治。さっきの部屋にはもう倒れているメイドさんはいなかった。

「まず、メイド長さんから、言われた事です。」

緊張の糸がはりめぐる。

「新しく入って来た人。手を挙げてください。以上！」

一つの手が挙がりメイドさんみんなが安堵の溜息をだす。

「次に約束通り、言う事を聞いてもらいます。」

固まる店内。多分、剣治はいつも犯罪まがいの事をしているのだろう。……。もしかしたら犯罪侵してるかも？

「今回は僕の友達、時雨君に決めてもらう。」

え、なんで？

「彼は説明無しにメイドさんに撃たれた。誰も彼に事情を説明しやうとしなかった。彼のメイドさんへの憧れを踏みにじった君達は彼に何をされても文句はないだろう。」

更に静かになる店内。事情を説明してくれなかったのは剣治も一緒である。

「さ、時雨君好きにいいよ。」
何を言うべきかかなり迷ったので僕は、

「えーっと、これからもお仕事頑張って下さい。」

と言った。

啞然とする一同。苦笑する剣治。剣治が話し出す。

「彼は優しい人間だ。てか優しすぎる。ま、彼が言った通りしてくれ！以上。」

その後、歓声がおこり僕はメイドさん達に胴上げをされた。（剣治は縄でぐるぐるにされていた。）

遠慮する僕の前にどんどん食べ物が運ばれてくる。 なんとか食べ終わり家に帰る事にした。

また来るよと言った剣治に

「貴方は来なくていいので時雨様が来て下さい。」

という返事が返ってきた。

僕としてはもうきたくないな。メイドさんは少ないほうがいいな。
帰ろうとすると剣治に止められた。

「時雨君、ドジッコメイドが来てないから少し待ちたまえ。」

待っても来ないので剣治がまた店内に入る。

「うわっ！またきました。みなさんコンディションレッド発令！」

弁解する剣治。

「違う！ドジッコメイドを呼びに来ただけだ！」

「嘘いいなさい！時雨様が帰ってやっぱりまたいたずらしにきたんでしょ！」

「わかった！時雨君を呼びばいいのだろう？」

僕は呼ばれ、中に入りドジッコメイドを探すはめになった。（剣治は動こうとする度、足元に銃の弾丸がのめり込んだ。）

メイドさんの案内である部屋の前についた。

「呼んできますね？」

そういつて中に入っていたメイドさん

「ほらっ、剣治さんのお友達が呼びにきてるわよ。」

「やだーっ！剣治さんって絶対意地悪するよ！」

「わがまま言う子はこうです。」

どごっ！ぐはあ。

出てきたメイドさんは荷物と気を失ったドジッコメイドを抱えていた。

ドジッコメイドはその後、剣治に抱きしめられ意識を取り戻した。
「時雨様！ぜひ今度来て下さいね？お一人で。」

「わかりました。近いうちにきますよ。」

あまり行きたくなかったが、言ってしまった以上いくべきだ。

帰り道、剣治がドジッコメイドの手を掴もうとしたがドジッコメイドは僕の背中によじ登った。

「やれやれ、どうやら嫌われたらしいな。」

あれだけ触りまくってたら誰でもひくだろう。

しかし剣治はニヤニヤしている。

「えーっと、剣治その顔恐いよ。」

待ってましたと言うように剣治はこう言った。

「ひどいなあ、時雨君。もとからこんな顔なのに。」
し、知らなかった。

「ごめん。」

「じゃあお詫びにそのドジッコメイド時雨君の家で修業させてやってくれ。」

なんで？ 剣治の家でさせしなよ。と言おうとしたらドジッコメイドと目を合わせてしまった。

「……わ、わかったよ。」

返事する僕を真剣な顔で見る剣治。

「きちんと世話してあげなよ。」

・・・世話してもらうんじゃないのか？

「それじゃあ僕はこれで帰るよ。」

走り去る剣治。溜息をつく僕。時刻は夜の11..00急いで帰らないとお巡りさんに補導されてしまう。背中に乗っている女の子は急に喋り出した。

「えーっと私の名前は齊藤やしろ 零れいですご主人様。」

「べつに時雨でいいよ。」

困惑する零ちゃん。

「え、だって先輩が呼ぶ時は必ず様を付けなさいっていいですよ。」
「じゃあ、好きに呼んでいいよ。これから世話してもらうんだから。」

「はいっ！わかりました。時雨様！」

背中に抱き着いて来る零ちゃん。

僕の中では何か違和感を感じていた。

この子は小さい、またロリな人なのだがなにか違う。
背中に柔らかい感触がしてそれがなにかわかった。

零ちゃんは他のロリな人よりあれが大きいのだ。蕾ほどは間違いない。
なくある。

「零ちゃんって・・・」

「早くねるです！時雨様。」

あのー僕まだお風呂入ってませんが？

「あ、そうです！時雨様お風呂入ってないです。早く入って来て下さい！」

・・・わかりました。

お風呂からあがり自分の部屋に行って零ちゃんと寝る事になった。

なぜか震えている零ちゃん。

「?どうしたの。」

「・・・不安です、明日から。」

つまり、彼女は美奈さんに虐められないか不安なのだろう。

「大丈夫だよ。美奈さんはそんな事しないよ。もし、そんな事されたら守ってあげるから。」

「ほんとですか？」

頷く僕は小指を出した。

「ゆびきり。」

「はいっ！」

終わったあと、零ちゃんは安心したのか眠ってしまった。

次の日、朝早く起きた僕は美奈さんと蕾に事情を話した。

「全く、兄様は人が良すぎるんだよ！」

蕾は少し不満そうだ。

「まあまあ、蕾様。時雨様が優しくなかったら甘えることができませんよ。その子は私が面倒見ますよ。」

俯く蕾。

「わかったよ、兄様がそうならいいよ。」

礼をいったらよくわからない返事が帰ってきた。

「もう、子猫とか拾ってこないでね？兄様。」

「それは同感ですね。」

母さんは既にいない。昔からよくいない日が多かったのでこういう話し合いをするときは困る。

「後は母さんだけだな。」

今日朝起きたら机の上に母さんからの手紙があった。

『時雨へ、母さんは遠洋漁業に行ってきます。』

母さんの職業は漁師ではない。

『追伸 話し合いは帰ってからにしましょう。』

最後にそう書かれていた。

・・・多分夏休みの間は母さんは帰ってこないだろう。

時雨は子猫の意味を考えて頭がすこし痛くなった。（僕ははたから見たらロリコンなんだろうか？）

そのじゅういち 生徒会長の好み（夜）（後書き）

そろそろ時雨達の夏休みも終わりですね。さて、今回はかなり色々な人が登場しました。気に入った人がいますでしょうか？次回は時雨が凧さん達の所に行き、彼女達の正体を知る話にしたいと思います。……よんでくれる人がいたらいいな。

そのじゅうに 天界と便器の関係（前書き）

なんとなく話しが一段落 してしまいました。

そのじゅうに 天界と便器の関係

まただ、僕の隣に二人が寝ている。

まず、右に蕾。

「兄様〜。」

そして左に零ちゃん

「時雨様〜。」

・・・昔はこんなシチュエーションに憧れていた時もあったよ。だけど鬱陶しいだけだよ。しかも夢までみてるよ。幸せな人だな。さっさと起床する。そして日記を書く事にした。

『零ちゃんというメイドさんを面倒見るように頼まれた。彼女はロリーな少女だが、蕾よりあれが良かった。』

・・・こんなもんかな？

「うん、まあいいでしょう。」

今日は珍しく千夏姉さんが早く起きていた。こんな日は不吉な事がよく起こる。

「失礼な事言わないでよ。」

ごめんなさい。

近頃天使が出て来なくなった。理由はわからない。この前泣いていた。

「ちくしょー、俺、キャラそんなに薄いかよ？時雨の周りの奴らがいけないんだ。」

さて、気を取り直して朝食を食べに行こう。

「あ、おはようございます！時雨様。よく眠れました？（皮肉）」

「あんまり眠れなかったかな？心配してくれてありがとう！（皮肉と気がついてない。）

・・・さて、今日の朝食は・・・いつもと同じでおいしそうだなあ。

「いつもありがとう！いつもよりおいしく感じるよ。」

「ふふっ、いつもと同じですよ。」

味はいつもと変わらない。昨日の晩御飯は零が作った。来た時より、料理の腕前はかなりあがっていた。だけどまだ人参が生だったり、分量間違えたりしている。

「美奈さんのおかげで零ちゃんかなり料理の腕前があがってるよ。」

「いえ、時雨様がいてくれるから頑張れるんですよ。」

昨日の訓練の成果に驚いた時雨は何かご褒美をあげると言った。それに対して零が望んだものは時雨の隣で寝る事であった。頷く時雨を見ていた蕾は誰よりも早く時雨のベットに入り込んだ。零は少

し不満だったらしいが時雨は特に何も言わずベットに入った。

入った瞬間、蕾は時雨に抱き着いた。これを見た零も負けじと時雨にくっつき、時雨はどいてほしいと言えずに困っていた。時雨は寝付きが悪かったので先に二人が寝てしまった後はただただ寝る努力をするばかりであった。

「時雨様？今日の夜寝る前に私の所に来て下さい。」
「？わかったよ。」

朝食を食べ終わった後、電話がなった。

取りに行こうとする美奈を制し、時雨が電話に出る。

『あ、もしもし時雨君？あの約束覚えてる？』

まだこっちが何も言っていないのに一方的に話しをしてきた。

・・・・この声は風さんかな？

「えーっと、風さんだよな？そっかえばいつ遊びにいいのかな？」

『覚えててくれたかーっ！今日じゃだめかな？』

当たってホッとする時雨。

「大丈夫だよ。」

『じゃあ公園に集合！』

がちゃ、ツーツー。

今日の予定が決まったので早速出かける事にした。未だに蕾達は起きてこない。

蕾達が寝ている部屋でさっさと着替えを済ませ、蕾達を起こした。
「朝だよ！二人とも起きなよ！」

「ふにゃーい。」

「うー、兄様おはよー」

起きた蕾達が朝食を食べている時に時雨は家を出た。

近くに公園は一つしかないのでそこを目指す事にした。

・・・しかしまあ、そろそろ誰かと契約したほうがいいかもしれないなあ。近頃僕なんとなくおかしくなってる気がするんだよね。別にキスじゃなくてもいいだろうし、握手でもいいんじゃないのかな？・・・それなら誰と契約すればいいんだろう？

・・・わかんないな。

そんな事を考えていると既にざわざしている公園についてしまった。まだ早い時間なのに小さな子ども達が遊んでいる。

「おーい！時雨君！こっちだよ！」

小さな子どもたちにまざって遊んでいる女子高生が一人とそれを見ている女子高生が一人。

前者が凧さんで後者が朝美さんだった。

「あ、朝美さんも一緒に遊びたいんだって！いいかな？」

「別にきたくて来たわけじゃない！時雨に話したい事があってきたんだ！」

「むふふっ！素直じゃないなあ！」

話したい事？何だろう。

「話したい事？何それ。」

「後で話す！」

なんか顔が真っ赤だな？怒ってるみたい。

「じゃあ、私の家に出発！」

家は公園の裏側にあり、僕の家より大きかった。

「私の部屋は二階だよ！廊下のつきあたりの右のほうね？朝美が知ってるから先に行ってて！」

部屋は綺麗に整頓されており、ここも僕の部屋より大きい。

適当に座って待っていると朝美さんが僕に話し掛けてきた。

「……ねえ、時雨。あんた罪人天使でしょ？」

「え、うん。そうだけど……どうかした？」

少し俯いて話始める朝美さん。

「あんた契約破ったみたいね？……契約を破った者は一度天界に行かないといけないの。」

「……悪い事だったみたいだなあ。契約破るの。」

朝美さんは続ける。

「……天界に行くには神様と一時契約しないと行けないの。」

・・・残念ながら僕の知り合いに神様はいないかな？

「・・・私、神様なの。」

・・・身近に神様がいました。

「・・・だから、一緒に天界にいこっ？」

・・・うーん、近くのコンビニみたいな感じで言ってるなあ。それに『いこっ。』の部分は『死ぬ』っていみなんじゃない？

考えていると風さんがやってきた。朝美さんはトイレと言って部屋から出て行ってしまった。

風さんが今度は話し始めた。多分この人も人間じゃないと思う。

「私ね、墮天使なんだあ。」

『墮天使・・・天界にいた天使が魔界に住み、天使の羽は黒く染まっている。しかし、元天使なので性格はいたって温和な人が多い。一応天使化が使える。』

確かこんな感じで焰さんが書いた本に載っていた。
あの本かなり役にたってるなあ。

「えーっと、僕になにか用事があるのかな？」

・・・魔界に一緒に行ってくれとか？

「私と闘って！時雨君、あの亜美を負かしたんでしょ？」

・・・あれはあっちが負けを認めたんだけどなあ。

「わかったよ。だけど僕はそんなに強くないよ？それになんで闘いたいの？」

「それはね、強くなりたいから・・・。誰とも闘わないようにするには強くなればいいんだよ。」

・・・まあ、いいか。

「でも何処でするの？公園で闘ったら子ども達が巻き込まれるよ？」

ニヤリッと笑う凧さん。

「大丈夫、私の家の地下。」

ここには地下まであるのか・・・。

朝美さんに置き手紙を残し凧さんについていくと広い地下についた。

辺りを見ていると戦闘は始まっていたようだ。

『我は、悪魔のすみし所にいる天使。』

既に天使化した凧さんが灰色に輝く光剣を構え突撃してくる。こういった状況になると刹那の天使つまり千夏姉さんが出てきてくれるんだけど今日は天使がでてきた。僕にアドバイスしてくれる事を期待する。

「時雨！今回はお前一人で勝て！」

・・・他人を頼るのはやめよう。

『我は、罪を背負いし紅き天使』

『そして、悲しい記憶と約束に縛られる悪魔!』

千夏姉さんが助けてくれるようだ。・・・まだ僕は頼るしかできないみたいだ。

結果を言ってしまうと勝っていた。

「やっぱり時雨君は強いな。・・・殺す勢いでいったのなあ。」

・・・危なかったかな？千夏姉さんが出てきてくれなかったら死んでたかも。

「悪いけど時雨君、私疲れちゃたから休んでもいいかなあ？」

遠回しに帰って欲しいと言っているようだ。

凧さんの家から出ると僕は朝美さんに会った。

「明日、返事して。」

そうつげると走り去って行った。

明日まで時間はまだある。今日は一人で町を歩こう。もしかしたらもう戻って来れないかもしれないから・・・。

夕方になって家に帰るといい匂いが鼻についた。

「あ、お帰り！兄様。今日は私が晩御飯作ったよ！」

珍しい事ではないが近頃はなかったなあー。

晩御飯はおいしかった。

「おいしいよ。蕾。」

素直に感想を言うと零ちゃんが膨れた。
慌てて、

「じゃあ、明日の朝は零ちゃんの御飯が食べたいな。そしたら美奈さんもゆっくり出来るからさ。」

今日の三人はずっと僕を見ている気がする。

寝る前に最後になるかもしれない夜空を眺めていると蕾がやってきた。

「兄様、なんかおかしいよ？どうかしたの？」

「蕾、僕は嬉しかったよ。君みたいな妹がいて。」

？といったげな蕾の顔。

「僕は美奈さんに呼ばれているからちよつと行ってくるね？」

蕾の横を通り過ぎる瞬間に涙がでてきた。蕾がふりかえっても無視して通り過ぎた。

美奈さんの部屋につくと美奈さんが錠剤を手にしていた。

「時雨様、これを飲んでください。」

「錠剤タイプの自白剤ですか？」

にこりと微笑む美奈さん。

「いえいえ。精神安定剤ですよ！これでぐっすり眠れます！」

・・・精神安定剤？なんだろうそれ。

「じゃあ飲みますね。」

飲んでいると美奈さんの顔がニヤリと笑った気がした。

飲み終わってすぐになにかがおかしいという気がした。体が自由に動かないのだ。倒れる寸前、美奈さんが支えてくれた。

「さすがですねえー。凄い効き目です！これでよく眠れますよ。時雨様。」

僕の頭の中は

「ああ、美奈さんのあれが顔に当たって柔らかいなあ」

としか考えておらず、その気分もすぐに闇の中に消えてしまった。

『千夏姉さん！僕は頑張ってるよ！』

幼い自分がお墓に手をあわせている。

『時雨にーちゃん先帰るね！』

・・・どうやら蕾が僕の妹になった後の事らしい。

『・・・あなたの妹に優しくしてあげるのよ。みんなを大切にするの時雨も一人は嫌でしょ？他人を一人にしてはいけないよ。』

『え！千夏姉さん？』

そんな声が聞こえた気がした。
懐かしい夢を見た。

・ ・ ・ ・

昨日は何があったんだ？

美奈さんの部屋にいる事に気がついた僕は不思議な光景を目にした。

隣では美奈さんが寝ている、右の方には蕾が寝ている。そして部屋が荒れている・・・。泥棒でも入ったのかな？

朝食を食べに行くとき零ちゃんが何かを作っていた。
挨拶をすると僕に泣きながら抱き着いてきた。

「時雨様〜！何処にも行かないで下さい！」
・・・少し胸が痛かった。

「大丈夫。戻ってくるよ。」

そういつて零ちゃんを引きはがし、朝食を食べる。

「へえ、おいしいな！」

まだ泣いている零ちゃん。

「あ、あ、ありがとうございます。」

いつもより早く食べ、服を着替える。

起きている零ちゃんだけに外に行ってくる事を告げる。

外に出ると剣次が道路にいた。

「剣治、先に言わせてくれっ！」

「ああ、いいよ。」

「君の名前、『剣次』になってるぞ！」

頷く剣治。

「今回、コメディーっぽくないから作者が何となく変えたそうだ。・
・・朝から女の子を泣かすとは君は何しているんだ？」

「別に・・・。」

「また、冥土喫茶一緒に行こうな。」

「・・・わかったよ。」

「約束は守りたまえ。」

「うん！」

また頷く剣治。

適当なやり取りだが、それで良かった。

「・・・時雨君、昨日は凄い目にあったみたいだな。・・・いや、
君が帰ってきて話そう。」

そういつて立ち去る剣次ではなく剣治。

決心が鈍る前に電話をかけた。

『もしもし?』

「僕は行くよ!」

『・・・そう、お別れは済んだの?』

「必要ないよ。」

途端、怒った口調で話し始める電話の相手。

「何言ってるの!」

「帰ってくるならお別れは必要ないと思うんだ!」
「・・・そうね。」

その後、電話の相手朝美さんと会って一時契約をすることにした。

「まー、あの人達ラブラブだ!」

「こどもが見るものではありません!」

・・・他人に見られてしまった。しかも朝美さん顔が真っ赤。しかもこんなはずじゃなかったって顔してるな。

「・・・一時契約は書類でよかったのに。」

「え、何か言った？」

「別に、さあ、行こうか。」

歩き出してついたのは公園の男子トイレ。
しかも大きいほう。

「ここから行くの？」

頷く朝美さん。

『・・・二名様ですか？』

うわっ！便器が喋った！

「はい、二名です。」

淡々と答える朝美さん。

『カップル割引が使えますよ。良かったですね。二人で百円になります。』

朝美さんが百円便器の中に落とした。

すると、辺りが真っ白になり、僕は人間界から・・・消えてしまった。

『最後に、天界に行って戻って来た罪人天使は今の所一人もいない
そうですわ。』

焰さんの本にはそう書かれていた。

そのじゅうに 天界と便器の関係（後書き）

今回で時雨は人間界から消えちゃいましたね。仕方ないですよ、占いしのおじさんが言っていましたし。夏休みより時雨の未来が消えるほうが先かもしれないなあ。

そのじゅうさん 天界での再契約! (前書き)

やめちゃおうか迷いましたがまだ少し頑張って書きたいと思います。

そのじゅうさん 天界での再契約！

・・・便器は未知の世界との懸け橋だったんだ！

僕は今、天界にいる。

後ろにはかなり大きな街がひろがっているが、僕は今そこには行けない。

「さ、こっちだよ。」

天界に一緒に来た朝美さんが僕を引っ張って行く。そのまま目の前の大きな建物に入って行く。

行き交う天使は見た目が色々な人が多い。OLだったりエリートサラリーマンみたいだったり、みんな忙しそうだ。

僕が連れてこられたところは裁判所みたいだ。

扉が沢山あり、朝美さんが自分達が入る扉を探していると女の人が出てきた。

朝美さんはそれに気づき僕の前に出る。

「久しぶりねえ、朝美。」

そんな感じで話し掛けてきた女の人に朝美さんも答える。

「うん、そうだね。何年ぶりかなあ？」

それから二人で立ち話を始めたようだ。僕は周りの景色をながめ

色々な物を発見した。

噴水、庭園、貴族みたいな人達。……中には知ってる顔もまじっているようだが気のせいだろう。

「ねえ、朝美。後ろに隠してるかっこいいというよりかわいい男の子彼氏？」

「い、いやちがうよ！友達。契約破っちゃたらしいんだ。」

「かわいそうに。お別れする前に貴女の気持ちを伝えたほうがいいんじゃない？」

「そ、そんなわけない！」

「どうかしら、まあ、彼の検討をいのるわ。」

どうやら長話は終わったようだ。

扉の中は長い廊下になっていて、誰もいなかった。

赤い絨毯が延々と続いているような感じがする。

壁には様々な絵が飾っており、どうやら天界で何かやった人達らしい。

……あれっ？なんか変なのが交じってる。

『天界でモバイル〇ーツを乗り回し、暴れまくった天使。霜崎 剣治』

…… 気のせいかな？知ってる気がする。

他にも知り合いの名前が書かれていたし、写真がはってあったりした。

絨毯が終わりを告げるとそこには大きな扉が僕たちの前に現れた。

朝美さんと一緒に入ると何となく嬉しい場所だった。……女性の天使が沢山いた。

「……目が泳いでる。」

どきっ！

「えーっと。せ、静粛に！」

裁判長らしい天使さんは新人さんらしい。僕と同じで目が泳いでる。

「えーっと、罪人天使、

なんて呼ぶんだろう。じゃあめ？ てんどーじ じゃあめ君！」

……天界ってひどいなあ。初めてだよ。じゃあめって呼ばれるの。

しょうがないので手を挙げることにした。

「あのー。すいません。いいですか？」

裁判長に物申す！

「あ、貴方に発言の権限はありません！私が聞く質問にだけ答えて下さい！わかりましたか？じあめ君。」

周りの天使はかなり笑っている。教えてあげてもいいと思います
が？

「貴方は契約を破りましたね？」

彼女は初めての仕事だからかなりあがっている。……こういう仕事は経験を積んでするものではないのだろうか？

「じあめ君！黙秘はいけませんよ！ちゃんと答えて下さい！」

「あ、すいません。考え事してたから聞いてませんでした。もう一度いってもらえませんか？」

自分の話を聞いてなかったのがかなり頭にきたらしくあからさまに怒っているようだ。

「……貴方は契約を破りましたね！……どうなんですか？」

「はい、破りました。」

素直に答えたほうがいいだろうと思って答えたが、なぜか裁判長は怒り始めました。

「なんですか！その態度は！貴方は私が初めてだからなめてるんですか？」

・・・やっぱり初めてなんだ。怒った顔も綺麗だな？

「ちょっとなんかいいなさい！そのどうでもいいような態度はやめなさい！こっちは真面目にやってるのよ！」

更に怒りだしたが周りの天使は大爆笑。なぜだ？

「あのーっ。僕が何かしましたか？」

「貴方に発言の権限はありませんっ！質問に答えてください！わかりました？じゃあめ君！」

・・・流石の僕でも頭にきたな。じゃあめ、じゃあめといってるし。

僕は座っていた机をおもいつき叩いた！

どかんっ！（こういう時は バンッ！の方がいい気がする。）

「僕は真面目にやっていますっ！それに僕の名前は時雨ですっ！」

辺りが静かになる。それまでにしておけば良かったのだが僕は一言多く言ってしまった。

「貴女の方こそやる気があるんですか！」

辺りは静寂が支配していたが、天使達が焦りだした。

裁判長からは紅いオーラが吹きでてる。

「私はっ、私はっ、真面目にやっています！その証拠に天界裁判第一条！裁判を止めようとする障害は断罪してもいいという事も暗記していますっ！」

「……第一条なら誰でも知ってるんじゃないんですか？」

黙り込む裁判長。しかし、図星だったのだろう。紅いオーラがさつきより多くなっている。彼女以外の天使は既にいなくなっている。

「だ、第二条 あれっ？何だっけ。」

……やばいと思う。かなり杜撰な人だな。

裁判長と目があってしまった。

「……今、私の事馬鹿だ！と思ったでしょう？ 答えないと断罪ですよ？」

目が本気になっている。

「思ってません！ 杜撰な人だとは思いました！」

素直な自分が今日程恨めしく思った事はなかったよ。

紅いオーラが増える。

罪人天使の力 50パーセント増量中！

そんな言葉がピッタリだと僕は思った。

「……第二条は裁判長に文句を言う者は断罪だったと思います。」

「だった？ 自信がないんですか？」

裁判長は今の質問で完璧に怒ってしまったようだ。

『我は、罪人を裁く罪人！罪人を裁く力を我に与えよ！』

・・・デンジャラスだ！本気でやばいって。
どうする？

たたかう

道具

ぼけ○ん

逃げる

個人的に逃げるかな？戦いたくないし！

逃げ始めた僕を裁判長が追い掛けて来た。

「待ちなさい！容疑者、じあめ！」

その時、僕の中で何かがおこった。

「ほう、姉ちゃん死にたいらしいね？」

自分でそんな事を言ったの聞いて僕は記憶がなくなった。

目を覚ますと裁判所だった。どうやら僕は床に倒れているようだ。裁判所はあっちこっちが破壊されており、天上には人型の穴が開いていた。下からその穴を見上げると裁判長がはまっていた。助ける為にはどうしたらいいか考えていて、自分が飛べる事を思いだし裁判長を救助しに天井に飛ぶことにした。

天井はひびが沢山入っており、今にも崩れ落ちそうな雰囲気である。

気絶していた裁判長はボロボロになっており、息をしていなかった。

床にそつと寝かせ、携帯で電話をかける。

「あ、もしもし！」

『おかけになった電話番号はただ今、使われておりません。』

・・・あ、ここは天界だった。

繋がらない電話を直して、裁判長の心臓の上に手を置く。

・・・泊まってる！じゃなかった。止まってる！

息をしてない、心臓は止まってる・・・。

僕は人工呼吸、心臓マッサージを繰り返した。何度も何度も。

神様が本当にいるなら助けてくれる。

思いが通じて人工呼吸している最中に目をさました。

「ん！んん！」

「よかった！生き返った！」

「ちょっと！私に何してたんですか！」

確かにそういわれても仕方ないかな？

「はつきりいいなさいっ！時雨君。」

初めて裁判長が僕をちゃんと読んでくれた！

「はいっ！心臓と呼吸が止まってたから心臓マッサージと人工呼吸してました。」

名前をちゃんと呼んでもらえる事がこんなに嬉しいなんて！

「・・・心臓マッサージと人工呼吸？・・・」

何を想像したのか顔が真っ赤になる裁判長。

・・・僕は剣治と違って犯罪まがいの事はしてないつもりだ！

僕から離れようとする裁判長。だが体の傷が深いらしい。起き上がったと思ったら前に倒れそうになったので僕が支えた。

「あとう、裁判長さん何があったんですか？」

「・・・君は二重人格だったんだな？」

裁判長はゆっくり話始めた。

「・・・追い掛けていたら何か君が言ってこっちを向いた。君の目が赤くなっていて気がついていたら君は飛んでいた私に抱き着き、押し倒した後に私を天井におもいきり放り投げた。」

「なんで二重人格だとおもったんですか？」

うーんと唸る裁判長。

「気を失う前に『やべっ！久しぶりに登場したからやりすぎちゃっ

た。時雨に怒られる。』とってたからかな。」

・・・天使だ！間違いなく奴がやったんだ。

「あの一っ、スイマセン。」

微笑む裁判長。とても綺麗な表情だった。

「いいよ。君はかなりいい子だと気がついたから。

私こそ君を断罪しようとしてごめんね。・・・私が悪いのに契約してまで助けてくれて。」

・・・契約？裁判長とそんなのしたっけ？僕がしたのは・・・心臓マッサージと・・・人工呼吸・・・しまった！

「多分、契約したから私死ななかつたんだと思う。」

「・・・どういふ事ですか？・・・大体、契約って二回までじゃないんですか？」

怪訝な顔をする裁判長。

「君、契約知らないの。じゃあお姉さんが教えてあげよう。一回目に契約書類かいたよね？契約書類を書いた人は契約した人から一度だけ助けてもらえるんだよ。分かるかな？」

「ああ、はいわかります。」

亜美さんに刺された時助けてくれたのは占いのおじさんだったのか。

「普通は二回目の契約までしかできないんだけど、力の強い者は何

回か契約できるの。わかった？」

「あ、はい。ありがとうございます。裁判長さん。後スイマセン杜撰な人っていつて。」

首をふる裁判長。

「いいのよ。私が悪いんだから。」

「しかし、僕が悪いと・・・」

最後まで言えなかった。裁判長さんが僕を抱きしめたのだ。

「いいのよ。もういい。私は駄目な裁判長のお姉さんだから。」
時雨には昔もこんな事があつた気がした。

『千夏姉さ〜ん。ゴメン！』

『いいのよ。時雨が悪いんじゃないのよ。私が悪いの！』

「私にはこの仕事向いてないの。・・・やめるわ。」

「やめないで！僕は、僕は貴女には頑張って欲しい！」

・・・似ていた。

「そうね、そうよね！」

・・・千夏姉さんににていた。
僕を抱きしめる力が強くなった。

「ありがとう。時雨君。」

それから救助を待つ間、裁判長さんが名前を覚えてくれた。

「私の名前はシャルよ。時雨君。・・・時雨君、私の弟にならない？形だけでいいからさ！」

「え、いいですよ。」

形だけだし別にいいと思う。

「・・・お姉さんって呼んでみて、時雨。」

「・・・わかりました。シャルお姉さん。」

「うふふ、私もお姉さんかぁー。」

時雨は少し気になる事があった。

「あの、シャルお姉さん。ここ、壊れないんですか？今にも倒れそうですね？」

「大丈夫！昔ねここをある一人の罪人天使が破壊しようとしたの。その顔は笑っている。」

「しかし、その罪人天使は壊せなかった。なぜだかわかる？」

「さっぱりわかりません。」

「……ここはね、不思議な場所だからよ。」

……答えになってない気がする。

「ガン〇ムに乗って暴れた奴もいたけどここは壊せなかった。」

……多分、剣治だ。まちがいない。

そんな話しをしていてやっと救助が来た。

………それから少しの日々が経って僕は一人で判決を言い渡されるのを待っていた。一緒に来た朝美さんは先に帰ってもらった。

「時雨君、君はもう一度だけ契約内容を守ってもらいます。」

それが僕の判決である。

………助かった。死刑ではないようだ。

「ただし、保護観察として私が付いていきますが？」

シャルお姉さんが僕の保護観察をするらしい。

「はい、大丈夫です。」

ボランティアとして僕は裁判所を直すのを手伝った。ひびを入れ

たのは僕だから仕方がない。

そして、僕はあの赤い絨毯のある廊下に肖像画が飾られた。

『胴上げだけでこの建物を半壊させた罪人天使。
てんどーじ 時雨』

それから、少しだけ僕は 気になる事があった。

・・・記憶のはじにある千夏姉さんとの記憶。・・・それは間違いなくあった事だが僕に姉さんはいない。

そんな事を考えていて、人間界に帰る日がやってきた。

シャルお姉さんは既にいない。

僕は一人で人間界に戻る事になった。

『・・・。。。お一人ですか？』

「はい！」

『良かったですね？フラれた男の傷心旅行割引が使えますので五十円です。』

・・・僕は喋る便器と仲良くなる事はできないだろうな。

光に包まれ、僕は天界から消えた。

そのじゅうさん 天界での再契約! (後書き)

これから区切りをつけて行きたいので、時雨を少し真面目にして
いきたいとおもいます! 応援よろしくお願いします。

そのじゅうよん 帰って来れた時雨の反抗（前書き）

今回は時雨が人間界にもどって来た話しの前編みたいなものです。
だから今回後書きはありません。

そのじゅうよん 帰って来れた時雨の反抗

今日の目覚めはいたって良好。それは誰も僕の隣にいないからである。

・・・昨日の夜、公園の公衆トイレに帰還した僕は久々に友人に出会った。

「やあ、時雨君。・・・かなり早いご到着だね？てっきり二学期になっても帰って来ないかと思ってたよ。」

・・・。

「今まだ夏休み？」

頷く剣治。

「さて、どうやら君は強くなったみたいだね？誰かと契約したのかな？君ぐらいの力なら後、数十人は大丈夫のようだ。」

「事故だ！あれは仕方なかったんだ！」

多分剣治は天界での出来事を全て知っている。そう僕は思った。

「しかしまあ、時雨君はお姉さん系も好きなのかな？君が帰ってくる少し前に厄介なお姉さんが君の家の近くに引越してきたよ。」

多分シャルお姉さんのことかな？

「さて、約束を果たそうか？時雨君。」

・・・剣治との約束？

「・・・忘れたのかい、時雨君。ヒントをあげよう。メイド」

・・・メイド？一緒にメイドのコスプレしようだっけ？・・・
・・・！。

「あ、ああうん思い出した！」

「じゃあ、早速行こうか？」

僕は剣治の戦場に連れて行かれた。
学校につき、あの扉を叩く。

「剣治だよ！全員集合！」
しゅん。

「時雨君、ちょっと代わって。何か声が聞こえたら直ぐに避けるんだよ！（かなり小さな声）」

「え、うん。わかったよ。」

ゴホン。

「えーっと、みんな約束通り来ましたよ？」

あからさまに扉の向こうから物騒な音がする。

ガシャン！

「!危ない時雨君。天井に飛ぶんだ!」

瞬間、時間が止まる。

今のうちに剣治のすぐ隣に避難する。

時が動き始めると扉が吹き飛んだ。

「……まさか、戦闘兵器　ポジトゥロン・レーザーを使ってくるとは……。」

なんだそれ？

「流石の剣治さんも跡形もなく消えたでしょう。」

武装したメイドさんが一人出て来て僕と目が合った。

「あ、時雨様ですっ! 皆さん本物の時雨様ですよっ!」

武装したメイドさんが引っ込んでから剣治が話し出した。

「いやー、さっきの喰らったら流石の僕もやばかったかな? 腕が折れたかもね?」

……さっきの一撃でも腕が折れるぐらい?

何者だ剣治は。

「さて、メイドさん達にお仕置きしないと……。僕の友達を消そうとしたからねえ。」

……気持ちは嬉しいけど、剣治が言わなかったら僕は無理する

事なかったと思うな。

「ちよっと待っていたまえ。」

剣治はそう言って一人で入って行った。

「きゃあ！剣治さんだわ！迎撃用意！」

「待てっ。今回僕が負けたら時雨君をそっちに渡そう。それに彼の電話番号もプレゼントだ！時雨君は抱きしめてよし、食べても美味しい！君達さえ良ければ、彼の家に居るドジメイドと代わっていいぞ！」

・・・今なんかかなりやばい状況かな？もし、剣治がやられたら僕はどうなるんだ？

「零は剣治さんの家に居るんじゃないの！」

「そうするつもりだったんだが時雨君がどうしてもって言うから代わってあげたんだ。」

「みんな、怪しいわ！剣治さんが嘘ついてるかも！」

「嘘じゃないさ。ほら、証拠の写真だってある。」

静かになる店内。

・・・僕の家で働いてる写真かな？

「あ、嘘よ！時雨様が零と寝てる！」

よりによってあの写真か！しかもいつ取ったんだ？

「勘違いは止めたまえ。・・・彼はご褒美をあげたんだ。ドジメイドが料理をうまく作れるようになったから彼は『何かご褒美をあげ

よう』と言ったらドジメイドが『時雨様と一緒に寝たい!』と言ったのさ。・・・彼が首を横に振る事ができると思う人、拍手!」
店内はまた静かになった。

「これで分かっただろう!さあ、第二ラウンドを始めようか?今回は僕だけだ。」

騒がしくなる店内。たまに聞こえてくる声が怖かった。

「時雨様は私のよ!」

うーん、嬉しいけどなんか嫌だな。

今回は前回の戦闘より長引いた。静かになって入ってみるとやはり剣治だけしか意識が無かった。この前みたいにメイドさんをさわっておらず、今日はカメラに収めていた。

「時雨君、今日は少し本当でやらしてもらった。・・・彼女らが目を覚ますまで少し時間があるだろう。・・・触りたいなら触りたまえ。」

そういつてまたメイド長がいる部屋に言ってしまった。

ぼくは

触る

触らない

という選択に迷った。

やっぱり触るべきではない。

僕は近くにあったおしぼりをメイドさん達の頭の上に乗せていった。負傷しているメイドさんにはこれまた近くにあった救急箱で応急処置をした。

全員終わっても剣治は帰って来ないのでメイド長の部屋に入ろうとしたら剣治が出て来た。

「メイド長さんが話があるそうだから来てくれだそうだ。」
部屋に入ると大きな箱が沢山あった。ファンからの貢ぎ物だろうか？

「時雨君、貴方が初めて天界から帰って来た人ですよ。魔界の人達からプレゼントが来ています。」

・・・これ、僕へのプレゼント？

「ちなみに僕からフィン・○アンネルをプレゼントだ。」

嬉しいような悲しいような。・・・僕使えるかな？

「私からはメイド五十人です。」

「いえ、結構です。」

「冗談です。メイド喫茶のタダ券をあげますよ。」
大人しく貰う事にした。・・・いつ、使うか分からないけど。

「残りのプレゼントは今日持って帰りますか？」

別にプレゼントが欲しい訳じゃないので首を振った。

「いえ、いりません。メイドさん達で分けてください。」

「そうですか、そろそろ彼女達が目を覚ましますよ。」

一礼してタダ券とフィン・ファン〇ルを持って帰る。

扉を開けると確かにメイドさんはピンピンしていた。

剣治が今日の報告をする。

「今日は特にならない。」

溜息が聞こえてくる。

「しかし君達、時雨君を消そうとしなくてもいいだろう。撃った人、出て来たまえ。」

おずおずと出て来た一人のメイドさん。

「君は新入りか？」

頷くメイドさん。

僕の方を見て、小声で話し掛ける。

「また、ドジメイドだ。どうする？引き取るかね？」
僕は首を振った。

「じゃあ、僕がお仕置きしていいかね？」

近くに居るドジメイドさん（ドジで済まされるレベルではない。）

には聞こえているだろう。顔色が蒼白だ。

「えーっと、剣治。僕がお仕置きしていいかな？」

びっくりした剣治だが、僕の間を見ると笑っていた。

「みんな、今回は時雨君がお仕置きするそうだ。」

ざわめく店内。

僕はドジメイドの（やっぱりロリな子だ。）目線になり、話し掛けた。

「まず、言いかな？僕が言う事を今後必ず守って欲しい。」

息を呑む店内。ニヤニヤする剣治。

「は、はい、わかってます！」

「今後は必ず確認する事。わかったね？」

「は、はい！わかりました！」

さて、最後に。

「目をつぶって。」

素直に目をつぶるドジメイド。

僕は手を上げ、ドジメイドに振り下ろした。
更にざわつく店内。

コッソッソ！

「もう目を開けてもいいよ。後、あまりこんな事しちゃだめだよ？」

目を白黒させるドジメイド。

「・・・約束守れるかな？」

頷くドジメイド。

「じゃあ、お仕置き終わり！みんなの所に戻っていいよ。」

「あ、ありがとうございます！」

店内はなにが起こったのかまだわからないようだ。

剣治は笑い出した。

「ははっ！やっぱり君は優しすぎる。みんな、一応彼は怒っている。なんでか分かるかな？」

静かになる店内。だが、一人だけ分かるメイドさんがいた。

あのドジメイドである。

「あ、みんな時雨様に謝ってないからですか？」

頷く剣治と僕。

「時雨君は彼なりの怒りを表したんだ。さて、時雨君解答できたそ

の子になにかご褒美は？」

「ゴメン、何ももってない。」

ニヤニヤする剣治。

「じゃあ、その子が決めていいかな？」

別に大丈夫だろう。流石に一緒に寝る事はないだろう。

「ああ、大丈夫だよ。」

そして考えているドジメイド。

「・・・じゃあ、甘えていいですか？時雨様。」

「？ 別にいいよ。」

やはりというかなんというか抱き着いてきた。・・・なんか久しぶりの感じだ。

「時雨にいちゃん！いい子いい子してください！」

「あ、わかったよ。いい子！いい子！」

頭をなでなでして離れるドジメイド。

「ありがとうございます！時雨様！」

顔を真っ赤にさせ走り去ったドジメイド。

未だに店内は静かだ。

「さ、時雨君。話があるから帰ろう。彼女らの頭が復活するまえに。」

一人だけ手を振るドジメイドに挨拶して店の外に出た。

「まず、謝らないといけない時雨君。」

「メイドさんが襲ってきた事？」

「そうじゃない、実は君が居なくなった後、少し面倒な事があったんだ。」

「面倒・・・な事？」

少し暗い顔になる剣治。

「番長が蕾ちゃんになったんだ。」

「え、何だって！蕾が番長？」

ゆっくり頷く剣治、そして簡単にまとめると次のようになる。

番長だった事が蕾にばれ、蕾は何故時雨がみんなに頼りにされているか分かった気がしたらしい。時雨がいないので代わりに番長になってしまったそうだ。（剣治簡単にしすぎ！）

「けど、僕が生きて帰って来たから大丈夫じゃないの？」

「無理だ。前からの掟に従わないといけない。・・・番長になりたいなら番長を倒すしかない。・・・君に今の番長が倒せるかな？」

・ ・ ・ ・

そして、朝を迎えた。決心は固まっている！

「僕が番長になる。」

それが時雨の答えであった。

時雨は普段そうであったように朝食を食べに行った。

「あ、今日は零ちゃんが作ったのか。」

「・・・はい、そうですよ。あれから時雨様が未だに帰って来ないんです。」

「ふーん、大変だねっ。じゃあいただきますっ！」

零は味噌汁を掻き回していて気が付いていない。

時雨も既に普段ボケまくっていて駄目であった。

「ご馳走様！美味しかったよ。かなり腕があがったね。」

「はい、ありがとうございます。」

結局、初代ドジメイド斉藤 零は時雨が部屋に戻った後、異変に気が付いたらしい・・・。

次に時雨が合ったのは美奈であった。

「あ、美奈さんおはよ。」

「あ、はい。おはようございます。時雨様。」

「……なんか暗いね。いつも、！ を付けて喋ってたよね？」

溜息を出す美奈。

「はあ、毎日、時雨様が帰って来ないか遅くまで起きてるんですよ。あの朝、急に居なくなってしまったからびっくりしました。零が一人で泣いていたから事情を聞きました。」

「なんて言ってたの？」

「時雨様が居なくなったとしかいいませんでした。」

そういつてフラフラどこかに美奈は行ってしまい、時雨もその場を立ち去った。

天然系元氣印のお姉さん、メイドの美奈は朝食の後片付けの時に気が付いたと後に答えている。

時雨は外から何か音がしたので庭にでてみた。

蕾がどこから手に入れたのか大きな木刀を振っている。

「……蕾、なんで木刀なんか振ってるの？」

「簡単な事だよ、兄様が

もう帰って来ないから私が番長を引き継ぎ強くなるためだから。」

……僕、死んだのか？

「なんで強くなりたいの？」

木刀を振る手を休め、答える蕾。

「……兄様を守れなかったから。」

「別にいいよ。蕾は妹だからさ!」

「……あっちに行つて!」

後ろ姿だが、かなりの迫力があつた。黒いオーラがでている。

時雨は肩を竦めその場を離れた。

ボケボケ主人公時雨の義妹、蕾。彼女が大好きな兄様と話していた事に気が付いたのは木刀をカウントMAXまで(9999)振つたあとである。

時雨は誰にも気が付いてもらえなかったから剣治の家に家出した。

部屋に入って準備をして部屋を出た。

後ろから凄い勢いで零が走ってきたが無視した。キッチンを通り過ぎた時に美奈がこつち見て皿を割ってしまったがそれも無視した。最後に庭で素振りしていた蕾が回数MAXまで木刀をふり終わり時雨を見て哑然とし、木刀がシャルの家に飛んで行き、窓が割れたがそれさえも無視して家から去って行った。

三人が急いで時雨の後を追って曲がったはずの角を曲がったがそこには時雨はおらず、一枚の紙が落ちていた。

『午後4…00に公園で待つ。』

『追伸 怪我しないように準備してきてね。 時雨。』

時雨は既に剣治の家に来ている。剣治のコレクションを眺めていた。

「時雨君！さわるな！」

「あ、ゴメン！」

珍しく剣治が怒った。

「全く！触るなら手袋をつけたまえ！」

時雨の家では時雨が生きて帰って来たので喜んでいたが、手放しでは無かった。時雨の初めての無視。

彼女達が覚えている記憶の中では時雨は無視などした事が無かった。

蕾が昼寝してお腹出していたぐらいで時雨は布団をお腹の上に乗せていった。

次に美奈がちょっとだけフラツとしただけで慌ててベットに寝かされてしまったことがあった。部屋にはカギまで掛けていった。

極め付けは零である。三人の中で一番苦勞の掛かる存在である。お風呂を洗っていて石鹸で滑った零を幾度となく救っている。更に彼女がお風呂に入っていて滑った場合も駆け付けるのだ。

最後に時雨はどんな忙しい時であれ、彼女達の悩みを聞いていた。そして彼女達が甘えた場合も全てに答えていた。

思い出話をしていると誰かがやって来た。

ピンポーン！

みんな行く元気はなかった。

ぴぴんぽーん

無視。

ピピピピンポーン

無視。

彼女達に手紙を持って来た時雨は誰も出てこないのので家に入り蕾達が居る部屋の隣にあるテーブルに置いて出ていった。

数分後、その手紙を見て彼女達は驚く。

『あれ、分かりにくいかなと思ったからはっきり書きます。決闘したいんで16..00に公園で待ってます。理由は僕を信頼していないようだからです。』

『追伸 本気でいくから怪我しないようにしておいてください。時雨』

そのじゅうご 時雨の本気？ 剣治の本性？

あれから数時間が過ぎた。

悪魔、メイド連合軍（蕾、美奈、零）は対時雨戦に向けて作戦会議をしている最中だった。

「・・・全てが謎ですね。蕾様、兄妹ゲンカをした経験はありますか？」

首を横に振る最高迎撃長（蕾）

「・・・兄様とケンカした事なんてないよ。兄様は私が怒ったら理由聞いてきて謝るもん。」

過去一度も戦闘経験が確認されていない敵、時雨。

ここで後援射撃兵（零）が口を開く。

「・・・優しいから弱いと思いますよ？」

首を傾げる作戦参謀長（美奈）

「そうでしょうか？ 時雨様はお優しいけど強いかもしれませんよ。」
なかなか敵兵の情報が手に入らず作戦の立てようがない三人であった。

ピンポン！

「あ！またきたよ！時雨様かもしれない！」

走って行った零を追い掛ける二人。

先に行った零が悲鳴をあげた。

「……おいおい、ドジメイドさん僕を変態みたいな目で見ないでくれ。時雨君には悪いが君達を助けに来た。」

「え、じゃあ生徒会長も戦ってくれるんですか？」

既に零は美奈の後ろに隠れており、美奈は蕾の後ろに隠れている。

「いや、流石にまだ怪我したくないからね。時雨君が本当に君達を……まあ、彼が本気出したら魔界と天界が手を組んでも勝てないかな？」

啞然とする三人、笑う剣治。

「……冗談さ、時雨君はそんな事しない。命の危険にさらされても『コッソッ』で済ます人だからね。」

美奈が剣治に質問した。

「なぜ、加勢してくれるんですか？」

「おや、美奈さんじゃないか。時雨君の所にいたのか。あの時は色々意地悪して悪かったね。」

顔を真っ赤にする美奈。

「僕が加勢する理由はちよっと彼がかわいそうだからだ。」

「……兄様がかわいそう？」

「ま、これを見て作戦をたてるといい。」

ビデオを渡し、帰ろうとする剣治を美奈が引き止める。

「待ってください！ 貴方はまだ、あそこに行って皆にいたずらしているんですか？」

振り返らず答える剣治。

「時雨君と行ってるよ。……詳しくはドジメイドさんにききたまえ。」

剣治は扉をあけ、外に出て行った。急いで美奈が追い掛けたが扉をあけると誰もいなかった。

そして、美奈は零を呼んだ。

「零、聞きたいことがあります。……蕾様は先にビデオを見ていて下さい。」

美奈は怒っているようだ。零と一緒に何処かに行ってしまった。一人残された蕾はビデオを見る事にした。

「……零、本当に時雨様が冥土喫茶に来たんですか？」

「う、うん。剣治さんと一緒に来たから初めはみんな剣治さんみたいな人かと思ってたんだよ。」

俯く美奈。

「そう、ですか。剣治さんはいつものようにゲームをしましたか？」

「え、うん。負けちゃった。」

「じゃあ、罰ゲームは誰がどうなりました？」

「えーっと、時雨様が決めたよ？」

ここで美奈の頭の中にはあの時雨が犯罪を侵している光景がひろがっていた。

「・・・時雨様はどんな事をしましたか？」

「確か、お仕事がんばって下さいって言ったと思うよ？」

首を傾げる美奈。

「たったそれだけ？」

首を縦に動かす零。

「・・・じゃあ、なんで時雨様と一緒に貴方がきたんですか。」

美奈は時雨から、『剣治がね、あの子を真面目なメイドにしてほしいと頼んで来たんだ。』としか言わなかった。美奈は当時はそれを信じたが、今は時雨がさらってきたと思っている。

「えーっと、メイド長から剣治さんの家で働くように言われたんだ。・・・だけど、剣治さん恐いから時雨様に引っ付いてたら剣治さんが時雨様に私の面倒見るように言ったんだ。そしたら時雨様が頷いたんだ。」

つまり、美奈は物凄い勘違いをしていた事になる。

「・・・零、あの冥土喫茶に行きましょう。昨日、時雨様が帰ってきてたなら間違いなく、剣治さんに連れていかれてるわ。」

「え、うん。」

メイド二人組が冥土喫茶に向かったときに蕾はビデオを見ていた。

テレビを見る時は部屋を明るくして離れて見るように！

生徒会長

その内容は時雨の戦闘の記憶であった。

「……兄様が、こんなに強いなんて……」

ビデオを見て気付いた事があった。

時雨が戦ってる相手は全て彼の知り合いばかりである。

「……みんなに会いに行けば詳しい事がわかるかもしれない。」

「あ、時雨様？昨日も来てたなあー。」

美奈と零はメイド達に聞き込みを開始していた。

「しかも、昨日は私達時雨様を間違って消そうとしたからね。」

「……昨日は時雨の命日になったかもしれない。」

「詳しくはあの子に聞くといいよ。」

途中いたメイドに聞いた所、怒った時雨がついにお仕置きをした

らしい。しかし、羨ましいお仕置きだったそうだ。

「あの新入りが羨ましいわ！」

メイド達はその話ししかしていない。

そして、最後にお仕置きされたメイドにいきあたって。

「・・・あなたが、時雨様にお仕置きされたの？」

「うん、『コツンッ』と叩かれました。」

「それ以外は？」

「『あまりこんな事しちゃ駄目だよ？』と怒られました。」

時雨様、甘やかしすぎ。

「普段、時雨様がすることは？」

「えーっと、剣治さんをとめてくれます。」

・ ・ ・ ・ ・

それから、遂に約束の時間がやってきた。

やはり、時雨は先にきていて、余裕なのか公園のゴミ拾いをして
いた。全てのゴミを分別し、近くにいた少年達と砂場でぼんりのち

ようじょーを完成させた後、彼女達がやってきた。

「さてと。」

『我は、寂しさを背おいし天使』

『そして、喜びを与える悪魔』
時雨を紅と蒼の光がつつむ。

つぎに現れた時雨には紫の羽が生えていた。

蕾達も戦闘準備をする。

「この勝負、同意と見てよろしいですね？」

草村から剣治が出てきた。

「それではっ！ロボ○ル、ファイト！」

周りの子どもは思う。

（メダロ○ト？）

早速、時雨は時を止めた。

「おい、時雨！本気出すんじゃないのか？」

天使がでてきて時雨に問う。

「本気だよ。今からみてなよ。」

時が止まっているのに一人だけ動いていた人がいた。……剣治である。

動かない美奈達をカメラで撮っている。

「……剣治、もういいかな？」

「ああ、もういいよ。しかし、時雨君は優し過ぎるよ。無視されたのに仕返しなんてしてないじゃないか。」

確かに時雨は何もしていない。

「じゃあ、お仕置きするから手伝って。」

「わかったよ。」

一人、一人の頭を叩いてまわり、それを剣治のカメラに収めていく。

「時雨君、それではアシスタント料金として彼女達の写真は持って帰るよ。」

「……うん、できれば変な事に使わないでね。」

剣治は時雨に写真を渡し（どのようにしら普通のカメラからすぐに写真を出す事ができるんだろう。）帰っていった。

時雨は彼女達を担いで家にテイクアウトした後、時間を元に戻した。

「あ、あれっ？」

三人は真っ先に辺りを見回した。家の中である。

「はい、さっきの対決の結果。」

呆然としている三人の前にさっきの写真が置かれる。

写真にはグーで三人が『コッソッ』と叩かれている光景が写されていた。

「君達の負け。……罰ゲームとして、今日の晩御飯は君達が協力して作ること。」

そういつて時雨は家から出ていった。しかし、きちんと置き手紙に、

『晩御飯が出来た頃に帰って来ます。』

と遺してでていった。

三人が昨日のメイドさん達みたいに固まったのは言うまでもない。

剣治の待っているある場所に向かう。

「やあ、時雨君。やはりカギがかかっているよ。」

これで冥土喫茶に来るの何回めだろう？

扉の前に立つとすぐにメイドさん達が武装して出てきた。

「あ、時雨様。話がありますので後でその前にお邪魔虫を排除します。」

「じゃあ、時雨君。僕は虫代表で殺虫剤に立ち向かうよ。」

戦闘開始。時雨は外で待っている。

「落ちろっカトンボ！」

さっきから虫代表の剣治が獅子奮迅している。

そしてすぐに戦闘は終了。中からカメラの音が聞こえる。中にはカメラでメイドさんを撮っている、

『剣治虫』以外に動いている生物はいなかった。

そして満足したのかまた奥の扉に入っていく『剣治虫』。残されたのは虫代表に負けた哀れなメイドさん達である。

そして時雨は昨日のようにメイドさん達を介抱するのであった。いつの間にか戻ってきた剣治はまた写真を撮り始めた。ほっといて介抱の続きをしていると剣治がカメラをメイドさんのスカートの中につっこみ、シャッターをきった。

「な、なにやってんの！流石にやばいだろう！」

「大丈夫、大丈夫減るもんじゃない。」

「いや、フィルムが減るだろ！」

「あ、そうだね。」

何かおかしい気がしたが剣治がやめたからいいだろう。

「いるかい？時雨君。」

「……欲しいけどいい。」

剣治はカメラをどこかに直し、メイドさん達にいたずらを始めた。

「……何やってるの？剣治。」

「心臓マッサージだよ。見てわからないかな？」

心臓止まってないからそれは犯罪じゃないかな？

「ま、僕の事を虫扱いした罰だよ。」

剣治の心臓マッサージは彼女達が起き上がっても続けられたので僕が取り押さえた。……普段は真面目なのに。

「時雨様、昨日はスイマセンでした。」

メイドさん達が頭を下げる。

「いいですよ。終わった事です。気にしないでいいですって！」

「じゃあ時雨君、彼女達にご褒美をあげたらどうかね？」

流石にまたこの人数から甘えられたら大変な事になる。時雨は昨日の事を思い出した。

「い、いいけど……」

「いいそうだ！みんなおもいつきり甘えなさい！」

「え、ちょっとまった！」

「はーい！時雨さま」

・・・この後何をされたか記憶に残ってない。

（後で剣治に聞いたのだが、完璧に僕はメイドさん達の玩具になり僕のちぎれた服が飛んで来た所で僕を置いて帰ったそうだ。何をされたかメイドさん達に聞きに行くとみな顔を赤くして僕に謝って逃げていった。・・・僕は何をされたんだろう。）

気が付くと家の前に倒れていた。着ていたはずの服は無くなっており、違う服を僕は着ていた。

家に入るとみんな目を僕からそらしている。・・・少しやりすぎたかな？

今日の晩御飯はカレーであつた。

「あ、あの兄様。」

ようやく蕾が口を開く。

「ん？何。」

「ごめん、なさい。」

「もういいよ。」

何となく、暗い雰囲気になったのでその場を離れて自分の部屋に逃げた。

そろそろ寝る時間になったので寝る準備をしてベッドに入る。

ガタン

「うわっ！」

僕の部屋の前に何かいるようだ！おそるおそる扉を開けると三人が立っていた。枕を持ってパジャマ姿で僕を見ている。

「どうしたのみんな、……もしかして怖いとか？」

めちゃくちゃ困惑の色を見せたが零ちゃんが頷き僕のベットに行ってしまった。

「蕾、なんか怖い見たのかな？」

首をカクカクする蕾。そして零ちゃんが寝ている隣にゴロンとなる。

「……美奈さんも何か怖い物でも見たんですか？」

流石に年が一番上でしっかりしているだけある。

「……私は、私は今まで生きてきて怖い者を見ました。……出来れば一緒に寝てもらえないでしょうか？」

既に二人が居るので断るわけにはいかなかったので頷く。

「いいですよ。しかし、美奈さんが見た怖い者ってなんですか？」
「えーっと、スイマセン。思い出したくないんです。」

流石に四人で寝るには狭かったので僕が違う部屋で寝ようとする
と三人が僕をすごい力で捕まえた。

仕方ないので横になると三人が抱き着いてきた。

・・・一見、ゾンビに襲われているように見えるだろう。

「うわっ！どうしたのみんな！」

誰も答えてくれず、泣いているようだ。・・・もしかしたらこの
三人、本当はお化けかも。

段々寝息が多くなっていき、お化けかもしれない三人に引っ付か
れた僕は眠れなかった。

上にも誰か乗ってるので僕は何も出来ずただただ、ゾンビのよう
な呻き声をあげるのだった。

明るくなるにつれ、（なかなか眠れず、意識が夢の世界に行こう
としても彼女達がわざとなのか偶然なのか抱き着いてきて蛇の生殺
し状態であった。）上に誰が乗っているか分かった。・・・
美奈さんである。一番重い美奈さんが乗っているから僕は身動き出
来なかったみたいだ。しかも顔が僕の近くにある。

・・・
やばい！

このままいったら『指定』がかかる危険性がある！

三人には悪いが時を止めさせてもらった。

誰も起きてないので自分でシヨクパンを食べていると僕の部屋か
ら叫び声が聞こえた。

慌てて僕の部屋に行くと泣いてる三人がいた。

「……………どうしたの！みんな！」

僕を見てみんなが泣き止む。……………そして僕に抱き着いてきた、三人いっぺんに。

「「「お帰りなさいっ！」「」」」

「え、うん。ただいま！みんな！」

時雨の運命は未だに終わりを告げてない……………。

そのじゅうご 時雨の本気？ 剣治の本性？（後書き）

えーっと、評価していただいた皆様、ありがとうございますっ！
かなりうれしかったですっ！そこら辺を駆けずり回りました！

今回は少し悪戯っ子に時雨をしました。・・・失敗
してしまいました。・・・今回はなんか、綺麗に終わったんで嬉
しいですね。時雨にはもっと頑張ってもらいたいとおもいます！最
後に、本当に読んでくれるみなさんありがとうございます。ま、い
つもおりで頑張っていきたいとおもいます！

そのじゅうろく 紅い空、蒼い地上（前編）（前書き）

今回は前編です！時雨君には旅をしてきてもらいたいと思います。

そのじゅうろく 紅い空、蒼い地上（前編）

「時雨君、今回はちょっと面倒な事件だ。」

場所は生徒会室。

「・・・何が起こったの？生徒会長。」

それに答える僕の背中には保坂さんが乗っている。

「・・・誘拐だ。今はまだ未遂で終わっているが、間違いなく犠牲者が出るだろう。」

今、生徒会室にいるのは僕を含めて6人。

「・・・もしかして、犯人剣治とか？」

そういったのは舞さんである。

「いくらなんでもそんな事はしないと私は思いますわ。」

そう答えるのは焰さん。

「わ、私もそう思います。」

焰さんの意見に賛成する、春さん。

「僕も剣治を信じるよ。で、被害者ってやっぱり幼いの？」

頷く生徒会長。

「うむ、みんなありがとう。しかし舞さん、生徒会長を疑うとは・・・いい線いってるが違うな。僕は誰かと違ってロリコンではない。まあ、そんな事より被害者はもしかしたら知っている人がいるかもしれない。」

出てきた写真を見て驚いた！

「・・・この子、しな　じゃないか！」

ふふっ。

生徒会長が不敵に笑う。

「覚えてたか、時雨君。彼女は一発キャラではなかったみたいだな。みんな、彼女は時雨君の三人目の妹だ。」

・・・確かに、そんな嘘をついてた気がする。

「しかし、彼女は今回会えない。よって、彼女の出番はない！」

・・・理由は聞かないでおこう。

「手がかりがないのでまずはパトロールから始める！グループはくじで行う！」

何故か白熱したくじの結果。

一組目　　剣治

保坂

二組目　　時雨

春

三組目

焰

舞

春さんには強烈な視線が注がれていた。

「さ、いこつ、春さん。」

可哀相になったので手を握り部屋から出ようとする。後ろからは剣治の悲鳴？が聞こえている。

「ちょっと！君達、やめたまえ！暴力はよくない！」

「生徒会長！イカサマして私達が時雨君とにならないようにしたでしょう？」

「………何の事かな？」

扉があき、凄い勢いで走り去る生徒会長。

「待ちなさい！生徒会長！貴方には二度と目の目を見せませんわ！」
それを追い掛けていく残りのみんな。

廊下に残った僕たちは手を握った間々立ち尽くしていた。

「……じゃあ、行こうか？」

「あ、はい。」

とりあえず、小さい子が多い公園なんかをパトロールしてみる。

「春さんは断罪天使？」

「あ、はい。……でも、弱いんで何も出来ません。犯人を捕まえる事が出来ないかも。」

うなだれる春さん

「じゃあ、僕が特訓してあげるよ。」

「特訓……ですか？」

「うん、僕もそんなに強くないけど多分春さんより強いと思うから……今、この公園誰もいないからさ！」

どうしようか考えている春さん

「えーっと、わかりました！お願いします！」

特訓は剣治から電話がくるまで続いた。

「せやっ！」

「凄いよ！上達するの早すぎだよ。」

「あ、ありがとうございます、師匠！」

プルル、プルル。

「ん？剣治。どうしたの？犯人捕まえたの？」

「……僕が捕まってしまった。今日は終わりだ……帰ってよろしい。時雨君、夜になったら僕を助けに学校に来てくれ……がくっ。」

「……剣治は生徒会のメンバーに捕まり、リンチを受けてしまったようだ。」

「春さん、今日は解散だつてさ。」

「あ、そうなんですか。じゃあ師匠今日はありがとうございました。……また今度教えてくださいね。」

「うん、別にいいよ。」

公園で別れ、家に帰る僕。

「た、ただいまぁー。」

近頃、家に帰るのが少し恐い。
ダダダダダダダッ！

びょーん

ガスッ！

「時雨様っ！お帰りなさい！」

美奈さんが抱き着いてくるようになったのだ。

ムギュー。

あ、あれが当たってる。

「あ、うんただいま。」

「もう帰って来ないかと思ってました！」

あの事件がまだ尾を引いているらしい。……あれから少し経った。

母さんが帰ってくるまえに零ちゃんは家から居なくなった。

正確にいうと連れ去られた。

『やだっ！ここがいい』

『わがまま言っちゃいけません！あなたはもうじょうずに働けます！』

どごっ！

『……静かになりましたね。それでは美奈、時雨様、蕾様。ご機嫌よう。』

という出来事があったのだ。その後はずっと僕に美奈さんがくつついたまんまである。

蕾の時と似ていたので、蕾に相談してみた。

『うーん、頑張っ！兄様！』

剣治に助けを求めた。

『好きなようにさせればいいんじゃないかな？』

そして、今にいたる。

「時雨様ー。」

すりすり。

「あ、あのーっ。美奈さん、頬ずりしないでください。恥ずかしいですよ。」

何とか美奈さんを引きはがし、ふやけた頭をはっきりさせる為にまた行く事にした。

「美奈さん、ちょっと頭を冷やしてきますね？」

「はい！早く帰ってきてくださいね？」

最後の頼み、シャルお姉さんにどうしたらいいか聞きに行く。

「あーっ。なるほど。それはね、時雨が居なかったから頭が混乱してたんだよ。・・・んで、頭の整理がついた頃に時雨が帰ってきたからまた混乱したわけ。」

「じゃあ、混乱が治まったら昔の美奈さんに戻るんですね？」

「うーん、どうかな？大丈夫だと思うよ。ところで、誘拐犯を捕まえたいみたいだね？」

「え、はい！」

僕の頭をなでなでするシャルお姉さん。

「そうか、頑張りなよ。お姉さん応援してるから。」
「頑張ります。アドバイスありがとうございます。」

そして家にまた入る。

たたたたたたっ！

びゅっ！

「時雨様お帰りなさい！」

「あ、うん、ありがとう。」

また、美奈さんがくつついて来た……。

「……酒臭い！美奈さん、お酒飲みました？」

「あっひゃ！ばれちゃいまひた！もーのんでないとやってられまし
えーん！しぐれーさーま！だーいしゅきー！」

「ちよっと！？何、むぐう！」

美奈さんに押し倒され、

……ブチューー！

「はははっ！しぐーれーさーまのもらいましたあ！あはっ！」

「いいかげんにっ！せんかい！美奈さん！てやっ！」
どすっ！

「きゅー。」

気絶した美奈さんを部屋に連れて行って布団に寝かせる。

「…………今日の美奈さんは危険だ……。しかし、何があったんだ？」

美奈さんの部屋には机があり、その上にノートが置いてあった。

「……………日記だろうか？悪いけど何か書いてあるかもしれない。」

『……………今日、私より年上の零が時雨様に甘えていた。時雨様は優し過ぎる人だ。……多分私が甘えても答えてくれると思う。』

「……………年上？」

「…………零ちゃんは15だったな？……美奈さんは年下なのか？」

あんなにしっかりしてるのに？身長も僕と同じだ。
外はまだ明るいが時計は7時を指している。

「…………剣治なら知っているのではないだろうか？」

時雨は美奈をそのままにするのがかなり不安だった。

「ただいまぁー。兄様？美奈さん？いないの？」

「…………蕾に任せよう。」

「あ、兄様どうかしたの？」

「蕾はどこ行ってたの？」

「本屋だよ。そしたら剣治さんから電話があってね、兄様が私を探してたと言ってたから帰ってきたんだ！」

「……実は美奈さんがお酒飲んで酔っ払ったんだ。僕はこれからキ○ベジンを買ってくるから、美奈さんをよろしく！」

蕾の返事を聞かずに家を出る。

『我は、悲しむ心を背負いし天使。』

学校までひとつとびし、生徒会室の中に入る。

そこには糸が絡まった操り人形みたいな剣治がいた。

「剣治！美奈さんは何なんだ！教えてくれっ！」

「……時雨君、落ち着きたまえ、彼女は君の家にいるメイドだ。」

操り人形剣治の口が開く。

「だって、彼女は……」

時雨が蕾に会う前に日記をまだ読んでいた。

『……今日、人形だった私は少しばかり人間に近付いた。執事さんが私に契約書を書かせてくれたからだ。これで私は少しの間人間になる事が出来る。』

「答えて！剣治！」

首を振る剣治。

「……君のメイドさん、それじゃ駄目かね？」

「もっと、もっと確かな存在にして欲しい！」

「話したいがこのままでは僕が糸の切れた人形になってしまう。早く降ろしてくれ。」

「彼女はピノキオみたいなものだ。誰かと契約すれば人間になる。・

……」

……あつ。

「彼女はだれかさんと契約したから大丈夫だ。……」

……。

「まあ、時雨君。……そろそろこの部屋から出ないと魔界に行ってしまう。続きはいつものあの場所で聞こう。」

その後、剣治から色々聞いた。

美奈さんの実年齢は10歳らしい。

他の事は今度の機会に話したいと思う。
家に帰り着くと、

たたたたたたたたたたたた

「兄様！美奈さんが苦しんでる！」

剣治から聞いた情報の中にあつた。

「……蕾、先寝ていいよ。」

「でも、……」

「いいからっ！」

「う、うん分かった！お休み！」

（兄様、私晩御飯抜き？）

美奈さんの部屋からは叫び声が……。

「……………ソロモンよ！私は帰ってきた！」

……………もしかしたら末期症状かもしれないな。

『……………いいかい、時雨君、契約した後は頭に手をのせて宇宙を想像するんだ！そしたらもう彼女は人間になる。……………多分。』

宇宙、宇宙、宇宙、宇宙、宇宙、宇宙、宇宙！

みるみる静かになる美奈さん。

(・・・さすが、剣治だ。)

しかし剣治の情報は少し間違っていた、時雨がそれに気がついたのはまだ先である。

時雨はフラフラになりながらもなんとか自分の部屋についた。・・・そして、事件は起こったのだ。うとうとしていた蕾が時雨のベットに寝転がり、時雨が部屋に戻ってくるのを待っていると時雨はちゃんと戻ってきた。

そして、時雨は疲れていたので蕾に気が付かずそのまま蕾の上に倒れ込んだ。(時雨はベットに俯せに倒れこみ、目をつぶったまま枕を探す習性がある。)

「うーん、枕。」

「きゃっ！兄様何してるの！」

「まくらー、まくらー」

「顔が当たってる！ちょっ！んん！」

次の日、時雨の家は凄い事になっていた。美奈は二日酔い、時雨は昨日色々働いたので筋肉痛。蕾は昨日あった事があまりに突発だったので突撃した後のカミィ○ビダン(テレビ)みたいになっていた。

朝食は個人でとることとなった。……ちなみに時雨は残っていたスイカを食べた。

今日も時雨は生徒会室に行き、犯人捕獲を目指し努力する事となった。

「くじで決めたら生徒会長がずるするからじゃんけんね!」

……じゃんけんでどうやってチームを決めるんだろう?

「勝ったチームと負けたチームに別れよう! いいよね生徒会長?」

「御自由に。」

結果 勝ち組 剣治

舞

焰

保坂

負け組 時雨

春

かなりくやしそうな三人。

「生徒会長! はかりましたね!」

「いや、無理だろう! さすがに!」

「問答無用ですっ！」

昨日と同じように走りさる剣治。そしてそれを追う三人。

「……行こうか？春さん。」

「はいっ！行きましょう。師匠！」

今日も昨日と同じ公園に行く。

「あ、あの師匠！あの人かなりあやしいですよ！」

赤い服を着て、トナカイを従える人物は少女に話し掛けている。

「……師匠！助けなくていいんですか？」

「……なるほど、サンタサンか。」

「何のほほんとしているんですか！」

「……生徒会長にしてやられたんだ！」

赤い服を着ている人物は亜美さんであった。

「おーい、亜美さん！」

振り向き、ビックリして逃げる！トナカイは既にいない。

「……逃げちゃいましたよ！師匠！」

「春さん、学校に戻ろう。」

春には時雨の顔が笑っているようにみえた。

「・・・やあ、二人とも。犯人は捕まったかね？・・・冗談だ全
てを話そう。」

そういう剣治今日は掃除ロッカーに押し込められていた。二人
で引っ張りだし、剣治が喋り出すのを待つ。

「・・・いやまさかこんな早く犯人がばれるなんてね。・・・
今回の事件は春君、君を強くするためなんだ。」

「・・・私を？なんでですか？」

？マークが春さんの頭の回りを飛んでいる。

「・・・君は僕のお気に入りだからね。ある程度戦える人間がい
ないと生徒会は大変なんだ。」

「・・・まあ、それは置いて、なんで亜美さんを犯人役にし
たの？」

ふふふふ

「時雨君、悪いが君を餌に使わせてもらったよ。」
「・・・なんて言ったの？」

「見つかったその日が終わりを迎えるまでに亜美を捕まえる事が出
来なかったら、時雨君が契約するといったんだ。さあ、早く春君と
行きたまえ。春君、君の力を見せてくれ、場合によっては亜美と出

番が代わるかもしれない。

「くそっ！」

『我は、悪魔と天使を罰する者』

辺りの時間が止まる。

「ちなみにチャンスは後一回だ。」

最後に剣治の声を聞き、動きのない空に飛び立つ。

・・・亜美さんは、いた！だけど動いてる！

「あ、時雨君。悪いけど逃げるね？」

再度、消えるような感じで逃げようとする亜美さん

『そして、我は魔界の王を志、悪魔』

瞬間、僕の紅い羽に蒼い色が混じり紫になる。

天空は紅く、地上は蒼に染まる。

・・・今度こそ勝ったみたいだ。

今、僕の腕の中にはキョトンとした亜美さんが捕まっている。

真夏のサンタを抱きしめ、契約を果たす。

「…………ご苦労様、亜美さん。」

「え、あ？しー君！ううっ！んん！」

剣治の所を飛びだって三分後、僕は真っ赤になった亜美さんを担いで学校に戻った。

「……いいかい、春君、時雨君に睨まれるとこどもが……」

「剣治！何言ってるの！」

「……本当のアンノウン・エンジェルか。」

本当？のアンノウン・エンジェル。

「……時雨君、女たらしの君には魔界に行ってもらい、魔王の首をもらってきて欲しい。」

え、今なんて？

「さらばだ、女好きの時雨君！」

その後僕は気絶してしまった。

そのじゅうなな 紅い空、蒼い地上（中編）（前書き）

時雨がちよつと羨ましいような可哀相な事態におちいります。今回も後書きありません。

そのじゅうなな 紅い空、蒼い地上（中編）

辺りは静寂に包まれている。

空は紅く、地上は蒼い

そこには生氣を感じさせる生き物はいない。地上はゾンビが徘徊し、

「あ、奥様聞きました！この前『ゾンビでもまだ痩せれる！』という番組があってましたの！」

空には、吸血鬼が舞っている。

「スーパー『血痕』、タイムサービスだよーっ！」

剣治がかなり前に言った 通りの光景がひろがっている！

「…………その悪魔の兄ちゃん。目障りなんだよ！」

「あ、すいません！今どきます！」

「ああんっ？気にくわねえな。その態度。」

・・・不良に絡まりました。

どうする？

戦う

戦う

戦う

戦う

・・・魔界のコマンド一つしかない！

「おい、あの不良。・・・噂のあいつだろっ？」

「ああ、悪魔キラーかなんかだろっ？」

・・・悪魔キラー？

「・・・死ねやっ！にーちゃん！」

「ごめんなさい！」

ぐしややあ！ぐしやあ！

「お、おい見たか！たった二発で原形留めてないぞ！」

「やべっ！あいつ人間じゃねえ！」

「俺達も人間じゃないけどな！」

「取って食われるぞ！みんな、にげろ！」

だだだだだだだだだだっ

辺りは静寂につつまれている。

「……ちよっとやりすぎたかな？」

時雨の回りには誰もいない。いるのはさっき襲ってきた不良さんだけである。

この町を出ようとするのと一つの人影が時雨の前にでてきた。

女の子であった。紅い眼で必死に時雨を睨んでいる。身長は時雨と同じぐらいで肌の色が青白い。見た目からして身体は弱そうである。……何となく美人薄命と言う言葉が似合いそうである。

「……あのう、僕に何か？」

「……や、やりすぎじゃないんですか！」

後ろからは先程居なくなった野次馬達が叫んでいる。

「おい、嬢ちゃん！そいつは危険だ。離れろ！」

……まいったなあ。どうすればいいんだろう？

当然、時雨は女の子に対して弱い。てか、誰が相手でも優しい。

「あ、あなたは何でこんな事するんです？」

ここは魔界である。天使の能力が使えない時雨が悪魔になったのは無理はない。……悪魔の力を持っているのは千夏のほうである。

千夏の性格はかなりかわっている。寝ている相手にいたずらしたり、面白い物を見つけたら遊び始める。

そして、普段は出てこない千夏が……出てきた。

「……うひゃ！かわいいーね！」

時雨の体に乗っ取った千夏は早速悪魔の女の子に抱き着き触り始める。

「きやつ！やめてください！」

千夏は止まらない。

「ええじゃんか、姉ちゃん減るもんじゃないだろう。」

セクハラ親父だ。

「お、なかなか大きい。時雨が聞いたら喜ぶぞ！」
啞然とするギャラリー。

少年がいきなり少女になったからビックリするのは当然である。

「……ううつ、やめて……誰か助けて。」

助けを求める少女。だがギャラリーは動かない。

助けを聞き付けたのは時雨であつた。

「……ちよつ、まで、時雨。わかった。わかった。」

千夏は少女を話し中にいる時雨に話し掛けた。

「わかった！わかった！私が悪かった！謝るから。」

その後、千夏は少女に謝罪して理由を話した。

「・・・なるほど」

「・・・ごめんね？後で時雨も謝りたいらしいから。」

「いえ、いいですよ。私が勘違いしただけだから。」

千夏は最後に中で暴れまくった時雨に仕返しを思い付いた。

千夏は悪魔の少女に抱き着き、時雨の意識に代わった。

「あ、あの時雨さんでしたっけ？やめてくれませんか？」

その後、時雨が何回も何回も頭を下げたのは言うまでもないかもしれない。

悪魔の少女の名前はアスルというらしい。

「・・・ごめんなさい、アスルさん。」

あれから少し経った今も時雨は謝っている。

「・・・わかりました。だから謝らないで下さい。」

「じゃあ、何か手伝います！」

「？変わった悪魔さんですね。」

悪魔は基本的に誰かを助けようとしならしい。

「だけど、さっき『あぶないぞ』とおじさんが言ってますでした？」

「悪魔は警告までします。だけど、助けてはくれません。」

「……それを知ってなぜ、アスルさんは僕の所にきたんですか？」

「……私は体が弱くて力も弱いんですが、誰かが痛みを感じているといじめている人を助けたくなるんですよ。だけど、いつも『うつせーボケが』と言われて突き飛ばされるんです。」

「いじめている人をたすけたくなる？」

普段はいじめられている人を助けるのではないのだろうか？

「いじめている者を優しい性格にすればいじめられる者は居なくなります。」

「……ええ娘やあゝ。」

「……じゃあなんで千夏姉さんがアスルさんに抱き着いた時、助けてといったんですか？」

あ、固まった。

「そ、それはですね。悪魔の中にも助けてくれる人がいるかもしれないと思ったからです！」

しかし、結果は。

「・・・助けてくれる人、いませんでしたね？」

首を振るアスルさん

「いえ、いましたよ！助けてくれた悪魔が！」

「・・・何処ですか？」

「あなたですっ！」

ちなみに僕は罪人天使です。あ、でも悪魔の力使ってるな？

「・・・でも、僕は何もしてませんよ？」

再度、首を振るアスルさん。

「嬉しかった。今日は家に泊まって行ってください。」

案内された家は豪邸であった。

「お父様！今帰りました！」

扉を開け、大きな声で叫ぶ。

「・・・アスルさんのお父さんは何してる人なの？」

顔を赤くするアスルさん。

「・・・恥ずかしいですが魔王という仕事をしています。」
魔王Ⅱ魔界の王様

アスルさんは王様の娘。

魔界のプリンスじゃなかったプリンス。

プリンスに抱き着いた僕は・・・。

悪魔による断罪

そんな事を考えているとお父様とやらがでてきた。

「・・・お友達かい、アスル？ いやーハデスが人間界に行っちゃったから淋しいだろう？」

ハデスのば、ぱばさん！

あっちも僕に気が付いたようだ。

「おや、時雨君じゃないか。魔界にきてたのか。」

「え、はい。実は友人に頼まれ物をされました。」

・・・貴方の首を貰ってこいといわれました。

「そうか、大変だな。で、時雨君どんな物を頼まれたのかな？ ハデスを助けたお礼として私が用意しよう。」

言えない、貴方の首が欲しいなんて。

ここで困っている僕を助けてくれる救世主が隣にいた。

「・・・お父様、時雨君に泊まってもらったらどうでしょう？」

「おお、そうだな？時雨君、君に話したい事があるから後で話そう。・・・しかしアスルよ時雨君とどうやって親しくなった？」

抱き着いたら仲良くなりましたなんて口が裂けても言えない。

だが、僕の期待はむなしく心の中にこだました。

「えーっと、時雨君が私に抱き着いて来ました！」

アスルさんは嘘をつけない性格だろうなあ。これで間違いなく題名は『ハレンチ・エンジェル』にかわるかな？

パパさんは僕を穴が開く程見ている。

「・・・時雨君、なかなかやるな。まあ、今日はゆっくりしてなさい。」

お咎め無しかな？

「・・・晩御飯を食べたら処刑台のある中庭に来てくれ。そこで話をしよう。」

アハハ、短い運命だったかな？

そして約束の時間。

料理は普通の物だったが緊張のあまりすすまなかった。
最期の晚餐か。

中庭は静かな所でギロチンが冷たく光っていた。

・・・僕の血が付くのも時間の問題かもしれない。

「時雨君、君に頼みがある。」

続きは『死んでくれ!』かな?

「マオウを倒してくれ!」

え、あなたじゃないんですか?

近頃、この近くをマオウと言う魔族のドラゴンが暴れているらしい。

「なんでマオウなんて名前なんですか?」

「私がそのドラゴンを退治しないから住民達が『魔王でも倒せないドラゴン』といっているからだ。」

「なんで倒さないんですか?」

「倒す努力はしたんだが、失敗したんだ。言い訳にしか聞こえないかな?」

パパさんは紅い天空を指差しこう言った。

「今、君は悪魔の力しか使えない。しかし空に昇り、祈りを捧げれば罪人天使の力が使えるだろう。」

更に続きを言う。

「・・・悪魔と天使の力を持つ、完璧なアンノウン・エンジェルになれるだろう。」

まただ、剣治も似たような事を言っていた。

「時雨君、マオウを倒してくれないか？」

僕は頷き、先程まで勘違いしていた事を謝る事にした。

「・・・すいません、実は先程友達から頼まれ事をしたといったでしょう？友達は魔王の首が欲しいと言ったんでてつきり、僕マオウの首を魔王と思いました。」

ふふふふつ。

「そうか、だが君は出来なかったわけだ。」
もう一度謝る。

「すいませんでした。」

「いいよ、魔王の首は手に入らない事はその友達も知ってるだろう。今日はもう寝なさい。」

案内された部屋の前でパパさんは一言。

「色々頑張ったまえ。」

「？はい、わかりました。」

部屋の中に入り、早速ベットに入る。

「へえー！お客さんの部屋にしてはでかいと思うけど、ここが豪邸だからかな？」

時雨は勘違いをしていた。

扉が動き、アスルが時雨のいる部屋に入ってきた。

「し、時雨君？何してんの私の部屋で？」

「え、ここアスルさんの部屋なの！案内されたから寝てたんだよ。ぼ、僕は違う所に行くてくるよ！」

アスルは何か考えている。

「・・・なるほど、お父様が甘えなさいと言ったけどそういう意味ね。ハデスも時雨君の隣で寝たと行ってたし・・・」

更にぶつぶつ一人で言っていた。

時雨は黙って部屋からでようとしたがアスルの隣で腕を掴まれた。

「・・・時雨君！私、一人で寝るの怖いの！一緒に寝てくれないっ？」

その目は凄いい気迫だった。何をされるかわからない。

勇気をもってNOと言おう！

時雨は学校でそんなポスターをみたのを思い出した。

黙っている時雨を見てアスルは悲しそうな顔をして時雨を見上げた。

悲しそうな顔をされると相手がどんなにかつい人でも時雨は話し掛けてしまう。

だが、今日の時雨は色々悪い事をしたと感じていたので首を横に振ろうとした。

アスルは最後の作戦を発動させた。

「・・・ハデスはいいのに私とは一緒に寝てくれないんですか？
・そんなの不公平ですっ！」

幼き頃の時雨は食べ物はずっと半分こしていた。そうしないと蕾が小さいのに

「不公平だよ！」

と叫ぶのだ。

昔の古傷を触られたような感じになった時雨はアスルに負けた。

「・・・わかりました！隣で寝ます！」

だからお前はアホなのだ！とどこからか聞こえてきそうである。

ベットに入り出来るだけ距離をとった時雨はベットが大きかった事に感謝した。しかし、アスルは許してはくれなかった。

「・・・時雨君、こっち来て下さい。怖いのは嫌です。」

「・・・・・・・・。」

時雨は必死に目をつぶり寝たふりをしていた。

「・・・・・・・・時雨君、もう寝たんですか？」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

アスルさん寝たかな？と思った時雨は少し甘かった。

「・・・時雨君、怖いよ。」

時雨のすぐ後ろで聞こえるのだ！

時雨は今度は必死にお経を唱えた。相手が悪魔だったので効果はなかった。

「時雨君！」

「・・・・・・・・！」

遂に捕まってしまった。

「えへへ。捕まえたっ！」

その瞬間、時雨は気絶寸前の恐怖を味わったらしい。

ムギユウ。

柔らかな感じがした。

狸寝入りをしていた時雨は遂に言葉を発した。

「……………うわぁ！」

なんとも情けない悲鳴である。

アスルは時雨にくつついたまま喋る。

「時雨君、私が怖いと言ったのに無視したんだ！」

素直に謝る時雨。

「ご、ごめんね？ なんとなく恐かったから。」

笑うアスル。

「うふふー。素直な時雨君だー。優しいなー。」

時雨はなんか更に恐くなった。

「…………時雨君はハデスと契約した？」

「え、してないよ。あの子と契約したら変態だよ？」

「…………じゃあ、私がハデスより先に時雨君をゲットね？」

その情報が頭の中にすみわたるのに少し時間がかかった。時雨にとって致命的な時間であった。

「もうらい！」

「うわあ！んん！？」

手足をばたつかせていた時雨のむなしい抵抗が力尽き終わってしまった。

次の朝、時雨は少し疲れていた。そして現実逃避をしたのだった。

「・・・時雨君、よく眠れたかな？」

仕掛人だった魔王に時雨は声を搾り出すように答えた。

「・・・悪夢をみました。・・・更にお化けも見たようなきがします。頭の中でお経を唱えましたが効果がありませんでした。」

「そ、そうか。」

それからマオウを倒す準備をして一人出発する事にした時雨。
「たのんだぞ！時雨君！」

ゲームの始まりみたいだ。王様からじゃなくてラスボスであろう魔王からの頼みだが。

アスルさんは朝が弱いそうだ。何となくホッとした僕は豪邸を後にして羽で飛ぶことにした。

ゲームだったら仲間がいるだろうが僕の友達はいないようだ。

「時雨君！待って！」

「う、うわああああああ！」

走り来る人影を無視して飛び立とうとした時雨はお経を唱えても成仏しない悪魔に捕まった。

「私も手伝うよ！時雨君のお陰で体が丈夫になったからさ！」

こうして、時雨とアスルは冒険に出たのであった。

「時雨君、仲間をまず探すんだ！ハーレムパーティーをつくるんだぞ！」

魔王が凄まじい事を言ったので時雨はマオウ狩りに不安を抱いた。

そのじゅうはち 紅い空、蒼い地上（中編）ぱーとつー（前書き）

中編の二回目です。今回はちよつと、千夏さんを出したいと思い、登場させています。すいませんが今回も後書きないです。次回マオウ編を終了させたいと思います！

そのじゅうはち 紅い空、蒼い地上（中編）ぱーとつー

アスルは時雨の背中に乗って空の景色を楽しんでいる。

時雨は朝の状態から復活。マオウが何処にいるか考えていた。

「アスルさん、マオウが何処にいるかわかりませんか？」

「うーん、やっぱりダンジョンの奥か、塔のてっぺんかな？」

なんてゲーム風なマオウなんだ。早く倒して人間界に帰ろう。

「けど、時雨君。二人じゃ無理じゃないかな？誰か誘おうよ！」

マオウ倒したい人はいないだろうな。

「それに動物とかにキビダンゴあげればついてくるよ！」

……桃太郎？

「やあ、困っているみたいだね？時雨君。」

声がした隣を見ると白い奴が飛んでいた。

「v○ンダム！」

アスルさんが叫ぶ。

「時雨君、僕が仲間になりたいが人間界で事件が起こってたからいいかないといけないんだ。仲間を探すなら下に降りて探したほうがいい。」

v○ンダムはそう言って去って行った。

「ねえ！時雨君！パイロットやっぱア○ロかな？」

「・・・うーん、多分僕の友達がア○ロさんから借りて来たと思う。」
それ以上時雨は謎のv○ンダムに触れようとせず、町に降りることにした。

その町は静かであった。

「・・・誰もいないね？」

いるにはいるみたいだが家の中とかに入っているみたいだ。

ぱきゅん！

時雨の足元に何かが当たる。

「・・・銃弾？」

飛んで来たほうには大きな時計塔があった。

「・・・アスルさん、僕たち狙われていますっ！」
「え、誰に？」

黙って時計塔のてっぺんを指差しながらアスルを庇う時雨。

時計塔のてっぺんを目指し、羽をひろげる。

「乗って下さい！あの塔のてっぺんにいきますよ！」

「・・・わかった！」

塔のてっぺんまでひとつとび。不思議な事に銃弾は飛んで来ない。

「ついたら辺りを探して下さい！撃って来た犯人を捕まえるんです！」

「わかったよ！私は右からいくね？」

二手に別れ、上から見たら円になっている廊下を歩き謎の襲撃者を探す。

時雨は走りながら辺りを見回していたので何かを蹴っ飛ばしてしまった。

どごしゃ！

「きゃっ！いったい。」

「あ、ごめんなさい！大丈夫ですか？」

直ぐさま駆け寄り怪我してないか確認する。

普通の人だったら直ぐに犯人だと思いその影を捕まえるだろう。だが、時雨は違った。

「あ、血が出てる！動かないで！今消毒して絆創膏はるから！」

「っ、痛い。」

「ごめんね、蹴っちゃて。他はどこか痛い所はないかな？」

相手は足を押さえている。

「ご、ごめん！ 足に当たったの？ 今から手当てするからね！」

不思議そうな顔をする相手。

「あ、時雨君！ 犯人見つかった？」

アスルが時雨と合流し、時雨に犯人がいたか聞く、そして時雨は当たり前のように打撲部分に湿布を貼ってから、

「いや、いなかったよ？ それがさ、この幼子を蹴っ飛ばしてさ。ビツクリしたよ。」

影の中にいた相手を引っ張りだし、アスルに見せる時雨。

その拍子に影の中にあつた何かが時雨に当たる。

それはゴル○13が持っているのにうりふたつの代物だったのだ。

「・・・時雨君、多分そのオチビさんが犯人だよ。」

「・・・そうみたいだね？」

時雨はオチビさんの目を見て話始めた。

「君が僕たちを狙ったのかな？ 僕は怒らないから答えてくれないかな？」

少しの間、沈黙がありオチビさんは答えた。

「・・・自分がやりました!」

いい事思い付いた!という顔でアスルは喋り始めた。

「ねえ、オチビさんあなたこの町の用心棒でしょ? だけど貴方は居場所を突き止められた。・・・これがどういう意味かわかるよね?」

時雨にはわからないがオチビさんにはわかったようだ。

「・・・何が望みだ?」

「私達の仲間になって欲しい。」

え、何なんで? 僕にはわからなかったなあ。

「・・・わかった。」

スナイパーが仲間になったらしい。時雨はそこまで理解した。そこで願った。 男! 男! 男! 男!

時雨の中に神様はいないが、それを確かめてくれる奴は存在していた。

時雨は話をしている二人の横で千夏と入れ代わった。(千夏が時雨の思っている事に対し、興味を持ったからである。)

一人悩む千夏。

(うーむ、この子厚い服着てるからわからんな。いっそ服をはいで膨らんでるか確認するか?・・・冗談だ、そんな事はしない。よ

し、手っ取り早い手段で行こう。」

話しているオチビの後ろに気配なく忍び寄り、後ろから確かめてみる。

「・・・・・・・・きゃっ！」

「な、何やってるの！時雨君！じゃない千夏さん！」

「はっはっはっは！時雨、残念！女の子だ！男の勲章がないぞ！」

「・・・・・・・・っつ！」

その後、千夏に確かめられた事で腹を立てたオチビさんはそっぽを向いている。

「・・・・・・・・自分は、男であります。」

千夏にいじられながらもオチビさんは答える。

頭を叩きながらニヤニヤする千夏。

「嘘つけ！時雨にけられた時に可愛い悲鳴だしてたろ？白状しな、ネタはあがってんだ。」

アスルは早く千夏が時雨になってくれないかオロオロしている。そして思い付いた。

「あ、あの、千夏さん外に面白い物が飛んできます！」

「え、どこどこどこ？」

騙されて探しにいった千夏がいた所にはポカンとした少女が残されていた。

アスルは少女の隣に座り話し掛けた。小声で言い終わった後に千夏が戻ってきた。

「あーあ、居なかったなあ。さーて、さっきの続きを聴こうかな？ オチビさん。」

少女は先程、アスルに教えてもらった呪文を千夏に向けて放った。
「・・・助けてっ、千夏さんに襲われるよっ！」

途端苦しむ千夏。

「・・・わかった、時雨！さすがにあればやばかったのは思ってるよ！ああっ！出番が・・・。全国の千夏ファンが悲しむ。」

二人が啞然としている間に千夏は時雨になった。

「・・・ふう、千夏姉さん、そんなにいないと思うよ？」

オチビさんと目があい、時雨はアスルの時と同じようにずっと謝っている。

「ごめんね！千夏姉さんが止められないんだ！」

「ああ、自分は大丈夫だ。」

「・・・そう？ありがと、御礼になにか一つだけお願い聞いてあげる。」

ふてきに笑うアスル。そしてオチビさんにこっそり何かを喋っている。顔を赤く染めるオチビさん。

「・・・アスルさん、何話してるの？」

「なあーんにも？」

時雨はやはり騙された。

「じゃあ、オチビさん何がいい？」

「・・・あああ、じゃあ、私の名前はキスだ！今日は一緒に・・・」

目でアスルに何かを訴える。

（じ、自分には言えません！）

（・・・試しよ！彼は約束守る人間かどうか試すの！）

「えーっと？何かな？」

「私、一人怖いから一緒に寝てくれっ！」

静寂が辺りを支配する。

先に喋り始めたのはアスルであった。

「・・・時雨君、まさかお願い聞いてくれないのかな？」

「・・・いや、いいよ？いいとも！」

・・・すでにヤケクソ、キスを抱き上げ目を見る。

「・・・そんなに見ないで・・・。」

「・・・あ、ごめんね。もしかして君を雇ったのは・・・なんかへんな機械に乗ってなかったかな？」

これが本当なら剣治の仕組んだ事であり、キスを仲間にする必要はない。

「・・・うん、それがどうしたの？」

（やはりそうか！）

「じゃあ、何かもらわなかった？」

ビククリしているキス。

「・・・ああ、誰かに聴かれたら渡してくれて言われた。」

渡された紙を眺める。

『時雨君へ』

次のうちから最低三人は選ぶ事。ちなみにずるして今の三人でマオウを倒そうとしない事！

看護婦 女戦士 僧侶

OL 女子高生 大統領

ロリ ツンデレ 女騎士

水着ギャル e t c

ぶっちゃけ男は仲間になってくれません。

人間界にいる人達には助けてくれません。

剣治。』

(・・・いたずらしすぎ。僕が何をした?)

『追伸 君の好み通り年齢は君と同じか君より幼い。 頑張ってくれ。ちなみに町人とかに話し掛けても以上の事を守れば仲間になってくれます。』

(・・・追伸ながっ!)

「・・・どうしたの? 時雨君?」

「な、何でもないよ?」

(・・・僕より幼い子じゃ無理な職業があるぞ?)

「じゃあ、そろそろ寝ようか? 時雨君?」

「まだ寝るには早いよ?」

「・・・魔界には夜や昼がないのだ。体が休める時は休まないと魔界では生活出来ないんだ。」

アスルにそのまま押し倒され今日の冒険終了!

しかしアスルが時雨に抱き着き直ぐにねてしまい時雨は一人で寝

ようとした。

「・・・私との約束を破るのか？」

振り向くとキススが起き上がり時雨の服の裾を掴んでいる。

「・・・いや、三人で寝るには狭いかなあ？と思ってね。」

「じゃあ私も連れていけ。約束は守る物だろう。」

「・・・そうだね？僕が悪かったよ。」

キススを抱き上げ別の場所に降ろす。

「・・・なあ、時雨。甘えてもいいか？」

時雨は懐かしい感じを覚えていた。

「・・・ああ、いいよ。」

・・・ぴとっ。

他の人とは違いくつつくだけのキス。

「・・・無理しなくていいよ。」

「それは私が女だからか？」

仲間にする事は多分決まった事だろう。

「・・・いや、君が僕の仲間だからだよ。」

「・・・そうか、ありがとう時雨。・・・仲間には話しておこう。」

私が女っぽくないのはなめられるからだ。・・・今日だけでいいからもっと甘えていいか？」

「・・・うん、大変だね？甘えたいならいつでもいいよ。」

・・・ムギユ。

「・・・時雨は温かいな。」

「・・・ありがとう。」

（僕は、僕は、僕はロリコンじゃないっ！・・・多分。）

次の日、時雨は二人にあと最低三人仲間がいたほうがいい事を告げた。

「・・・後三人か・・・しかし今回で集められるか？」

「・・・キスが気にすることないよ。」

キスがいた町を出て、今は森を歩いている。

「・・・。。。。。。。」

時雨はどんなのが仲間になるか不安であった。

「時雨！魔物だ！スライムだ！」

スライム どんなゲームにも登場するモンスター。

だが、ここは違う。

「……見た目普通の人間だあー！あれのどこがモンスターなんだ？」

魔界初めての時雨は二人に聞いた。

「え、本人に確かめれば？」

「……わかった！行ってくる！」

モンスター？な人影に話し掛ける。

「……あのーっ、あなたは魔物ではありませんよね？」

後の祭り。それを感じたのはやはり後の事であった。

「……はいっ！私は魔族です！魔物ではありません！違いのわかる貴方の後についていきます！」

（……ま、なんにせよ、後二人だな？）

スライムは先程から時雨にべったりだ。……だからスライムという名前になったからかもしれない。

「ありがとう！時雨く〜ん私ずーっと引っ付いてるね？」

残りのアスルも時雨にべったり。もしかしたらスライムになれるかもしれない。

一人時雨達の後ろから歩いてくるキシスはいたって冷静。

「！時雨、少し前に凶悪な顔をした物体がいるぞ？撃っていいか？」

優しい時雨は首を横に動かす。

「駄目だよ、勝手に撃って怪我させたら大変だ！」

「しかし、スライムが勝手に仲間になってからずーっと魔物を見つける度に迂回しているぞ？」

（だって、もし……仲間になったら大変だ。ここは慎重に行動しないと。）

「時雨！今回までにこの話を終わらせないと作者が大変だ！」

「キシス！作者をだしちゃだめだ！……僕は、出会いは大切だと思っただけだから、残りの二人は今度ですよ！」

「……わかった、悪かったな作者を出して。」

「いいよ、わかってくれたから。」

（残りの仲間はどんな職業かな？出来ればまともな職業がいいな？）

（まともとはどんな職業ですか？時雨様。）

（うーん、そうですね、メイドさんとか……。いや、メイドさんは違うな？まあ、読者の皆さんがビックリするような職業がいいかな？）

（……。かしこまりました。時雨様。この執事に任せていただきます。）

「時雨、先程執事がお前を見て笑っていたぞ！」

（……。やってしまった。僕はかなりやばい人に心をよまれたみたいだ。）

ぼうっとしている時雨の体に乗っ取るのは簡単らしい。

「……。はあ、皆のアイドル！千夏参上！」

「し、時雨君がいなくなった！どこいったのー時雨君！」

スライムはどこかにさっていった。

「今回は私が最後まで閉めたいなあ！」

びびる二人。

「ち、千夏さん。何するんですか？」

「・・・大丈夫だ！アスル！君達には戦ってもらい、レベルをあげてもらおう！今回はあーるぴーじーみたいだからな！」

「・・・千夏は戦わないのか？」

不意に笑い出す千夏。

「・・・ははっ！キスス、口が悪いな。千夏お姉様と言いなさい！このモチツキペったん！」

キススの胸をパンパン叩く千夏。

キススは千夏が時雨になる不思議な呪文を唱えようとしたが口を塞がれた。

「・・・へっへっへ。甘いな。今回は言う事聞いといたほうがいいぞ？そしたら時雨にキススはいいやつだからご褒美くれてやれって言ってもいいぞ？」

「・・・むぐっ、私はご褒美など欲しくない！」

更にあくどい顔で笑う千夏。

「・・・時雨は優し過ぎる奴だからねえ？なんでもしてくれる。・・・甘えようと思えばいつでも受け止めてくれるからね。」

「あのっ、スライムは追い掛けなくていいんですか？」

「いいかい、アスルちゃんあいつは男だ。」

「・・・男？・・・」

頷く千夏。

「追い掛けて・・・好きなようにしてしまっていていいよ。あいつは金品を狙っていたからね。」

慌てて走り去るアスル。

「さて、キシスは私の言う事聞くかなあ？」

千夏の顔はかなり怖い。

「わ、わかった！わかったから顔を近付けなしてくれ。千夏姉様！」

途端かなり可愛い顔になる千夏。

キシスはその時、千夏と時雨がダブって見えた。・・・実際、時雨と顔は一緒なのだが・・・。

「うん、キシスはいいい子だ！よしよし。・・・ここで私の秘密公開！体形は

スレンダーですっ！残念ながら・・・。体重は時雨より1キロ重い53.6です。

好きな食べ物はヨーグルト。嫌いな食べ物は魚です！尊敬する人はシャ○・アズナブルと聖徳太子ですっ！好きな色は赤。嫌いな色はオレンジです。後なんかないかな？」

そのじゅうきゅう 紅い空、蒼い地上（後編）

辺りには千夏の笑い声とキシスの叫び声が支配している。

「ぐえっへっへっ！よいではないか！よいではないか！」

「キヤーー！さわんないでよーっ！」

スライムを倒しに行ったアスルが帰って来るまで千夏はキシスで遊ぶ事にしたのだ。

「たすけて！時雨！」

突如、キシスにいたずらしていた千夏の動きがぴたっと止まり変化が訪れる。

「・・・くっ、時雨！暴れるな、ああつくそーっ！

我が生涯に一片のくいなーし！」

「・・・千夏姉さん、貴女がたまに恐くなります。」

溜息まじりに呟く時雨と助かった事にホッとするキシス。

「・・・キシス、ごめん。毎度毎度千夏姉さんが暴れちゃって・・・」。

キシスは千夏が言っていた事を試したくなった。

「・・・別にいいぞ。時雨、あの頼みがあるんだが聞いてくれないか？」

「ああ、何？」

少々もじもじしながら答えるキス。

「・・・その、なんだ。」

『おんぶ』してくれないか？」

首を傾げる時雨。

「・・・おんぶ？別にいいよ。」

時雨の背中に乗るキスと狙撃銃。

「・・・やはり、時雨の背中は落ち着くな。」

「ありがとう。アスルさんがなかなか来ないね？」

すると林の中からアスルが飛び出してきた。

「・・・千夏さんは？」

「いないよ。」

実は千夏が居なくなるまで様子を見ていた。千夏がいなくなった時点で出ていこうとしたが、キスが時雨に甘えている所を目撃し、何となく対抗意識とやらを燃やしていたのだ。

「・・・ねえ、時雨君。貴方は優し過ぎるんじゃないかな？」

さりげなくキスを背中から降ろして欲しい事を言うアスル。それに気が付いたキスは時雨の背中にしがみついた。だが、二人の心配をよそに時雨は気が付かない。

「・・・うん、よく言われるよ。僕のいけない所だと兄妹に昔言われた事もあるよ。・・・だけどね、これをなくしたら僕は僕じゃなくなると思うんだ。」

そして、時雨は苦笑しながら最後に付け加えた。

「・・・間違いなく、千夏姉さんがこの世を支配するよ。」

『おーっほっほっ！私を女王様とおよびー。ペッタンコは永久追放よ！』

高らかに笑う千夏が二人の頭を支配した。

「・・・時雨君、やっぱり君はそのままがいいよ。」

「うん、時雨は今のままがいい。」

「ありがとう、二人共！」

時雨達は新たな仲間を探しに旅立つのであった。

森を歩いていると

執事さんに

出会った

「・・・時雨様、連れて参りました。」

時雨が間違い？で頼んでしまった事である。

「それではっ！一人目をご紹介しますよう！」ダララララララララッ

デンッ！

「・・・一番、キシスさんのお姉さん、オルフェルさんです！職業は図書館の受付係です。性格はボケボケそして優しい。時雨様より一つ年下です！」

「ね、姉さんなんでこんな所にいるの？」

出て来たオルフェルに時雨の背中から尋ねるキシス。

「いやー、キシスだってさあ時雨さんの所に私の妹がいると言われたら誰でもいくよ。」

時雨は固まっている。

「・・・なんで、君がここにいるの？」

ニ、三步退きオルフェルを眺める。

「時雨君、あの人と知り合い？」

アスルは今でも後退している時雨に問い掛ける。
質問に答えたのはオルフェルであった。

「・・・私はね時雨さんの元彼女よ！」

「なあーんだ『今』じゃなくて『元』か。よかった！」

「そうだな、姉さんが時雨の彼女じゃなくてよかった。ところで姉さん、時雨をふったのか？」

優しい時雨が女の子を振ろうとは思わないだろう。

二人はそう思っていたが意外に時雨から振ったらしい。

これは時雨が語った蕾が知らない事である。

「・・・彼女は以前友達の少なかった僕に出来た初めての友達だったんだ。・・・それで僕から付き合っただけだ。・・・」
「彼女は頷いてくれた。次の日から登校するのも一緒、お昼も一緒だった。・・・いたって普通な人だった。・・・それが段々エスカレートしてきた。勉強中でも僕にべったり、家に帰り寝ていると夜中に僕の隣にいるんだ。耳元で『私は貴方の全て。』と夜中ずつと言ってくるんだ。怖くなって彼女を避けていると・・・」

震え出す時雨。そしてそれを見守る残りの方々。

キスにいたっては時雨の肩の上に頭を乗せている。

「・・・犯罪を侵すようになったんだ。夜道を僕が一人で歩いていると物影からタオル一枚で飛び出して来て『私は貴方の物よ！好きにして！』と言いながら追い掛けて来るんだ。更に銀行に強盗に入った事もあるんだ。理由は『時雨さんがやれって言いました！』といったらしいんだ。」

うわっ！この人こえー。

時雨が別れて欲しいと言ったのもわかるかもしれない。

「・・・でも、時雨君は真面目だし、優しいから大丈夫だったでしょ？」

「う、うん時雨は優しいし、約束を守るから流石に姉さんが悪者になっただけじゃないか？」

首を振る時雨。そして執事に告げる。

「・・・その人を今すぐガムテープで縛り上げて宇宙に飛ばしてくれっ！ソロモン海域辺りまで飛ばせば大丈夫だから。・・・最後に

コロニーレーザーを発射しといってくれと剣治に言ってください。」

「・・・かしこまりました。時雨様。」

オルフェルをリムジンに乗せ去って行く執事。

「・・・番長だった僕を信用してくれたのは全校誰もいなかった。それに比べ彼女は全校生徒の憧れの的だった。・・・実はまだ、彼女はもっとひどい事をしたんだ。僕を監禁したり・・・後は話せない。」

二人はかなりビククリしている。特にキスにいたっては愕然としている。

「・・・あの頃楽しそうにしていたのは時雨をいじめていたからか。」

「・・・時雨君・・・」

時雨は最後に言った。

「・・・だから、別れたんだ。そしたら少しだけ友達が出来た。」

むごい、むごすぎる。

「じゃあ、雰囲気変えるためそろそろ行こうか？マオウを倒しに。」

（あれ？マオウを倒すには仲間が必要だったんじゃないののかな？）

「時雨君、仲間は？」

「・・・戦死したじゃだめかな？」

時雨は早くマオウを倒したかった。

「・・・うん、わかった。ところでマオウの居場所しってるの？」
おもむろに携帯を取り出し誰かに電話をかける。

「あ、剣治かな？仲間そろったからマオウ倒しに行きたいんだ！・・・
今居る所から右にいけば会える？なんで僕たちがいる所がわかるの？・・・え、お約束？」

電話をきり、二人に話し掛ける。

「・・・さ、アスルさん、キシス、行こうか、マオウを倒しに。」

「うん！」

「ああ」

林の中に入り進む。

辺りは段々暗くなっていき、鳥が泣く声も聞こえなくなる。

「し、時雨君。マオウだ！」

アスルが指差す所には・・・大きな龍が眠っていた。

（・・・よかった、真面目な龍だ。スライムみたいに人間だったら
どうしようかとおもったよ。）

「・・・時雨、早く倒そう！まだこれは『幼体』だ。『成体』にな
ったらお前には倒せない！」

「わ、わかったよ！みんな、総攻撃だ！」

二人が色々攻撃をしている間に魔王さんに言われた事を試す。

『我は、記憶のピースを求める罪人!』

魔界では使えなかった罪人天使の力が時雨に戻り、空はもっと紅くなり地上も更に蒼くなった。

一方、マオウと戦っている二人は全く歯がたっていなかった。

狙撃してみるが皮膚には傷一つ入らない。

「・・・アスル、傷ついたか？」

「駄目だよ、ツルツルお肌のまま。この艶とはり羨ましいよ! どうしたらいいのかな？」

「・・・いつそモンスター○ールかなんかで捕獲するか？」

「・・・弱らせないとボールにはいけないよ!」

そんなやりとりをしていると紅い光が二人の前にふり注いだ。

「・・・!これはなんだ？」

上から高らかな声が聞こえてくる。

「・・・オーッホッホッホ!・・・真のアンノウン・エンジェル千夏様
参上!この世は私の為に存在しているのよ!」

最悪な展開だと二人は思った。だが、不安をよそに千夏は龍に剣
を向けた。

辺りの木々が無くなり、紅い光が更に森を包む。

千夏の背中からは綺麗な紫色の羽が生えている。

そして、右腕には紫の剣、左腕にはハリセンを持っている。

『千夏姉さん、もういいだろう?僕が倒すよ!』

二人がビククリしている。無理もない妖精サイズの時雨が空を飛
んでいるのだ。

「・・・か、かわいい。連れて帰ってペットにしたい。」

「・・・私も、欲しいな。どこに売ってるかな?」

「わかった、時雨。今回の私の出番はこれでいいだろう。」

意識が時雨になり、時雨は黙って剣を振り落とす!

「・・・・・・・・・・!」

龍に剣が突き刺さり周りが紫の光に包まれる。

「・・・おめでとう、時雨君。」

龍の体を掴み引っ張っている剣治は時雨に労いの言葉をかける。

「・・・剣治、この龍は・・・もしかして僕のパンドラの箱に入っていた奴？」

頷く剣治は笑っている。

「そうだよ、千夏さんと一緒にパンドラの箱に入っていた片割れさ。ちなみに・・・いや、なんでもない。それより時雨君、気絶している二人に別れの挨拶はしたかな？アスル君はもうなくていいだろうけど、キシス君にお別れの・・・挨拶はなくていいかな？」

「・・・そうだね、不公平かな？」

気絶しているキシスの隣にすわり、顔を近づけ・・・別れの挨拶をする。

戻ってくると剣治は久しぶりにみるニヤニヤ顔をしている。

「・・・時雨君も犯罪者の仲間入りか。」

「・・・うるさいよ。じゃあ帰ろうか？剣治。」

剣治は動かない龍の口の中に入り何かを探している。

「・・・ねえ、その龍どうするの？」

「・・・秘密！」

口から出てきた剣治はまた龍の中に手をつっこみ、なにかを出した。

「どこでも〇アー！」

「・・・そこ、ポケットじゃないよ。剣治。」

「ノリが悪いなあ、時雨君は。」

ドアを開け中に入る剣治と時雨。・・・と動かない龍。

潜った向こう側は人間界、夕焼けの生徒会室だった。

「・・・時雨君、今日は帰りなよ。疲れてるだろうから。」

「・・・わかった、魔界にはまたいけるかな？」

「・・・君が望むならね？」

校門で別れて家に帰宅する時雨。

元気よく帰る時雨は帰り道で美奈と蕾に見つかり、抱き着かれた。

「・・・に、兄様ー。」

「・・・時雨様ー。」

不意をつかれた時雨は道路に倒れた。

「・・・まま、お兄さんが襲われてるよ！」

「あれは違いますよ。」

「あなたもいつか彼氏が出来たらしてあげなさい。」

「はい！」

恥ずかしくなった時雨が二人を抱えて急いで家に帰ったのは間違いない。

「……僕がいなくなってどれぐらい経つの？」

二人に話し掛ける時雨は少し心配顔である。

「一日ですよ。」

（たったの一日だって？）

「いなくなった兄様を探してたら剣治さんから電話があってね、明日には天空の城 ラピュ○から帰って来ると言ってたんだ。」

「心配しましたよ！古代兵機にやられてないかオロオロしてました。」

「ところで、美奈さん大丈夫？僕がいなくなって体に変化はなかった？」

（たしか僕はが魔界に行く前は二日酔いだったはずだ。）

「いや、キャベジ○を飲んだら治りました！」

（まあ、とりあえずはよかったかな？）

「時雨様、今日は時雨様の大好きなハンバーグですよ！」

「ほんと？ありがとうございます。美奈さん。」

「いえ、ほんの……お礼ですっ！今の私がいるのはご主人様のお陰です！」

蕾がなんとなく冷たい視線を時雨にプレゼント。

「・・・兄様、晩御飯が出来るまで勉強を教えてくださいませんか？」

「え、うん。いいよ？」

時雨は疑いもなく蕾の後についていった。

さすがの時雨も蕾の不機嫌さをわかっていた。

（・・・やっぱり、蕾達に天界の事や魔界の事を話さなかったのが
まずかったかな？・・・謝ろう、許してくれるかわからないけど。）

「兄様！あの、私にこの前した事を覚えていますか？」

（・・・何かしたかな？蕾の大好きな牛乳を飲んだ事かな？それ
とも一緒に寝てた時ベットから寝ぼけて落としたことかな？後、・・・）

時雨は必死に考えを巡らしている。それを見た蕾は時雨が寝ぼけて
やった事と確信。

「兄様、覚えてないの？」

何となく罪悪感がある時雨は更に頭を早く回転させる。その速さは
赤い○星と互角だったらしい。

「兄様！どうなの？」

（うーん、うーん。）

「兄様！」

蕾の顔は悪魔のようだ。時雨はそう感じたらしい。

「・・・ごめんね、蕾。該当する事柄が多くてわからないや。」

俯く蕾。それを見て慌てて何か考える時雨。彼の必死さは夏休み最後の一日で全ての宿題を終わらせる勢いである。

ぺかーん！

時雨の脳内電気が点灯。

「蕾！蕾に僕が何したか思い出す方法を考えついたよ！僕が何をしたか簡単に僕にしてみて！」

当然、戸惑う蕾。

「・・・ほんとにいいの？」

「うん！いいよ！おまけつけていいよ！」

そして目をつぶる時雨。

（大丈夫だ。さすがに蕾なら僕を病院送りにしないだろう。）

「・・・じゃあ、再現するね？」

（・・・くるなら・・・こいつ！）

ムギユウ！

「!？」

「・・・兄様！私はあなたの妹でずっと・・・ずっといたい！これは、これは悪魔の罰だよ！・・・私が妹じゃ駄目かな？」

「・・・ありがとう、蕾。・・・僕はうれしいよ。これからもよろしくね？」

「・・・うんっ！」

ここで美奈さんの声が聞こえてくる。

「二人共ごはんですよ。」

「「はい。」」

「いこっ！兄様。」

「うん、行こうか。」

二人は晩御飯を求め部屋をあとにした。

静かになった蕾の部屋には実はもう一人いたのだ。

「・・・ふむ、なかなかいいドキュメンタリーだった。・・・今度の文化祭で発表するかな？」

生徒会長である。

晩御飯を食べた時雨は美奈さんにあの事を聴きに行く事にした。
「・・・美奈さんは人形だったんですか？」

ベットに乗っている美奈に尋ねる時雨。

「・・・はい、私は冥土ではなく人形パペットでした。執事さんと一時契約をした私は時雨様の冥土として働きにきました。・・・人形は相手、つまり主人にどのようなようにされたかによって性格が変わります。酷く扱われたら・・・本物の人形みたいになってしまいます。」
そこまで喋り、息をはく美奈。

「・・・不安でした。私が創られて知っている人形は全て、壊されてしまったり棄てられたりしました。・・・私は試作品なんです。だから私には誰も主人がいませんでした。」

時雨を見る美奈の目には涙がうかんでいた。

「・・・だけど、時雨様は私を大切に扱ってくれた。十年ぐらいしか動かないはずの私を少し期間が延ばしてくれました。」

「・・・だけど僕がいなくなってなにかが美奈さんをおかしくしたのかな？」

静かに頷く美奈。

「・・・居なくなってから私は混乱しました。人形は主人がいないと・・・駄目になるんです。だから私は蕾様を新しい主人にしようと思ひ、普段通りに接する事にしました。」

(・・・)

「だけど僕がかえってきた。」

「そうです、そしたら私は急におかしくなりました。・・・末期

症状になり、どんどん幼くなりました。」

「……. けどお酒のんでませんでした？」

「あれは、まあ、投げやりになりたかったんです。

自分はやはり試作品だと感じました。普段人形はかなり耐久性があります。私の場合は壊れる瞬間を待ただけでした。……. けど時雨様は私を助ける為に契約までしてくれました。……. 嬉しかったです。」

抱き着かれながらも時雨は罪悪感にまた、襲われていた。

「あの、美奈さん…….」

涙を流しながら叫ぶ美奈。

「いいんですっ！私……. 時雨様の近くにいただけで構いません。それだけでいいんですっ。剣治さんに契約すれば人間になれる事を聞いて試してもくれました！私はそんな時雨様と一緒にいたいですよ！」

時雨と美奈は互いに勘違いしているようだ。

「……. 美奈さん、苦しい！死にます！柔らかい何かが僕の顔に当たってますっ！」

「あ、す、すいません！時雨様！」

時雨が美奈に運ばれて行った後、やはり剣治が現れた。

「……. 時雨君はよく女の子を泣かすなあ。」

時雨の運命は廻る。

自分を守る為、そして約束を守る為に・・・。

そのじゅうきゅう 紅い空、蒼い地上（後編）（後書き）

なんとなく、今回で終わりそうですね……。さて、今回の長い冒険どうでしたか？楽しんでもらえたらしいです。……。後、評価してもらえたかなり嬉しいですが……。次回は二十回記念と一つの節目にしたいと思います。

そのにじゅう さよならっ！かな？

「・・・やってきました！第二十回記念！司会は生徒会長の僕がしていききたいと思います。」

「・・・剣治、僕は？」

「時雨君はあっちにいつて結構だ。」

「酷！」

「・・・さて、まず始めにお礼の言葉を述べたいと思います！今まで見てくれてありがとうございます！」

「・・・剣治、もしかして今回で終わり？」

「・・・まあ、一応はね。機会があったらまた始まるかもよ？さて、今回の話しは時雨の過去・・・千夏さんとの記憶を見てみましょう！」

「え、もし今度始まるならもうちょい普通の人達に出てほしいなあ。」

・・・

「時雨！遊ぼうか？」

時雨がまだ、蕾の兄になるまえの話である。

「・・・無理だよ、千夏姉さん。まだ宿題が終わってないよ！」

「後で見てあげるからさ！じゃあ、今日は走り幅跳びで遊ぼうよ！」

「・・・走り幅跳びは競技だよ。千夏姉さん。」

千夏は時雨の近所に住む時雨より三歳年上のお姉さんである。

「・・・じゃあ、あのお化け屋敷に行こうよ！」

時雨達が住んでいた所にはあまり人がおらず、千夏は小さい頃から時雨と遊んでいた。

「・・・僕、お化け怖いよ。」

千夏の家はおばあさんと二人暮しで時雨の家とは仲がよく、千夏は学校がない日は時雨の家に泊まっていた。

「大丈夫！私がいるからさ、時雨を必ず守るからね？」

千夏は時雨と遊ばない日はおばあさんの手伝いをしていた。そんな時は時雨も手伝いをするのだった。

「・・・だって、それじゃあさ・・・」

「何？私が約束破った事ある？」

「いや、千夏姉さんが約束を破った事はないけど・・・」

時雨は千夏とケンカをしても必ず負けていた。

「・・・何？時雨男ならはつきりしなさい！」

ケンカに負ける理由は簡単である。

「・・・僕を守ったら千夏姉さんがやられちゃうよ!」

時雨は千夏のパンチをもらいまくり、常にタオルを投げられている。

「・・・馬鹿ねえ、私がやられる訳ないじゃない。・・・時雨、その気持ちは忘れては駄目だよ?」

ダウンした時雨は千夏に抱えられ、千夏による看病を受けるのであった。

「・・・うん、分かった!約束だね!」

時雨は元気がある千夏にいつも振り回されていた。

「じゃあ、やぶったら私が時雨に不幸をプレゼントしてあげる!」

千夏は治る事がない病気にさいなまされていて、本人もそれを知っていた。だが、時雨だけは知らずに千夏と過ごしていた。

「・・・じゃあ今日は恋人ゴッコしようか?」

「それはやだなあ。千夏姉さん鬼嫁役になるから僕がこき使われるよ。」

「時雨が優しいからいけないんだよ!」

千夏は幼いながらも時雨の事を心配していた。

時雨はよく犬にからかわれ、千夏に頼っていたのだ。

「・・・だって、優しくないと駄目だと前、千夏姉さんが言ってたよ!後、約束を破る人は悪魔にさらわれてプロレス技かけられると言ったよ!」

千夏の影響を受けた時雨は約束を破る事だけにはかなり敏感に反応する。

「わかった！わかった！私が悪かった！」

変な所で真剣になる時雨は誰の言う事も聞かなくなる。

「・・・時雨、あのね、私いつか居なくなるんだ・・・。だからさ、時雨が誰かに騙されないか心配なんだ。」

この日、千夏は時雨に話し始めた。

「千夏姉さん、なんで居なくなるの！・・・僕といたら面白くないかな？」

「・・・いや、そういう事じゃなくてさ！・・・時雨、ちょっとこっち来てみて。」

「？ 何？」

「・・・いまから時雨と一緒にいれるオマジナイをかけるよ。・・・いいかな？」

時雨は躊躇なく頷き千夏の隣に行く。

「・・・目をつぶって、時雨。」

素直に目を閉じた時雨を千夏が抱きしめる。

「・・・時雨の初めてもらい！」

「千夏姉さん、さっきのなにかな？」

「・・・あれはね、契約だよ。時雨を助ける事ができるオマジナイ。」

「・・・オマジナイ？」

「そ、さっきいったでしょ。でも時雨を助ける為には時雨に何か罪をあげないといけないんだ。」

「・・・うーん、分かんないけどうれしーや！」

その数日後、千夏は静かに眠ってしまった。

・・・

「・・・暗いっ！」

「・・・本当に暗い話しだな！」

「剣治、なんか他に面白い事ないの？」

「えー、なんかあったかなあ？」

「・・・なんでもいいよ！最後なんだよね？」

「・・・いや、もしかしたらまた書くかもよ？」

「わかんないよ！出し惜しみしないでいいから！」

「・・・・・・じゃこれでいいかな？」

・・・・・・

これは蕾の心境の変化を記す物である。

『・・・・・・今日、兄貴が何となくボロボロになって帰ってきた。・・・聞いた話によると彼女にボコボコにされてしまったらしい。なんて情けない兄貴なんだろう。・・・・・・昔から兄貴は抵抗なく、誰が相手でもサンドバックになっていた。』

今日の分の日記を書き終わり私は晩御飯を食べに行った。

扉の向こうから、母さんと兄貴の話す声が聞こえる。

「・・・・・・時雨、あんたは変わってるねえ？反撃無しでいつも帰って来るからね。体をボロボロにされても誰にも復讐しない。」

「・・・・・・昔ね、誰かと約束した気がするんだ。『必ず約束守るよ！』と僕は言ったんだ。・・・・・・だから僕は誰も傷付けたくないよ。」

「・・・・・・そうかい、だけどどんな約束したんだい？」

扉の向こうは少しの間静かになった。私は扉を開け中に入る。

「・・・・・・あ、蕾。」

兄貴は笑いながら私の名前を呼ぶ。何と無く頭にきたので少し声を荒くする。

「兄貴！なんで反撃しないの！・・・・・・番長なのに！」

私はなぜかそのまま自分の部屋に引き返し、ベッドに飛び乗り涙を流した。

涙が止まってから昔の日記を眺める。そして、少し前の所を開く。
『・・・今日、私に新しい家族ができた。時雨と言うかなり変わった名前の兄貴ができた。性格はかなり優しい。』

そこまで読んで日記を閉じ、またベッドにダイビングする。

誰かが部屋をノックする音が聞こえる。母さんだろうか？

「・・・どうぞ。」

中に入って来たのは、やはり母さんであった。

「・・・蕾に少し話さないといけない事があるの。」

「・・・何の事？この前のテスト？兄貴よりは少し良かったよ。」

私が答えると母さんは首をふる

「・・・いいえ、時雨の事よ。何故あの子があんなに優しいかわかる？」

「・・・元からじゃない？それか兄貴は弱虫じゃないの？」

「・・・蕾もさっき聞いたと思うけど誰かとの約束の為よ。あの子は過去の記憶を罪として生きてるの。・・・蕾が来てから悪いけど記憶を封印させてもらったけどね。」

私は、いずれこの家族と別れないといけなくなる。

「・・・私には、関係ないよ！母さんは知ってるでしょう？私は悪魔なんだよ！」

「・・・時雨と後で話しをしなさい。」

そういつて部屋を出る母さんを私は睨んでいた。

それから少し時間がたった後、兄貴がやってきた。

「・・・兄貴、なんか用？」

兄貴は首を振り口を開けた。

「・・・実はね、僕が事件ばかりおこすからかな？・・・母さんが引越すと言いつ出したんだ。」

・・・。

「・・・兄貴はなんで今日ボロボロになって帰ってきたの？」

私は嫌な女だ。知ってる事をわざとまた聞き返す。

「・・・今日、あの人とわかれたんだ。そしたらさ、帰って来る途中で何かに襲われてね。気がついたらこんな格好になってたんだ。」

・・・彼女と別れた？

「・・・なんで彼女と別れたの？」

「・・・今日の朝、母さんに言われてたんだ。」

「・・・なんて？」

私は静かに聞き返す。

「・・・秘密。」

兄貴はそういつて部屋から出ていった。別に兄貴が教えてくれなくても母さんがいる。私は早速テレビを見ている母さんの隣に座り、先程兄貴がいていた朝の事を聞くことにした。

「・・・母さん、兄貴になんて言ったの？」

「・・・私はあの子に尋ねただけよ。・・・最近、蕾がひねくれてないかね。そしたらあの子はしっかりと頷いた。」

「・・・私はそんなにひねくれていただろうか？」

「・・・最後に私はあの子に最近、蕾きかまっているかと聞いたら彼は横に動かした。ただ、それだけよ。・・・顔がにやけるわよ。」

私はにやけた顔をしているだろうか？

「・・・今度の引っ越しで時雨と貴女が変わってくれたら嬉しいわ。」

「・・・母さん、私変われるかな？」

私の問いにしっかり頷く母さんは心強かった。

私はあっちについたら必ず変わろう。

・・・

「・・・剣治、いつこんなの知ったの？」

「・・・秘密だよ、時雨君。それよりなんか重い話だったね。コメディーには程遠い雰囲気だったよ。」

「うーん、それは言えてるかも・・・。剣治、なんかないかな？コメディーな話。」

「・・・ネタ切れかな？」

「・・・え、嘘！じゃあ僕の友達、霜崎剣治の一日！どうぞ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「剣治様、お目覚めの時間ですよ。」

生徒会長、霜崎 剣治の夏休みの華麗なる一日はまず、メイドさんに起こされ始まる。

「・・・おはよう、今日も起こしてくれてありがとう瑠美。」
瑠美に起こされた剣治は朝食を食べに大きなテーブルに座る。

『おはようございます！御主人様！』

テーブルの脇には右手と左手、更には両足を使っても数えることは出来ないくらいのメイドさんが控えている。

「ああ、おはようみんな。」

剣治はこれら全てのメイドさんの名前を全て覚えているが、面倒なので省略させてもらう。

「・・・メイドAさん、今日は君が当番だったかな？」

剣治は相手の事を思うので厳しく接する時がある。時雨とは違う優しさを持っている。

「ちょっと塩辛いかな？・・・君達の朝食が終わったら僕の部屋に来てくれ。」

「は、はい！わかりました！」

剣治が朝食を食べ終えた後、メイドさん達に朝の挨拶をする。

「・・・今日もみんな頑張ってほしいと思う！嫌になったら帰って結構！以上。」

解散していくメイドさん達。剣治の家ではメイドさん達が修行しているのだ。

朝食を食べた剣治は部屋に戻り魔界や天界からの書類に目を通す。

「・・・ふむ、魔界に未確認の魔物が出現。なるほど、今度時雨君を魔界に送りつけよう。」

そんな事をしていると剣治の部屋のドアを叩く音が聞こえてきた。

「・・・メイドAですっ！剣治様に呼ばれたので参りました！」

剣治は書類をかたずけた後、ドアを開けに行く。

「・・・さあ、どうぞ入りたまえ。入ったら椅子に座ってくれ君に話がある。」

怯えるメイドAを椅子に座らせ、剣治自身は先程の机に座る。

「・・・さて、僕の質問に答えてもらおうかな？質問はしないで返事は『はい』と『いいえ』で答えて欲しい。まず、君はこの仕事が好きかね？」

「は、はいっ！」

「次・・・。」

剣治の質問はそれから少しかかった。

「・・・これで全ての質問は終了だよ。これからも頑張ってくれたまえ。」

「は、はい！わかりました！」

「・・・君は元気がいいな？」

「はい！私は元気だけが取り柄ですから！」

首を振る剣治。彼が首を振る時はさらに何かを言う時の前触れである。

「・・・いや、君は元気で美しいメイドだ。・・・最後にここであつた事は黙っているように！誰かに聞かれたら酷い事をされたと言ってほしい。・・・何か質問はあるかね？」

メイドの間では剣治の部屋に呼ばれた場合、酷い事をされ帰って来ると噂になっている。当然、ここに初めて来たメイドAは先程から不思議に思っていた。

「・・・剣治様、貴方は優しいのになんで嘘を言わせるんですか？」

机を立ち、窓の外を眺めながら口を開く。

「・・・それはね、僕がシャイだからさ。」

シャイではなくキザではないだろうか？

「わかったかな？メイドAさん。」

微笑む剣治の歯が光ったのは目の錯覚だろう。

「は、はい！わかりました！失礼しました！」

そういつて退室するメイドAを微笑みながら見送る剣治。

「さて、生徒会長という仕事をこなしに行きますかね？」

剣治は学校に向かう為、リムジンに乗り込むのだった。

生徒会室の前までリムジンに送ってもらい、部屋の中に入る。すでに大体必要な面子は揃っている。

「・・・みんな、今回は校舎の掃除を行いたいと思う！」

「えーっ、めんどくさいよ！」

当然みんなの反感をかいあっさり撃沈かと思われたが剣治は別に大丈夫だった。

「……じゃあ、保坂君は帰ってよろしい！後、残っている焰君、舞君、春君も自由にしてい！」

そういわれ真っ先に扉を開け、帰ろうとする保坂を誰も止めなかった。（生徒会長補佐なのに仕事は何もしていない。）だが、今日はすぐにでていく保坂は何かにつかり後ろに十点をあげたくなるような倒れ込みをした。

息をのむ生徒会長以外のメンバー。生徒会長は一言呟く。

「……少し遅刻だよ、時雨君。」

遅刻した時雨は保坂を抱き留め、生徒会室に入って来た。

「ごめんなさい、遅れました！」

メンバーに動揺が走る。

「……ところで保坂さんはなんで外に出ようとしてたの？」

保坂以外のメンバーが口を揃えて『サボリ』と言う前に保坂が嘘を口走った。

「実はね、生徒会長が校舎の掃除をするといったから掃除道具を取りに行こうとしてたらあなたにぶつかっちゃった。てへっ！」

「あ、そうなんだ。さすが生徒会長補佐だね？ごめんね、邪魔したみたいでさ。怪我とかないかな？」

生徒会長はそろそろ他のメンバーが戦闘体制をとりそうなので話を始める事にした。

「さて、全員揃ったみたいなのでそろそろ始めようか？校舎は広い

ので二人組に別れたいと思う。なお、僕と時雨君はたまに手伝いに行くと思うからみんな頑張るように！以上。」

それから剣治と時雨は屋上を掃除する為に階段をのぼっていた。

「……剣治、校舎をこの人数で掃除するの無理じゃないかな？」

「大丈夫、天使化して時を止める。罪人天使ならできるのさとても平和的な使用法だと思わないかい？時雨君。」

相槌をうつ時雨は感心していた。

「うーん、さすが生徒会長だなあ。」

それから屋上を二人で綺麗にする。

「……時雨君は他のメンバーを手伝いに行ってくれないかな？後は少ないからここは僕がしておくからさ。」

紅い羽を生やした時雨は頷き、エールを送る。

「うん、頑張ってね！」

飛び去る時雨に手を振り時雨が完璧に見えなくなった後、剣治は呪文を唱える。

『我は大罪を背負う哀しき天使。そして天界と魔界を守護する悪魔！』

蒼い空が広がり、紅い地上が辺りを埋め尽くす。

紫の羽になった剣治は早速屋上を掃除する。

数分後、屋上はピカピカになった。

剣治が時雨と同じく手伝いに向かう為、階段を降りていると騒ぎ声が聞こえてくる。

「……ちょっと！保坂さん！時雨君から離れなさい！」

「うるさいなあ、窓拭いてたら落ちただけだよ？そんでたまたま時雨君が受け止めてくれただけだって。」

「……嘘いいなさいっ！」

「きゃっ！時雨君恐いっ！舞さんがいじめるよ。」

「抱き着くな〜〜！」

剣治は溜息を付かずに騒ぎを納めに階段から飛び降りるのだった。広い廊下では戦闘がくりひろがれそうだった。

雑巾が飛び交い、モップがそれを叩き落とす。（彼女達が本気で争うと校舎が掃除どころではなくなってしまう。）ちなみにモップを使っているのは時雨であり、彼のお陰で彼女達は雑巾まみれにならないのである。

「今日こそ倒してあげますわ！保坂さん。」

「そうよ！消えなさい！あなたに時雨君は必要ないわ！」

春は生徒会長を探しに旅立ちまだ帰っていない。（時雨が彼女にアイコンタクトで頼んだ。弟子？の春には分かったらしい。）

「へへーん、あたらないよーっだ！それっ！」

雑巾は時雨が全てたたき落としているので両者にはなかなか当たらない。

だが、時雨が廊下で滑り彼の顔に彼女達が投げた雑巾が全てクリティカルヒット！時雨は雑巾を受けて廊下の床に散った……。

当たった本人達はその場に固まった。

時雨は自力で雑巾から笑いながら這い出し彼女達に雑巾を投げた。投げた雑巾は全く見当違いな方向に行き、結果剣治の顔に当たった。

「……時雨君、君は掃除が終わった後、生徒会室に残っていてくれ。残りの者は早く割り当てられた箇所を終わらせること。以上！」

その言葉が始まりとなり、各自急いで掃除区域に戻っていく。

「ば、僕も誰かを手伝ってくるよ！」

逃げる時雨を剣治は後ろから掴み、雑巾が散乱している廊下が綺麗になるまで監視していたのは当たり前前の事である。（時雨以外に遊んでいたメンバーが廊下掃除を手伝ってようやく全ての掃除が終わった。）

「……お疲れ様でした！」

掃除が終わった後の生徒会室で最後の挨拶をする。 帰って行くメンバー。生徒会室には時雨と剣治が残る。

「・・・遊んでいた時雨君には少し話がある。例の店で話そう。」

剣治は今日書類の中に入っていた一つを持ち、時雨と一緒に例の店に向かった。ちなみに遊んで剣治に雑巾をぶつけた時雨はビクビクしながら店に向かった。

「やあ、みんな！」

剣治が店（冥土喫茶）に入ると何時ものようにメイドさん達は迎撃をする準備をする。

「まあ、待ってくれ。今日は時雨君を君達に献上しにきたんだ。・・・今から少しの間だけだが、好きなようにしていい。」

後から出て来た申し訳なさそうな時雨は剣治に押されメイドと言う名の海に落とされた。

「キャー時雨様よう。」

時雨が海で溺れるのを剣治はテーブルと言う名の豪華客船から眺めていた。

時雨が溺れてから少し経ち剣治は時雨を助けに行った。（メイドさん達を抱きしめ気絶させていった。） 救助された時雨はいつかのように服がヨレヨレになったり揉みくちやにされ気絶寸前で何か譫言を言っている状態。

「・・・うわー！あああああ！」 普通の状態に戻った時雨に剣治は書類を見せた。（時雨が復活するまで剣治はカメラで気絶していた時雨とメイドさんを撮りまくっていた。）

「・・・その書類に書いてあるように君に二学期は存在しない。」

『今回、マオウを退治していただきまして御礼を申し上げますと思います。早速本題に入ります。時雨様は今回、魔界地下支部の新しい魔王決定戦に出てもらいます。安心してください、優勝しても魔王になりません。魔界のプリンセスと一緒に頑張ってもらいます。』

「剣治先生！僕この文面よくわかりません！帰っていいですか？」

「聞き分けのない生徒には体罰が必要ですね？」

「せ、生徒！体罰はいけません！」

剣治は時雨の視界から消え後ろに回り込み時雨が振り向く前に・・・頭に拳を叩き込む！

「あたあ！」

「あべしっ！」

倒れ込む時雨を抱き上げテーブルに寝かせ一度店の奥に消えダンボールを持ってくる。

時雨をダンボールに入れてガムテープを張り付け行き先を書く。

「・・・行き先は魔界、地下。これでいいな。・・・頑張っ

くれ、時雨君！」

メイド長にダンボール（時雨）を預け、家に帰る。

「あ、時雨君の家に行って来ないといけないな。」

時雨がこれからどうなるかわからないので言い訳を考える。

「……千夏さんを時雨君から分離させよう。」

一旦、喫茶に戻り時雨から千夏を引っ張り出す。（方法は不明。）

気絶している千夏を背負い時雨が住んでいる家に行く。家の前で千夏を起こして事情を説明。彼の影武者になってほしいと説得する。
「……うーん、無料でするには大変だなあー。何か欲しいなあー？」

剣治におねだりする千夏は彼の想像の範囲内であった。

「……時雨君が帰ってくるまでばれなかったら貴女に身体をあげますよ。新しい身体をね？」

顔は時雨の千夏はその条件に食いついて離れなかった。

「お帰りなさい！ 剣治様！」

帰り着いた剣治を迎えるメイドさん達。剣治は右手を挙げ、その返事をして自分の部屋に入り、既に運ばれている晩御飯を彼の側近のメイドさんと共に食べる。

「……瑠美、今日は疲れたからこのまま寝るよ……お休み。」

「はい、お休みなさいませ、剣治様。」

そういつて人形の瑠美にお休みのキスをする。

こうして剣治の一日は静かに幕を降ろした。・・・・・・・・

「しかしまあ、千夏さん時雨君がいなくなった事ばれてませんかね？」

「当たり前だよ、剣治君。僕は時雨だよ？」

「うーん、完璧だ。蕾ちゃんにはばれてませんか？」

「大丈夫、多分！」

「・・・・心配ですね。早く時雨君が帰ってくればいいのですが。」

「そうだねえー。記念すべき二十回記念に主人公が不在はおかしいかな？」

「ま、『アンノウン・エンジェル』はこれで終わりですがね。」

「やっぱりかあ。続編は？」

「今の所はわかりませんね。」

「じゃあ時雨は？」

「知りません。後はいつも作者が言ってるように『一人でもいいから時雨君がどうなったか気になってくれたら続きを書きます』となるでしょう。」

「てか、そんな事言ってたっけ？そして一人もいなかったら？」

「・・・悲しいですね。まあ、作者には頑張ってもらいましょう。題名かわるらしいですし、僕たちは次回が出てあまり出てこれないかもしれません。」

「ま、マジで？」

「マジです。・・・それでは、最後を閉めたのは僕こと、剣治と」

「絶世の美人！千夏でしたあ！みんな応援ありがとねえ！」

―完―

「ここはどこなんだあゝ！主人公を消して綺麗に閉めないでよおー。」

そのにじゅう さよならっ！かな？（後書き）

皆様！ありがとうございます！時雨の生活はハッピーに終わりました！（冗談です。）契約もしましたし（かなりやりすぎ。）友達もいっぱい出来ました！（実はまだ数えるくらいしかいません。）そんな時雨にエールを送ってくれてありがとうございます！続編を書けたらやはり時雨が一人しかない状況を書いていきたいと思っています。まあ、誰かが続編をみたいなら書きたいと思います。さて、最後にもう一度きちんと挨拶して終わりたいと思います！『アンノウン・エンジェル』を読んでくれて有り難うございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7677a/>

アンノウン・エンジェル

2010年10月29日12時51分発行